ACE × IS

ロマネスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＣＥ　×　ＩＳ

【Ｎコード】
Ｎ１２４０Ｓ

【作者名】
ロマネスク

【あらすじ】
死んだはずの男が目を覚ますと、そこは学園だった…負の感情しか抱いていなかった男は一体どういった感情を抱くのか？

プロローグ（前書き）

元来のＡＣＥ好きと最近ＩＳにはまっていることから、変な化学反応によって始まったものです。最終到達のビジョンが見えていないので結構筋書きが右往左往すると思われます。更新は不定期です。

プロローグ

――――――終わった。

落ちゆく真ドラゴンの中、２つの世界を壊そうとした男――――ベルクトは自分の計画ともうすぐ爆発により散る自分の命に対してそんな感想しか出てこなかった。
直にワームホールはもうひとりの自分――――バレルによって閉ざされるだろう。戦いに敗れた自分には、もう世界をどうにかする力なんて残っていない。
今度こそ完全にチェックメイトだ。
父親に自身の存在を否定され、繰り返される争い、クダンの限界に怯えた世界。絶望しかない世界から生まれた世界を壊すという歪んだ望みが今潰えるのだ。
ようやくこの絶望しかない世界から解放される、そんな諦観にも似た心境からでた感想だった。

「ベルクト――――――！！」
「バレル、危険よ！」

そんな中、敵機――――――イクスブラウからの通信が耳を打つ。
バレルとその相棒（パートナー）――――――フェイの声だ。
こちらに近づいてきている。

「脱出しろ！！」
俺を助ける気か…だが
「もう……終わった。」

そう、終わったんだよ。俺にはもう何も残っていない。生きる意味

さえない。
だから脱出したところで何の意味もない。

「終わってない！！」
なのにあいつは、それを否定する。何故だ？
「どちらかは否定される。そのことはわかっていたはずだ。」

同じ人間は存在しない。存在しているのがおかしいのだ。だから片方は消える。
もとより自分の全てをかけて敗れたのだ。俺に価値などない。

「そんなの……知るかよ。」
「……。」
なんだ、それは…

「俺達は違うだろ！！俺は俺だ。
君は……君だ！」
「……！」

（…フッ、ハハ。さっきまで、俺と同じ存在だと言っていたのになんだ、それは。
今度は否定するのか？お前も父親（アイツ）と同じだな）

そう胸の内で呟きながらも、父親と違いバレルの言葉に憎しみを持った訳ではない。
むしろ、初めて暖かい何かを感じた。
バレルとは違うと否定した事に変わりはない。
だが、父親は人としても否定していたのに対し、バレルの言葉は人間としての別個体、1人の人間として自分を見た言葉だったからだ。

（父親に存在を否定された俺を、殺したいと憎んだ相手が存在を肯定する…）
バレルの言葉を噛み締めるように目を閉じ、俯く。
「そうか……。」
（俺は誰かに自分を肯定されたかったのか…バレルではない存在として
結局俺はバレルという名を捨てきれていなかったのだな。）

真ドラゴンの内部、闇の中で膝をついて、俯いていたベルクトが顔を上げた。
そこには憑きものが取れたようなどこか清々しさを感じる表情があった。
「なら……ここからはお前だけの道だ。」
真ドラゴンの腕を振り払い、その風圧でイクスブラウを遠ざける。
「うわぁぁぁぁ！！」
脱出しても、これだけの騒乱を起こしたのだ。この世界に居場所などない。
それを口で言ってもコイツは納得しないだろう。
（だから少々乱暴にさせてもらった。コイツを爆発に巻き込むわけにはいかない。）
感覚でもう保たないと分かる。
（……ありがとう、バレル）

真ドラゴンは爆散し、爆炎の中から光がワームホールに向かっていった。

「……うっ」
ベルクトが目を覚ますと灰色の天井だった。

（俺は……ベッドに寝ているのか…？
いや、そもそも何故生きている？）

「気がついたか？」

プロローグ（後書き）

始まりました。次はＩＳ勢を出します。

アナザープロローグ　（前書き）

本編に入るつもりがプロローグの最後に至るまでの経緯を書くうちに、千冬視点のプロローグになってしまいました。

アナザープロローグ

――――遡ること2日前。

その日、新年度から一年生寮の寮長になる織斑千冬は職務が終わった後、そのための準備――寮長室に荷物を詰め込む作業――をしていた。

「…こんなものか」

一通り使う物を整理し終えた頃には辺りは暗く、静まりかえっていた。時計を見ると日付が変わる手前だ。それほど荷物があるわけでもなかったが、随分と時間が経ってしまった。

（存外手間取ったな…シャワーを浴びて明日に備えるか）

教員、寮長としては早いのでは？と思われる。だが、今日は当直から外れているし、まだ寮には生徒は入っていないので見回りをする必要もない。騒がしい年頃の女子共がいない束の間の休息だ。

――――近日中には日本国外からの生徒が来るので本当に束の間だが…

何故か疲れが増すような気配がした千冬が何の気なしに外に目をやると、視界の端が急に明るくなった。

（職員の見回りか…）

そう判断し意識を外そうとした瞬間、光が霧散した。

（なんだ…？）

まるで周囲の闇に溶け込むかのように光が消えた。懐中電灯ならスッと消えるはずである。仮にそうだとしても此処まで点けて来なかったのに、わざわざ点けて消す意味が分からない。そもそも道には外灯があるので脇の茂みに入っていきでもしない限り視界は十分確保されている。

不審に思った彼女は様子を見に行こうと部屋を出た。

（ここら辺だと思うのだが…異常はないな。思い過ごしだったか？）
寮から校舎への道にある橋まで来たが不審な物も痕跡もなく、取り越し苦労と思い踵を返そうとしたときだった。
（……？）
視界に違和感を覚え、注意深くもう一度周囲を見回す。
（腕…？）
道の脇にある植え込みの向こう側に右腕が見えた。見え方から考えるに植え込みのすぐ近くに俯せに倒れているようだ。
千冬は警戒をしつつ、倒れている人物に近づく。倒れている人物はこちらを油断させるためか全くの反応を示さない。
全身が見える位置まで行くと相手が気を失っていることが分かり、千冬は警戒を緩め、怪しい物を持っていないか調べるために体に触れていく。
（見たことのない服装だな。いや、それよりも…
この体つきは、男だな。）
顔を確認しようと、この男を仰向けにしたら何かが落ちた。
（！？これは拳銃……やれやれ、面倒なことになりそうだ…）
千冬は再び警戒を強め、拳銃を没収し、他にも危険な物を持っていないか確認する。
（換えの弾丸にナイフ。他にはないな……
まだ少年だな。見たところ外傷もないが…ん？）
めぼしい物は全て没収し、少年が他には何も持っていないことを確認して、ひとまず懲罰部屋に連れて行こうとした時、少年のすぐ側にアクセサリーらしきものが落ちていることに気がついた。
（こいつのものか？持って行き、調べるとしよう）
身元を証明する可能性と強奪されたＩＳの可能性もあるため、それも回収し少年を運んでいく。
懲罰部屋に少年を放り込んでから寮長室の電話を使い、内線で当直の先生に連絡。不審者発見の旨を伝え、保健医の派遣と例のアクセ

サリーを解析する手筈を頼んだ。もうすぐでこちらに着くことだろう。時計を見ると既に日付は変わっている。
（やれやれ、今夜も結局寝れないな。）

夜が明け、千冬は職員室で例の少年の情報に目を通していた。報告によると、少年には特に目立った外傷はなく、軽い筋肉疲労が見られる程度ですぐに回復するだろう、との診断結果だった。
そして、アクセサリーの解析結果は――――
ＩＳではないが謎とのことだった。
ＩＳではないことは分かった。強奪されているＩＳもあるにはあるが、識別信号がないのでその可能性は否定されたのだ。
ただ、構成物質は、存在する物質に非常に酷似した物であるが組成や精製が違う、全くの未知の物とのことだ。それ以上のことは、詳しく検査しようとしても結果がエラーやデタラメな数値になってしまうので、現状では謎という結果になっている。
（これは本人に聞くしかない…か
　早く目覚めてくれよ。忙しくなる前に片付けたいのでな。）
目を通し終えた千冬は、新学期が始まる前にこの案件が片付くことを願い、自分の仕事に戻った。

そして翌日、職務終了後に千冬は少年がいる懲罰部屋に向かっている。目的は事情聴取。第一発見者である彼女がそのままこの件の担当となったのだ。
しかし、彼女はこの訪問が無駄足に終わるだろうと思っている。昨日の夜と今日の朝にも見に来たが、まだ目覚めていなかったからだ。一応は確認のためこうして向かっているわけだが、どうせ目覚めていないだろうと期待せずに部屋に入った。

「……うっ」

だが、予想は裏切られた。良い意味で。
（起きたか、これで事態が収拾するな）

「気がついたか？」
（さぁ、さっさと吐いてもらうぞ）

アナザープロローグ　（後書き）

本編に入ろうとしたら、プロローグの倍以上になるのでキリの良いところでここまでとしました。

第０１話　現状把握（前書き）

前回のアナザープロローグですが投稿後、一度加筆修正しました。
活動報告でも言いましたが、念のためにこちらでも言っておきます。
まぁ、激変ではないですので、そこまで支障はでないと思います。
今回プロローグの３倍くらいありますし、若干説明くさいです。

第０１話　現状把握

「クッ！」
反射的に警戒態勢を取ろうと身を起こそうとするが、僅かに痛みが走り動作が緩慢になる。
ベルクトが声のする方向を見ると、どこか狼を思わせる雰囲気を持つ長身の女性が立っていた。

「無理するな。軽い筋肉疲労だが満足には動けまい。
逃亡は諦めろ。さて、話せるか？」

そう言い、警戒しながら女性がこちらに近づいてくる。だが、ベルクトはそれに警戒しない。逃亡できないと悟ったからではない。もとより逃亡する気はないのだから。
なら何故？それは、

（軽い筋肉疲労…だと？ありえない…
奇跡的に真ドラゴンの爆発で死ななかったとしても、そんな軽いもので済むわけがない。
どういうことだ……？）
自分の体の状態に戸惑っていたからだ。
この状況で違うことを考えるのは軍人としてどうかと思われる。仮にも軍人だったのだから目の前のことに専念すべきだ。だが死を確信し、それを受け入れていたのに自分が生きていれば、いくら軍人であろうと冷静な判断ができなくても仕方がないことだろう。

「おい、聞いているのか？」

反応がないので、不審に思ったらしい女性が再度声をかけてきた。

その声で、とりあえずは思考を切り換える。まずは相手の名前を聞こうとし、
「誰だ、貴様は？」
そう言ったら、なにか変な空気になった。まるで、笑えない冗談でも言ったような。
（なんだ？）
言葉は分かるので、通じてないという訳ではないだろう。なら何故？

「はぁ…寝ぼけているのか？」

呆れられた。
しかもこちらの質問を無視された。
「寝ぼけてなどいない。貴様は誰なんだ？」

（つまらん冗談だな…）
「はぁ…寝ぼけているのか？」
千冬はこの少年の質問をそう判断して無視した。千冬を知らないなど、このご時世ありえないし、相手が知らないはずがないと確信しているからだ。
別にこれは自惚れでも思いこみでもなく事実に基づくことから判断した結果だ。彼女は公式戦無敗の初代ブリュンヒルデであり、最強と称されているＩＳ操縦者である。幼稚園児でも知っている。ましてや、このＩＳ学園に侵入して来たのだからＩＳ関係の知識を少しでも持っているのは確実だ。ならば、知らないなどありえない。
「寝ぼけてなどいない。貴様は誰なんだ？」
しかし、少年は再度名を尋ねてきた。流石にコレはおかしい。通

じなかった冗談を再度するにしてもこの状況では自分の首を絞めるだけだ。だとすれば、
（本当に知らない？なんだ、こいつ？）
「織斑千冬だ。で、そういうお前は？
まさか、自分は名乗らないなどとは言わないだろうな？」
別に隠すことでもないので名前を教えてやり、少年の名前を尋ねる。
（さっさと終わらせよう）
椅子を持って行き、近くに座り、事情聴取の準備をする。

「…ベルクトだ」

「ベルクト…か。早速だが事情聴取をする。
拒否権はないからな」

（事情聴取だと？そんな物したって、死刑しかないだろうに）
疑問に思ったが、それよりも気になることがある。
「ああ、構わない。だがその前に、いくつか聞きたいことがある」

「こちらがする側なのだが…まぁいい。
内容によるが、それくらいは構わない」

「感謝する。まず、どうやって俺は助かったんだ？」

「どうやってもなにもお前が倒れていたのを運んだだけだ。
特に処置はしていない」

（…なんだそれは…不可思議にも程があるな…
…もうこれについて考えるのはやめよう…。）

「…何処に倒れていたんだ？」
「寮に続く道の脇だ」
「寮…？ここは何かの施設なのか？」
「まぁ、施設と言えばそうだが、詳細は言えん。
　せいぜい、まだＩＳ学園内だということくらいだ」
（学園か…ＩＳ？）
　もう学園であってもさほど驚かない。半ば投げやりで、学園の前のＩＳの意味が気になった。
「ＩＳとはどういう意味だ？」
　そう質問したら、織斑千冬は眉間に皺を寄せた。
「…ＩＳはインフィニット・ストラトスの略だろうが。
　ここはＩＳ操縦者を育成することを目的とした学園。
　よって、ＩＳ学園だ。
　ベルクト…お前記憶喪失か？」
（何か常識を疑われている気がするな。
　まぁ、こちらのほうが聞きやすいし、最後に否定すればいいか）
「ＩＳ、インフィニット・ストラトスとはなんだ？」
「…端的に言ってしまえば、世界最強の機動兵器だ」
　ベルクトはようやく自分が違う世界に来たことを理解した。世界最強なのにどちらの世界でもＩＳという兵器は聞いたことがないからだ。
（だから、事情聴取などと言ったのか…。

差し詰め俺はこの学園に侵入した、という扱いだろうな）
「礼を言う。だいたい自分が置かれている状況は分かった。
後、俺は記憶喪失ではない。それらは初めて知った」
「…記憶喪失ではないと言ったな？では、その手の言い逃れはできんぞ？
では聞こうか。ベルクト、お前はどこから来た？」
（どこから来た…？入ってきた、どうやって来た、ではなく？）
「質問の仕方に何か含みがあるように感じるのだが？」

「別に情報を整理して質問しただけだ。
お前がさっき言っただろう。記憶喪失ではないと。
にも関わらずお前は、ＩＳを初めて知った、と言った。
まず、それがおかしい。
ＩＳが登場したのはそんなに最近ではない、十年前だ。
お前の年齢は見たところ１０代後半だろう。なら小学生ではあったはず。
つまり、世界にその力を示した『あの事件』を知っているはずだ。
知らない、完全に忘れるなんてありえない。
そして、もう一つはお前がここにいるということだ。
普通…というか下準備としてまず絶対、侵入する場所は事前に調べるはずだ。
だが、お前はここを知らない。
その上、お前が倒れていた付近や他の場所にも、
侵入する際に使用されたと思われるような道具も機材も無かった。
この学園は何の下準備もなしに入ってこられるような場所ではない。
立地的にも警備的にもな。
これでは、学園内にお前がいきなり現れたとしか思えない。まる

で転移だな。
さっきの事は転移してきた事故とも取れるが、記憶喪失ではないと言った。
だとすると、お前はまるで、まったく異なる世界から来たみたいではないか？
だから、お前は何か違うと考え、変わった言い回しになったというわけだ。
まぁ、最後の世界云々はかなり無茶苦茶だがな…」

（驚いた…この女、かなり頭が切れる上に、思考が柔軟だな。
転移、しかも異世界。そんなもの真っ先に否定するだろうに）
異世界の存在を信じるなんて、実際に体験したやつか相当頭がおめでたいやつだろう。
だが、この千冬という女性はどちらでもない。
先の発言や佇まいからそれは分かる。
「随分ぶっ飛んでいるな。俺が嘘をついている可能性があるぞ？」
苦笑混じりにそう返す。

「……私の知り合いにぶっ飛んだやつがいるのでな。
それにお前は嘘などついていないさ。
お前の表情、雰囲気からはどこか達観した印象を受けた。
私は武術を嗜んでいるのでな、そういうのには聡いんだ」

何か最初は苦々しげに言ったが、後半はキッパリとした口調だった。
それは信頼とも呼べるものだった。
（あぁ、これは良いな。だから奴らはあんなに強かったのか…）
初めての他人からの信頼に、自分がバレル達に敗れた理由を感じた。
ベルクトは、この織斑千冬という女性は信用できると思い、話す

ことを決意した。
「…俺はここと違う世界から来た」

それから、ベルクトは自分がいた世界のことを話した。
人類同士の七度の戦争。
インベーダー、抗体コーラリアンといった人類を脅かす異形の存在。
重陽子ミサイル、サマー・オブ・ラブ、コロニー落としなどによる人類滅亡の危機。
そして、軍の主力が巨大な機動兵器であり、自分はそれを駆る軍人だったという事も話した。

（本当に異世界から来たか…。
にしても随分と争いばかりだな。
世界が変わっても人は変わらんということか…）
「流石にぶっ飛びすぎだと思ったが、正解とはな。
で、何故こちらの世界に？」

「偶然だと思う」

「思う？」

「俺も詳しくは分からない。
…軍の作戦行動中に撃墜されて、気がついたらここで寝ていた」

「撃墜…だからあんな質問をしてきたのか。
詳しく…とは、ある程度の予測はあるのだな？」

「ああ…可能性として、おそらくバルドナ・ドライブだ。
あれは異なる時空を繋ぐものだ。
おそらく、撃墜されたときに何かが起こったと考えられる」

（そんな物が存在しているのか…）
「何故そんなことが起こったんだ…？」
これは別に返答を期待して発した訳ではなかったのだが、返ってきた。

「…俺が鍵だったからだろう」

「鍵…？」

「あれを起動させるためのアクセス権限を俺は持っていた…」

「…そうか」
（…なにか触れられたくないことのようだな）
絞り出すような小さい声でそう言われれば、何かあることは容易に想像できた。千冬自身過去には色々とあるので、そういう気持ちは理解できる。なので、深くは聞かなかった。
だが常なら、侵入者にこのような話をされても更に踏み込んで聞く。そうしなかったのは、ベルクトをある程度信用し、話すべき事は話すだろうと考えたからだ。
――――実際には結構大変な事を言ってないのだが、もうその気はないのでよいだろう。
「今度は、この世界のことを話そうか」

ＩＳは、最初は宇宙空間での活動を想定したマルチ・フォームスーツだった。

しかし、『白騎士事件』により兵器としての有用性が示され、既存の軍事バランスを崩壊させた。その　後、条約により兵器としての運用は禁止されている。
当初の目的は衰退し、現在は専ら競技種目に利用されている。
しかし、有事の際には重要な戦力になる。
そして、ＩＳは女性にしか扱えないため、ここ１０年で女性優遇社会が形成された。
しかし、先日例外である唯一の男性操縦者が現れた。

「まぁ、こんなところだ。そちらに比べたら随分と平和だろう？」

「そうだな…」

時計を見るとここに来て随分と経っていることに気づいた。
（流石に色々と話しすぎたな。）
「今日はここまでにするとしよう。
明日も来るからしっかり休んでおけよ？
じゃあな」
椅子を片付け、部屋を後にする。

「ああ、よろしく頼む」

随分と優しい――今までの彼からは想像できない――声音の挨拶が閉じゆくと扉の向こうから聞こえた気がした。

「……ん？」
寮長室に向かっていた千冬だったが、途中でふと思い出した。
（そういえば、あのアクセサリーのこと聞き忘れていたな。

まぁいい、明日受け取ってきて聞くとしよう）
用件を忘れていたが別にそれによる焦りは感じていない。
千冬の心中は、新学期前に尋問のような陰湿なものをしなくて済むと分かり穏やかだった。

第０１話　現状把握（後書き）

次回であの機体？を登場させます。予想されてるでしょうけど、若干独自解釈＆ご都合主義になる可能性ありです。

第０２話　性能テスト（前書き）

初登場なので、機体と戦闘描写がか～な～り説明くさいです。
ＡＣＥをやったことがある人は楽に想像できるでしょうけど、知らない人はどうでしょうか。

第０２話　性能テスト

「気分はどうだ、ベルクト」

「悪くない、織斑千冬…今日は随分早いな」

翌日、午後から千冬はベルクトの所に来ていた。
始業式の日まで１週間をきっていたが、通常の職務は一山越え、彼女がいなければならないような事も今日はもうない。なので、後のことは彼女が新学期から担当するクラスの副担任である山田先生に任せている。することがないなら、やるべき事に当てようと彼女は考えたわけだ。何もなければ、始業式前日まではこのようなスケジュールになるだろう。

「なに、時間の有効活用だ。軍人だったのなら分かるだろう？
さて、昨日の続きだ。
ベルクト、コレはお前の物か？」
そういって、あのアクセサリーを取り出し、奴に見せる。

「…いや覚えはないが…」
千冬が差し出したアクセサリー――血のように朱い翼と闇のように黒い翼が交差し包み込んでいるようなデザインのネックレス。隙間から紫が垣間見える――を受け取り、手にとって確かめる。
（この色合い……まるで）
「ブラッドアーク」

――キュイン、ピピッ――
『認証完了』

一瞬電子音が鳴り、僅かな電子音声と共にホログラムウィンドウが出てくる。
「なんだこれは…！？」
表示される内容は何かのカタログスペックのようだが、こんな物を持っていた記憶がないベルクトは、突然の事態に困惑する。
「……未登録のＩＳだと…！？」
「ＩＳ？これが…？」
初めて見るＩＳ（？）をじっくりと見る。
（ただのネックレスにしか見えない…）
「…それは、先日検査した時にはＩＳの可能性は否定された。
ＩＳコアが確認されなかったからな。
未知の物という事は判明したが詳細は不明。
結果、謎という判断が下された…
だが、それは紛れもなくＩＳの技術だ。
もう一度、それを検査させてもらう」
そう言い、彼女は俺からネックレスを取り上げると部屋を後にした。
（これは…面倒なことになるな。
彼女もそれが分かっているようだ…）
１人残されたベルクトは自分の今後に怪しい雲行きを感じた。だが、しばらくして話し相手が消えて暇になったことに気づき、どう時間を潰すか悩み始めた。
「起きろ、ベルクト」

窓から差し込む光が消え、眠りについていたベルクトだったが、すぐに目を覚ます。見ると千冬がなにやら袋を持って立っていた。

「事情聴取か？」

検査結果がでて、それについての質問かと思ったが、それにしては様子が変だ。

「…これに着替えろ。

着替えたら出てこい」

そう言い、袋を渡すと彼女は部屋を出た。中身は水着？のようなものだった。だが、

（こ、これは一体どういう事だ…？）

入っていたのはどう見ても女性用の物だった。

そこからベルクトはしばらくの間葛藤した後……諦めて着替えた。

出てきた時に千冬が、時間が掛かったことに文句を言わなかったのは心中を察してくれたのだと思いたい。だが、

「いくぞ、ついてこい」

そう言いながら前を向く横顔は、若干ぴくついていた……。

――――人になれたのに、何か人としての尊厳を失った気がするベルクトであった。

千冬に連れられた場所はアリーナのピットだった。そこまで来てようやく彼女が口を開いた。

「…あのアクセサリーだが……ＩＳではない。
ＩＳなら当然ある機能の大半が見当たらない。
僅かに確認できた物は『粒子変換』だ。
他はせいぜい似ている程度。
お前のそれはＩＳもどきと言ったところだ」

（まぁ、当然だな。
他世界から来た俺がＩＳを持っている方がおかしい）
「……で何故、俺はここに連れてこられたんだ」
そうだ。それを伝えるだけなら、あの部屋でも十分だったはずだ。
にも関わらず、外に連れ出したということは何かあそこではできないことをするはずだ。

「実は、そのＩＳもどきだが…大半がブラックボックス化されていてな。
こちらのアクセスもほとんど受け付けん。
それで、実稼働のデータを取るしかないということになり、
お前に動かしてもらおうという訳だ」

「…何故俺に？　わざわざ脱走する危険を冒してまで俺にやらせずとも、誰か別の奴にやらせればいいだろう？」

「専用機と同じ扱いでな。
お前にしか反応しない。
それに、そうでなくとも不審者が持っていた未知のＩＳもどきなど、
誰も好き好んで乗りたくないだろう？
それにお前は脱走せんだろう」

「成る程…それもそうだな。
しかし、お前の信頼は嬉しいが周りがよく許可したな？」

「あぁ、私が監視役をやることを言ったら、存外すんなり降りたよ。
まぁ、それでも万一に備え何人かは外に待機している。
配置準備とおおっぴらにはできんので、こんな時間帯になった」

「……この格好は何故だ？」

「…男用のＩＳスーツがないからだ。
データ収集が目的のため我慢してくれ」

「……了解した。
早く始めてしまおう…」

「それでは展開しろ。
機体をイメージすれば展開するはずだ」

「分かった」
ネックレスを受け取り、首にかける。
（イメージ…ブラッドアークをイメージすればいいのか）
「ブラッドアーク」
瞬間ネックレスから光が溢れ出し、全身を包み込んだ。光が収ま

ったときにはＩＳもどきをまとったベルクトの姿があった。

「よし、展開できたな」

「これが…ＩＳ」

ベルクトの姿はその名の通り、かつての乗機――――ブラッドアークを模した物だった。

全体的なフォルムは流線形と直線が混在したもの。

漆黒の装甲が大部分を占め、間接付近などの僅かな部分に朱色があるという配色。

背中から突き出るようにある推進機（スラスター）。

胴体部分はプレートのようなもので包まれ、胸部の中央部分が騎士甲冑のように前方に突き出ており、その部分の下には刃のような三角形の突起がある。胸部部分の両側は中央に沿うように僅かに盛り上がっている。

上腕部、腕の付け根部分は後ろに伸びるような形状の装甲になっており、その後ろにはバインダー――菱形状のプレートに身の丈ほどの長さがある三角柱を組み合わせたような形状――が非固定浮遊（アンロック・ユニット）部位として存在している。

前腕部は飾りのない直線的なデザインの装甲となっており、マニュピレーターは甲部分が黒く、同色の籠手が装着されている。右手には銃身が短く、握り手（グリップ）部分を上下から挟むような構造をした銃が握られている。

脚部はロングブーツのような細く洗練された装甲、踵には推進機となる小さなリングがある。

頭部は胸部パーツに合わせるような形で、流線形をやや直線的にした後ろに長いヘルメットのようものが途中で二段に分かれた形状をしている。その前頭部にも刃のような三角形の突起がある。目元はステンドグラスのような模様がある水色のバイザーで覆われており、顎間接から顎先にかけてヘルメットからパーツが伸びていて、

頭がほぼ包まれている状態だ。そして、後頭部付近には胴体が通りそうな程巨大なリングがある。
その姿はまるで、
「…堕天使みたいな機体だな。
それにほぼ全身装甲（フルスキン）…」
彼女がそう言うのも頷ける。
機体にあるリングからは機械化された天使を連想でき、機体名を直訳すれば「血の天使」となる。堕天使と言うには相応しい様相であり、名である。
「動かし方は分かるか？」
「…少し待ってくれ」
基本動作、操縦方法、性能、特性、現在の装備、行動範囲、センサー精度、レーダーレベル、アーマー耐久値、出力限界、その他諸々の情報が次々と流れ込んでくる。だが、流石に一瞬では処理しきれないので、時間を貰う。しばらくしたら落ち着いたので情報を整理する。
（…見たことのない単語と閲覧不可能があるな…
見たことがないのはＩＳとしての機能だとして…
閲覧不可能…？
スペックは基本、ブラッドアークと同じ…
しかし、ハイマニューバモードは無理だな…
武装に関しては問題ない）
「大丈夫だ。だいたい理解した。」
「では、外部入力もしくは出力用の端末はあるか？」

「…ある」

「ならば、それを出せ。
稼働前の状態のデータ収集とモニタールームへの回線を繋げる」

そう言われたので設定画面と入出力用の端末を展開すると、小型の端末を用い彼女が操作していった。

「…よし、ではアリーナの方へ出ろ。
ピット・ゲートは向こうだ」

「了解した」
ベルクトはゲートに向き直り、ゲートが開くのを待つ。
ブラッドアークの構造上カタパルトは使用できない。なので、ゲートが開ききったのを確認したベルクトはその場から浮き上がり、推進機を吹かして発進する。

アリーナの真ん中くらいに来た時に通信が入った。
『よし、そこでいい。では今からブラッドアークの性能テストを行う。
ベルクト、今からターゲットを５０機出す。
それらを持てる武装全てを使って撃墜しろ』

「了解した」

『では始めろ』

その言葉と共にアリーナ内にターゲットが出現する。ターゲット

もホログラムのようだが実体があるものだ。ただの的のような物から、バルーンのような形状で微妙に動いている物もある。
（まずは確認だな）
首の両脇にある肩部の装甲が上に展開（スライド）し、それにより生じた間から砲門が覗く。ターゲットの１つ――ただの的のようなもの――に狙いを定め、機関砲――――レイズガンを放つ。弾が当たったターゲットは砕け散り、消滅する。
（当たれば、それでいい…か）
これはどれくらいの強度なのかと武器の使用方法の確認だ。
手持ち武器以外はイメージを持つだけで使用できると先の情報で分かっていた。だが、実際に使用するまで半信半疑だったのだ。そのために全武装中、最も威力が低く、内蔵武器であるレイズガンを使用した。
（次は、機動性）
背中と踵にある推進機を吹かし、フィールドを駆ける。駆けながら、その間にある的を右手の銃――――ブラッドシットライフルで撃ち抜いていく。
（速度も上々、旋回性能も悪くない。
だが、やはり違和感があるな）
性能自体には満足したが、如何せん操作に戸惑う。原因は意識の齟齬だ。
ＩＳは手足の延長のように動かしているが、元となったこの機体の操縦方法はそうではない。コックピットでモニターと計器類に囲まれ、操縦桿を握って操作していたのだ。それでエース級の者達と死闘を繰り広げてきたのだから当然練度は高い。故にそれが邪魔をして、反応が鈍る。
（こちらの方が多彩な動きができるだろうが、
慣れるまで時間がかかるな）
思考している最中も、左前腕部の装甲下部から発生させたエネルギー刃――――カオスブレードですれ違い様にバルーンを切り捨て

ていく。
（まぁいい、今は確認に徹するとしよう）
バインダーが展開――菱形状のプレートを両側から挟んでいたウイングと三角柱状のパーツが稼働し三つ叉槍のように前方に起こされる――され、バインダーの間から紫色の極光が放たれる。光――――デモニック・ダークネス・マキシマムは斜線上にあったターゲットを飲み込み、アリーナ上空の見えない何かに当たり消滅する。既にターゲットは４割を切った。
続いて、それぞれが離れたターゲットを４機ロックオン。脚部、膨脛部分の装甲に内蔵されているミサイルランチャーから射出された８基のミサイルが向かう。着弾により発生した爆風で、バルーンを一カ所に誘導する。
（纏めて叩く…！）
「朽ちろ…！」
再び、バインダーを展開する。だが、今度は紫色の極光ではなく、黒いエネルギー球が大量に撒き散らされる。これが本来のデモニック・ダークネスだ。
これにより、全てのターゲットは撃墜された。

『テストは終了だ。ピットに戻れ』

ピットに戻り、稼働後の状態のデータを千冬に収集してもらっている。
「手を煩わせるな…」

「まったくだ。
どうにかならんのか、お前の機体は。
せめてお前がいなくても閲覧ができればいいんだが」

（確かにわざわざ俺を呼ばなくて済めばいろいろと楽だな。
どうにかならないのか……？）
データを取る度にベルクトが起動させねばならず、万一のための警備もしなければならない。毎回こんな夜中にせねばならないので職員の不満も多いだろう。なにより、それによって自分にこうして普通に接してくれる彼女に苦労を掛けていることを申し訳なく思う。
そう考えていた時、ブラッドアークが何か処理している感じがした。

――ピピッ、ブゥン――
――受理。織斑千冬にアクセスを許可――

「…ベルクト、これは？」

「…どうやら俺以外で織斑千冬、お前のみ認めたようだ。
これで俺なしでもデータが取れるだろう」

「ほぅ、それは本当か？
ならもう解除して、そいつを渡してくれ」

「了解した」
解除を念じると装甲が光となり、最終的に胸元に集まる。ネックレスに戻ったブラッドアークを千冬に渡すと、彼女は画面を出してみる。

「本当になっているな。
よし、戻るぞ」

「ご苦労だったな。今日はもう休んで構わん。
と言っても、もうすぐ明日だが。
……解析結果次第でお前の処遇が決まる。
一応身の振り方を考えておけ。
じゃあな」

（どうせ、一度は死んだ身だ。今更、たいして驚かんさ…。
それにしても、得体の知れない男に随分と親切だな…）

「フッ、本当に良い女だ…」

第０２話　性能テスト（後書き）

戦闘がたぶん、面白くなかったと思いますが、性能テストというか動作確認なのでこんな淡泊なんです。次の更新はちょっと時間が空きます。全巻１回見直すので、

第０３話　密約締結（前書き）

１ヶ月近く放置してしまいすいませんでした！
お待たせした割には短いですが、楽しんでいただけたら幸いです。
といっても会話文くらいしかないんですけど…

第０３話　密約締結

「……」

薄暗い部屋の中―ディスプレイの発光により照らされている千冬の表情は優れなかった。

その目が捉えているのはブラッドアークの実稼働データとカタログスペック。報告のための情報を得るため、千冬にのみ閲覧が可能になったソレを見ていた。

（…エネルギー源は『Ｅ２コア』と呼ばれる半永久機関。コレでは試合では絶対に敗北しない上に実戦でも通常手段では落とせないな…

…それに武装は確かにさっきので全部だが…『エナジーシェイプ』…コレが本当ならこの機体はＩＳ戦、それどころか現代戦闘全てにおいて圧倒的に優位に立てる…

そして閲覧不可能…禁断の筐（パンドラ・ボックス）ではないことを祈るしかないな。

なんて滅茶苦茶な機体だ…）

上記の２つ、内『Ｅ２コア』は明らかに異常なモノであるが、もうひとつの『エナジーシェイプ』もＩＳの優位性を崩す要因となる十分に危険なモノだ。ＩＳが如何に『最強』であっても『無敵』ではない。エネルギーが切れれば戦闘能力が大幅にダウンする。そうなれば自国のＩＳが少なかろうとも優位性ができ、現行兵器でも対抗できる可能性が出てくる。

それをこの『エナジーシェイプ』は実現できる。エネルギーを接触無しで奪えるのだから。コレをそのまま国際ＩＳ委員会に報告してしまえば、この機体がベルクトにしか操れない以上、絶対に不要な争いの火種になってしまう。

コレがベルクト以外にも弄ることができれば良かった。それなら多少問題はあるが、各国が合同で研究することでなんとか不要な争

いは回避できるだろう。ベルクトが拘束され、解剖され、機体のみになる可能性はあるが、それでもベルクト一人の犠牲で済む。非情な考えだが、一番犠牲になる者が少ない。

だが、現実はベルクトにしか操れない。これでは、ベルクトを巡って国が互いに牽制し合い勧誘に躍起になるか、自国の優位性や世界のパワーバランスのためにベルクトとブラッドアークの存在を完全に抹消するかの二択になるだろう。

（これは閲覧できなかったほうがよかったかもしれんな……）

彼女にしては珍しく現実逃避しかけた。常ならばこんなモノ速攻でカタを付けるのだが、あの少年がそのようなことになるのを無意識のうちに拒否している。

――――もうひとりの存在であるバレルのように『歳上キラー』能力が働いたのだろうか？

――――ッギン――――

もの凄い勢いで振り返り、後ろの壁を睨まれました…心臓が弱い方なら死ぬレベルですね。

「…はぁ」

千冬はＩＳ学園において『予測外事態の対処における実質的な指揮』を一任されている。まだ『ただの侵入者騒動』扱いだが、正直コレは予測外事態に入るだろう。だが、いくら千冬でもコレはすぐに解決できるものではない。むしろ至極当然だ。

――誰が信じるのだろうか？『異世界から転移してきました』など

と――

――誰が言えるのだろうか？『世界を変える技術を持った男』などと――

――誰が伝えるのだろうか？あの少年に――

――『世界のために死んでくれ』などと――

（……危険な部分は誤魔化して報告するしかない…か）

後々口裏を合わせなければならないなと思いながらも、今はこれ以上この件について考えるのはやめた。

「起きてるか、ベルクト」

「ああ、起きている。やることがないといっても、寝てばかりというのも疲れるのだよ、織斑千冬」

「贅沢を言うな。貴様はまだ侵入者、拘束されてないだけマシだと思え」

「…そうか…まだ…か…今日はどういった用件で？」

軽い冗談の言い合いだが、その中で自らが置かれている状況を察

する。

「ベルクト、あの機体だが開発者はお前か？」

「…？基礎設計は俺がやった。流石に全ての製作はやってないが多少の技術は持っている…それがどうかしたか？」

実際あのブラッドアークとグレイブアークは、ジル・バルドナの研究資料から発見したアークシリーズの前身である機体のデータを元にベルクトが設計したモノだ。

「ふん、何ちょっとした確認さ。つまりお前は兵器の開発ができる人間なのだな？」

「そうだが…？」

ベルクトは質問の真意を計り損ねている。何故今それが関係あるのか？

「…ならなんとかなるか…ベルクト、今後起こることに驚くなよ」

そう言って千冬は部屋を後にした。

（「驚くなよ」の前に何か言っていたが…それにしても何をする気だ？）

今更何が起ころうともそれで彼女を恨む気はない。だが、あの織斑千冬がわざわざ「驚くなよ」と釘を刺したことに一抹の不安を覚えた。

夕方になり、また織斑千冬が来た。

「ベルクト、お前の処遇が決まったぞ」
「そうか、短い間だったが…」
「おい、そう急くな。ちなみにその処遇だが貴様が今考えているものではない。」
てっきり殺されるか、実験動物（モルモット）扱いされるとばかり思っていたベルクトは戸惑う。
「では、どんな？」
「この学園に入学してもらう」
「……何を言っている？」
あまりにも予想外というか論外のことにしばらく思考が停止した。
「この学園の生徒になってもらう。拒否できる立場ではないことは分かっているだろう？」
やや不敵に笑いながら再度そう告げる千冬。
「ひとまず…俺はどんな扱いなんだ？」
「篠ノ之博士が新たに発見した男性ＩＳ操縦者。機体は博士が開発

したモノ。ただし解析は不可能。自身も機体設計をできる程で機械分野について詳しい。彼女にこの学園に入学するよう命じられてここに来た。博士がなんの目的で命じたかは不明。数日後に公表する際には博士から「ＩＳ学園に入学させるように」と連絡があったとする段取りだ。ここまでは教員全員が知っている内容だ。
一部の教員が知っている内容は、機体は篠ノ之博士が新造したコアを使用しており、未知の技術の塊。今までのＩＳとは設計思想が異なるモノだということだ」

「俺はその篠ノ之博士を知らないし、向こうが知らないと言ったらお終いだぞ？」

「問題ない、私が教えてやる。それにそちらの心配も無用だ。後、有事の際にはお前にも対策に回ってもらう」
千冬が口止めを頼んだ程度であの束がおとなしくするとも思えないが、自分が面白くなるなら素直に聞くだろう。実際言っても千冬が不利になるだけなので、千冬大好きなあの束がすることはないだろう。

「…了解。だが、昼間のあの質問は何の意味があったんだ？」

「ああ、あれか。いや、最初はお前が自力で作ったというシナリオで考え、そのための確認だったのだがな。それはそれで厄介なことになると気づき、変更した。あいつに押しつけた方が楽に済む」

「凄い言われようだな…一体どんな人物なんだ？その篠ノ之博士とやらは？それに親しそうだが？」

「ＩＳを開発した稀代の天才、現在行方不明で指名手配中の人物だ。一応私の親友だ」

（なんともまぁ凄い関係を持っているな…それで問題ないと言ったのか…
だが…彼女の立場が危うくなる程無理をさせてしまった）
「感謝する、織斑千冬。この恩を返せるとは思えないが、何か私にできることはないか？」

「フン、貴様にできることなどない…だが…納得しないだろうな…
そうだな…では入学してくる私の弟を鍛えてくれ」

（入学してくる？では唯一の男性操縦者は弟だったのか…重要なサンプルだな。となれば身を守って欲しい、もしくは自分で自分の身は守れるようにか…）
「…トレーニングは多少きつくとも構わないか？」
もの凄い察しがいいように感じるだろうが、ベルクト自身『鍵』だったため新連邦から追われていたという経験から判断できたに過ぎない。流石にそこまで以心伝心なわけではない……まだ。

「ああ、みっちりやってくれ――――死なないように」

「優しいな。では、
私は何があろうとも私の全てをかけて織斑千冬のために行動することを誓おう。
少し違うが、これで密約完了だな」

「どこの騎士だ、貴様は。いや、密約だから犯罪者か？」
苦笑しながら女は言う。

「フン、では密約を結んだ織斑千冬も犯罪者、共犯者だな」
少年も微笑みながら言い返す。

「フッ、共犯者か。なら二人の時は名前で呼んで構わん。ただし、それ以外では織斑先生だ。いいな？ベルクト」
そう言い、右手を差し出す千冬。
「了解した。これからもよろしく頼む、千冬」
対するベルクトも右手を伸ばし、手を握り返した。

――――此処に『元世界最強』と『元世界最凶』が手を組んだ――――

第０３話　密約締結（後書き）

えー若干不完全燃焼な切り方かもしれませんが、ここが一番キリが良かったのです。
ちなみにあの誓いの言葉のみ確実に納得できてません。思いつきませんでした。チクショーもっと良いのあると思うんだけどなー誰か良い言い回しないですか！？

第０４話　天災登場（前書き）

予定では昨日投稿するつもりでしたが長引いて今日になりました。

何気に最長です。楽しんでいただけたら幸いです。

第０４話　天災登場

あの密約の後、ベルクトは倒れた。
別に誰かにやられた訳ではない。単純に食事を取っていなかったための栄養失調だ。
すぐに目覚めると思われたため点滴はされておらず、この部屋には千冬しか来なかった。その千冬も食事まで自分が世話をするとは思っていなかったため食事を持ってこなかった。以上のことからベルクトは発見から４日間何も口にしていないというわけだ。
千冬は怒りと不安と申し訳なさ等が入り混じった複雑な心情でベルクトのための食事を取りに行った。
余談だがこの時千冬が持ってきたお粥は、ベルクトに千冬があ～んして食べさせた。姉弟揃ってこの行動が好きなのでしょうか？

「すまない」

「いや、こちらの不手際だ。気にするな」
若干お互いになんとも言えない雰囲気を醸し出しながら言葉を発する。

「一応不審者扱いから入学予定者扱いになったが、発表するまでは混乱を避けるため極力学園の者との接触は避けてくれ。だから部屋もしばらくはここで我慢するように」

「分かった」

「後は…」

ドン！

「これを入学までに覚えろ」

そういって部屋にある机に置かれたのは分厚い本の数々により構成された『山脈』。

（どこから出した！？というよりどうやって置いた！？）

「…ちなみに入学はいつだ？」

「6日後だ」

「流石にきびし――」

「私は『覚えろ』と言った」

「…分かりました」

この日から入学までの間ベルクトは勉学に励むことになりました。

月光が差す暗い部屋の中、少女が青年を押し倒していた。

「……」

「……」

だがその雰囲気は決して甘いものではない。

「……何者だ、貴様？」

「……」

言葉を発した青年――ベルクトは取り乱してこそいないが、何故か嫌な予感がするためかなりの警戒心を持って接する。いくらここが別世界であり、命を狙われる立場でなくなっても身についた危機察知能力まで失うわけではない。寝ていても気配を察知し、起きられるようにはしている。なのに、この少女にまったく気づかず、こうして拘束されている。

（つまり…こいつはただ者ではない…）

というより、ふと目が覚めたら見ず知らずの少女に押し倒され、身動きが取れない状態にされていて、警戒しないやつはいないだろう。いたとしたら、そいつは何か色々と終わっているやつだ。

「君がちーちゃんの言ってた子だね～」

どこか間の抜けた感じがする口調だが、やっと言葉が返ってきた。だが、目の前の少女のモノではない。声は横から聞こえたのだから。

頭を動かし、見ようとするが暗がりの中にいるので足下しか見えない。

（もう一人いたのか…！？）

「…貴様等は何者だ？」

「えー、めんどくさい。ん～君が本当に異世界の人間なら名乗ってあげようかな？」

「！？」

（それを知っているのは千冬だけのはず…！いや、まさか…）

「篠ノ之束？」

「フフ、さぁねー。さて、君の機体はこれで合ってるよね？」

そう言い暗闇の中から出てきた手に握られていたのは待機状態のブラッドアーク。なぜここにあるのかというと先の命令の時に、扱いが変わったのでお前が持っていろ、と千冬から返されていたからだ。

「どうするつもりだ？」

「ということは合ってるんだね。どうするかって？もちろん解析～♪」

空中投影ディスプレイとキーボードを出し、解析を始めようとする束。だが、

――――拒否――――
――――拒否――――
――――拒否――――

「おっお～？何コレー？」

束がブラッドアークにアクセスしようとすると、次々と『拒否』のウィンドウが出てくる。プロセスを変えて解析を試みているようだが、まったく効果がないようだ。

「むー、こんなの初めてだよ。この束さんを拒否するなんて生意気な子だね」

「…束さま。名前、言ってしまっています」
やっと目の前の少女が言葉を発した。
「おおっ、しまったー！」
束は頭を抱え、仰け反り叫ぶという大げさなリアクションをとっている。結構五月蠅い。
（今ので誰か来ないのか…？）
「はぁー、この子は解析できないし、名前はばれちゃうし、なんか散々だね。どうしよ？
ねぇ君、この子どうにかならない？」
「…分からない。千冬を呼べば閲覧できるようにはなるが…」
実際ブラッドアークが何故千冬にのみ閲覧を許可したのかは分からない。他の教員にも閲覧できたほうが良かったはずなのに何故『千冬』のみなのか。ベルクト自身も考えていた。
しかし、もし他の者にも閲覧できるようになっていれば、千冬の所で情報を止めることができず、ベルクトはどうなっていたか分からない。この千冬にのみ閲覧可能だったおかげでここにいられるのだから文句は言えない。
「う～ん、ちーちゃんに知られるのはちょっとね。今日はお忍びだしー。というかちーちゃんを名前で呼んでる！むぅ～、よし君を解析（バラ）しちゃおう！」
「なっ、貴様何をする気だ！？」

「ん、何ってナニだよ？だって、この子が駄目なら君を調べるしかないじゃない。
さぁ、解析（バラ）させろ～」

暗がりからこちらへと手をワキワキさせながら近づいてくる束。

（やばい…何か分からんがやばい！）

「やめろ！」
拘束を外そうと暴れるが何故か外せない。

「フッフッフ、往生際が悪いぞ～さぁ、おとなしく――」

――ピピッ、篠ノ之束にアクセス許可――

「お？おー！何々、主人の危機を察知しましたってこと？うんうん、いい子だね」
そう言い、ベルクトに伸ばしていた手をブラッドアークへと伸ばした。ベルクトからブラッドアークに標的は変わった。
――――さらばブラッドアーク！君のことは忘れない！

「た、助かった」
（危機って言った！？本当に何する気だったんだ！？）

「おーーー！こんなの見たことないよ！確かにＩＳに似てるところもあるけど構造が全く違うね！う～ん、似てるというより、似せた？…ん？これは…」
天才科学者に取っては未知の技術の塊というのは、宝の山と同義なのだろう。さっきからブラッドアークのデータを見て、一人盛り上がっている。

「ふんふん、なるほどー。ん、もういいよ。はい返却っと。この子、大事にしてあげなよ」
ブラッドアークのデータを堪能し終え、満足したのかベルクトの頭の隣にブラッドアークを置いた。
「…それで、俺はお眼鏡にかなったのか？」
「ん～、そうだね。こんなの私が作った覚えないし、私以外に作れるはずないもんねー。うん、認めてあげるよ。私の名前は篠ノ之束だよ。で、君も名乗ったら？」
「ベルクトだ」
「ベルクト…べっくん？べーくん？う～ん…ベルくん？うん、ベルくんだね！覚えた！」
なにやら、変な呼称が誕生した。
「じゃーね、ベルくん！今日来たことはちーちゃんには内緒にしてね！バラしたら、知んないよ？」
「束さま、いつまで押さえていればいいですか？」
「おぉ、忘れてた！もういいよ、くーちゃん！」
（やっと解放される）
「じゃ、今度こそバイバーイ！」
「失礼します」

いきなり現れて勝手に消えた。迷惑な人である。
ちなみに束達は千冬から連絡を受けてから来たのだが…千冬が連絡したのはベルクトに処遇を伝える前、４時くらい。そして束達が来たのは１２時過ぎ。国外におり、只今絶賛指名手配中の彼女がこの短時間で誰にも気づかれずにこのＩＳ学園にまで来た。絶対にまともな手段を使っていないだろう。

「…なんだったんだアレは？」

ベルクトはあまりの出来事に、突然現れたことよりもあの格好について頭を悩ませていた。

「いやー、ちーちゃんが言ったこととはいえ、まさか本当にそうだったとはねー流石の束さんもビックリだよ」
思い出すのは千冬から久しぶりに電話がかかってきた時のこと――

「も、もすもす？終日（ひねもす）？」
『……』
「あれ？切らないの、ちーちゃん？てっきり切ると思ったのに？」
『（思ったのならやるな）束…お前に頼みがある』
「なんと！ちーちゃんが頼み事とは！何々？ちーちゃんの頼みなら何でも聞くよ！」

『今から言う奴をお前が拾ったということにしてくれ』
「え？なにそれ？」
流石の千冬の頼みといえ若干不機嫌そうな声になる。
『実は――』

『というわけだ』
「…ち…ち…」
『束…？』
「ちーちゃんが壊れたーーーー！！」
『お前にだけは言われたくない！』

『はぁ、はぁ、落ち着いたか？』
「はい。うー束さんの耳が痛いよー」
『失礼なことを言うからだ』
「いや、いきなり異世界の人間とか言われたらそうなるでしょ？」
『お前に言われると腹が立つな』
「失礼な！そんなこと言うなら、頼みを聞かないよ！」
『…すまん』
「…ほんとにどうしたの、ちーちゃん？」
『で、返答は？』
「無視したー！もう、最初に言ったでしょ！もちろんＯＫだよ！」
『そうか、感謝する。では、邪魔したな』

「うーん、ほんとにどうしたんだろ、ちーちゃん？そんなにその自称異世界人が気に入ったのかな？むーー。よし、くーちゃーん！」

「何でしょう？」

「出かけるよ！」

「どちらまで？」

「ＩＳ学園！」

――――という訳で現在。

「知らない技術も見れたし、案外楽しかったねー」

幸いにして束の興味の対象には入れたようだ。

また、こんな夜更けに訪問者が現れた。

「ベルクト、起き――起きていたのか」

「…どうした？」

あれから寝られず、ぼーとしていたのだが、千冬の様子で面倒事が起こったことを理解する。

「侵入者だ」

「…待て。ここはそんなに簡単に侵入できる場所ではないのではなかったのか？」

「ああ、そうだ。だが、現に侵入者がいて敷地内を逃げ回っている。侵入の際には警備システムにひっかからなかったのに、侵入後はまるで見つけてくれと言わんばかりに察知されている。現在教員が数名捕獲に回っている状況だ」

システムが作動しなかった原因は束だ。侵入と撤退の際に感知されないために、システムダウンするよう細工していたのだ。侵入者はそれに運良く便乗する形で侵入してきただけ。

――ブブッ――

「どうした？…ッ！分かった、すぐに向かう」

――ピッ――

「ベルクト、緊急事態だ。生徒の一人が拉致された」

――――嫌だよ、そんなの嫌だよ――――

今年から憧れのＩＳ学園に通うことになった少女――――流堂庵璃は今自身に降りかかっている現実を受け入れたくなかった。

「はぁー、暇ね…」

相部屋の者はまだ来ておらず、知り合いもいない現状では寮にいても退屈だった。本を持ってきてはいるが既に読破しているので今読もうとは思わない。少しでも紛らわせようと携帯で地元の友達と連絡をとろうとしたが、相手が課題に追われているため無理とのこと。本格的に暇になってしまった。

（散歩でもしようかしら？）

なんとなくそう思い、外出禁止の時間帯に寮から抜け出した。――

彼女はまだ織斑千冬の恐ろしさを知らなかったがためにこんな暴挙をやってしまった。知っていれば絶対に出なかっただろう。この世の地獄を進んで味わいのなら別だが――それがそもそもの過ちだった。

（気分転換にはなったわね。冷えてきたしもう戻りましょう）

春先のまだ肌寒い夜風になびく長髪を押さえ、月を見上げていた庵璃は踵を返そうとしたが――――

「むぐっ！」

突然口を押さえられた。もがこうとするが首筋に冷たいモノを押し当てられる。

「騒ぐな！」

（男！？）

小声ながらも勢いのある口調で命令してきたのは男だった。庵璃の位置からでは顔は見えないが先ほどの低音の声、口を押さえている手の感触と見える腕の太さから男だと分かる。

（何故、どうして！？）

自分の置かれている状況が分からない。

――――何故男が此処にいるのか。

――――何故自分はこの男に拘束されているのか。

代表候補生でもない彼女は特別な訓練は受けておらず、自分ではこの場を逃れることが出来ない。戸惑うばかりで何もできなかった。

「ヒヒッ、ラッキーだぜ。こんな夜更けに出歩いてる馬鹿がいるとは。これで逃げられる！おまけに結構綺麗な面してんじゃねぇか！ほんと俺はついてるぜ！天は俺を見捨ててなかったってことかぁ、

ヒャハッ！」

男は勝手なことばかり言っている。どうやら追われてる内にテンションがおかしくなってしまったようだ。

「んー！んー！」

「あ？なんだぁ？しゃぁねぇ、叫ぶなよ。叫んだら首パックリいくからな」

「わ、私をどうするの…？」

「ふふー、どうなっちゃうんでしょうねぇ～？」

震える声で尋ねる庵璃に男は気をよくしたのか、彼女の体をまさぐり始める。

「ヒッ！」

無意識に声がでそうになるが、首筋の冷たい感触に咄嗟に押さえる。

「そうそうー、そうやってれば痛いことなんてないからね～」

庵璃の反応に更に気をよくし、首筋に舌を這わしてくる。

「～～～～！」

（気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！）

気持ち悪さに吐き気がし、叫びたくもなるができない。首筋にある冷たい感触が死の恐怖を与え、体が動かない。

「おい、あっちに行くぞ」

男に背中を押され、木が茂る方へと促される。

（私、こんな訳も分からないまま嬲り者にされて終わるの？せっかくこの学園に入れたのに何もしないまま終わってしまうの？嫌だよ、そんなの嫌だよ。あの織斑千冬に教えて頂けるかもしれない、あの男の子に会えるかもしれない。新しい友達ができて、楽しくおしゃべりして、勉強したい。もしかしたら私が代表候補生に選ばれるかもしれない。そんな、そんな希望を持って、青春を楽しめないまま…）

乱暴に地面に転がされ、のし掛かられる。

「あぅ！」

（寮から出なければ良かった…暇なままで良かった…こんな、こんなことになるくらいなら…）

完全に諦め始め、庵璃の瞳からは生気が抜けはじめていた。

――――だが

「へへっ、さ～お楽しみタイ――ガッ！」

突然飛来した何かが男に当たり、男は庵璃から離れた。呆然としていた庵璃には何が起こったか分からないが漠然と自分が（助かった…？）と感じていた。

「クソ、これからだってのに！誰だ！」

男が周りを見渡すが、どこにも見当たらない。

「どこだ！どこにいやがる！」

「上だ」

「あぁ！？」

――――ゴキッ

「ガ、ア…！」

男が見上げた瞬間、男の横っ面に黒い拳がめり込み吹っ飛ばされた。

「ア…イエ…ス…」

自らを殴ったモノを見た男は、打ち付けられた木に寄り添うように気絶した。

「終わったな」

男を殴った黒い拳の主は――――勿論、ブラッドアークを纏ったベルクトだ。

――――ＩＳ学園内とはいえアリーナや実習で使うグラウンドなど以外でＩＳを無断使用すると勿論問題、下手すれば国際問題だが、生徒が拉致されたということで千冬が許可をだしたので今回は問題なしとなる――――

念のため、サーチをかけるが目の前の近くにいる女生徒以外に生体反応はない。

（あとは、この女生徒を千冬にでも渡せばいいな）

「さて、無事か？」

「さて、無事か？」

その言葉を私にかけてきたのは、ＩＳを纏った人物だった。本来なら禍々しく感じるだろう黒と赤のコントラストの機体は、大きな

リングが月光により照らされることで妙な神々しさを見る者に与えている。

「あ…あ…」

(たす…かった…？助かった？助かったの？…私)

「……？」

こちらが何も返さないのを心配したのか、目の前の人はＩＳを展開解除してこちらへと近づいてくる。

「おい、大丈夫か？」

私の肩に手を置いて、私を心配してくれる人。

「うっ…うぅ…うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

気づいたら、私はこの人に抱きつき、胸に額を押し当て大声で泣いた。

そして…いつの間にか私は意識を失った。

「はぁ、やれやれだ」

女生徒が気絶した後、ベルクトは侵入者の腕と脚の関節を外した。その際、ビクンッと跳ねたが彼は気にしない。

てか、誰も知ったこっちゃない。不法侵入者のうえに、強姦しようとした人間を誰が情けをかけるか。

ちなみに女生徒を気絶と言ったのは、ベルクトが対応に困ったために意識を刈ったからだ。朴念仁の一夏あたりなら抱き締めでもしてあやしそうだが、ベルクトにそんな考えはない。殺伐とした人生を送ってきたベルクトがそんなことをするわけがあるだろうか？い

や、ない。反語。

「ご苦労だったな、ベルクト」

千冬が到着した。その表情は険しいが、俺に抱きついている女生徒を見て少し安堵の色が見える。

「ああ、まったくだ。泣き付かれてどうすればいいか分からなかった」

「フッ、情けないな。男なら黙って抱き締めてやればいい」

「そういうものなのか？」

「そういうものだ。さぁ、生徒は私が運ぶ。お前はその男を運べ」

「千冬、その命令は聞けない」

「何故だ？まさかその女生徒が気に入って離したくないとか言わんだろうな？」

先のやり取りで和やかになっていた千冬の目つきが鋭くなる。

「違う。この娘が離れてくれないんだ」

そう。先ほど気絶させ、逃亡防止のため男の関節を外そうと女生徒を一度地面に寝かそうとした。ここまでは良かった――良くない部分が一カ所あります――。だが、がっちりとホールドされており、ベルクト一人では外せなかった。おかげで、男の関節を外す時にも女生徒を抱きかかえたまま外すという、傍から見たらシュールな光景ができあがった。

まぁ、今まで平和ボケと言われる日本の普通の家庭で暮らしてきた女の子が、死と強姦の危機に遭い、そこに颯爽と現れ自分を助け

た人物が優しければ、そうなるのも無理はない。
――――ひとつ言っておくとベルクトは決して優しくしたわけではない。庵璃が優しいと感じただけだ。

「はぁ、こっちに来い」
言われるままに近づくと

――――ヒュッ

外れた。どうやったかはまったく分からないが、一瞬で外れた。

「さぁ、戻るぞ」

「…了解」
(この女、一体何者なんだ…)
自分が行動する理由とした人物に疑問を覚えながらもベルクトは男を担ぎ、千冬の後を追った。

「あ、此処は…?」

「気がついたか」

気がつき、掛けられた声に振り向くとそこには、あの織斑千冬がいた。

「あ…織斑…先生」

まだ思考がはっきりしない。

「目覚めたばかりだが、さっさと用事を済ませるぞ」

「用事…？……！」

思い出した。何故自分が寝ていたのか。寝てしまう前に何があったのか。

「あ…あ…」

途端にあの時の恐怖が呼び起こされ、体震える。

だが、

「流堂庵璃！」

「！」

千冬の一喝で収まる。

「落ち着け」

「は、はい！」

「外出禁止の時間帯に寮を抜け出したことで本来なら個人指導だが、今回は特別に選ばせてやる」

「？」

（何をだろう？）

「今回の件の一切を口外しない、とこちらの書類にサインするなら、個人指導は勘弁してやる」

「ちなみにその個人指導…というのは？」
「私と体術組み手だ」
「…書類でお願いします」
（死ぬ。そんなもの今からしたら死んじゃう）
「この書類全てにサインしろ。ちなみにもし口外してしまった場合、貴様は勿論、口外した相手にも監視がつくことになる」
「はい。あのぅ…」
「なんだ？」
「私を助けてくれた人のことを教えて頂けませんか？」
「…すぐに知る」
「今教えて下さい！」
突然の大声に織斑先生が驚いている。やってしまったと思うが、これは引けない。
やがて、織斑先生はぽつりとだが返してくれた。
「…ベルクト」
「ベルクト…それがあの人の名前…」
「そうだ。だが、これも時がくるまで他言無用だ」
「分かりました…」

（ベルクト…さん）

その名を胸の内で反芻しながら、庵璃は書類にサインをし続けた。

翌日――日付としては今日――、東が全世界の放送をジャックし、ベルクトのことを大々的に発表した。そのため、入学式間近にでも公表しようとしていた学園は予定が狂い、いろいろと面倒なことになった。

第０４話　天災登場（後書き）

書いてて改めて分かった。
私文才ない！なにこれ！後半むっちゃぐだった。
庵璃の心理描写というかあの一連の下りむずいよ！

第０５話　初めての高校生活（前書き）

最長更新です。
ちょっと疲れるかもしれませんが楽しめたら幸いです。

第０５話　初めての高校生活

――――入学式当日

既に式は終わり、新入生は各教室にてＨＲ中のはずだがそこにベルクトの姿はない。それどころか、ベルクトはホールで行われている式典にすら参加していない。では、どこにいるのか？それは――――

――ガラッ

「待たせたな」

――――今しがた千冬が出てきた職員室前だ。

本来なら、ベルクトには数日遅れで編入させる予定で今日は登校すらしていなかったのだが、例の『天災』さんがやりやがった全世界同時放送ジャックにより予定が狂った。予定よりも早くに発表され、しかも「ＩＳ学園に送ったから～」と言われては入学式当日に間に合わないと不自然に思われる可能性がでてくる。そのため、学園はベルクトの編入手続きを急いでしなければならなくなった。

だが、これがまた面倒くさい。ＩＳ学園はその存在故、入学手続きと言えどかなり手続きが面倒であり、編入手続きとなると更にややこしいことになる。具体的には国の関係各所に提出する書類だ。しかし、そのために新入生の処理に不手際あってはならない。おかげで、新入生の処理で忙しいこの時期に、一度は侵入者として扱っていた者の編入処理まで同時進行でする羽目になった。

そのため束は手続きを担当した教員からは「余計なことしやがって」と恨まれている。

そして何故ベルクトがここにいるのかと言うと、それらの処理が終わったのが前日の夜で諸注意を受けておらず、最後の確認をするためだ。

「時間もないし、歩きながら話すぞ」

そう言って、千冬はさっさと歩き出し、ベルクトもそれについていく。

「基本的なことは渡した本の中に書いてある。だから、特に言うことはないんだが…お前にはどこか常識がない気がするので一応言っておく」

「なんだ？」

「人を殺すなよ。そうなれば、いくら私でも到底お前を守ることなどできん」

「分かっている。俺は、千冬の負担になるような行動はしない」

「…そうか、余計なことを言ってしまったな」

「いや、俺の身を案じてくれての言葉だろう？忠告痛み入るよ」

それからは教室まで二人は終始無言だった。

「ここが、お前の教室だ。先に私が入るから、呼んだら来い」

「分かった」

――――パァーン！

「今は教師と生徒だ。敬語を使え」

火を噴いたのは千冬の拳骨、それにより被害を受けたのはベルクトの頭。

「…はい」

「分かればいい。では――」

『以上です！』

――――がたたっ！

「今のは？」

教室の中から聞こえた声と、直後の何かが倒れた様な音にベルクトは怪訝な顔をする。だが、千冬は原因が分かっているのか、

「ふぅ…では待ってろ」

そう言い、すっと音を立てずに入っていった。

（どこか疲れた感じに見えたが…？）

『げっ！千冬姉（ねぇ）！』

（千冬…姉？それに今の声は男…弟か？）

『諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にする

のが仕事だ』

『キャーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！』

『私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！』

廊下にまで響いてくる女子の叫び声にベルクトは引いた。

『きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！』

『でも時には優しくして！』

『そしてつけあがらないように躾をして！』

（なんなんだ、これは…）

『静かに！諸君等にはこれからＩＳの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ』

『『『はい！』』』

（千冬の声はよく通る…）

『では、ザウアーラント入ってこい』

（ようやくか…にしてもまだ慣れないな）

「はい」

教室の中に入り教壇の横に立つ。

「自己紹介をしろ」

「はい。ベルクト・ザウアーラントだ」

――――シーン

簡潔な自己紹介。先程の一夏のと大差ないが、今度は女子の反応がちょっと違う。

「「「きゃあああああっ！」」」
「何この子！可愛い！」
「お持ち帰りしたい！」
「なにこれ！なにこれ！愛でたいわ！」
「何言ってるの！可愛いじゃなくて格好いいよ！」
「そうよ！あのどこか危ない感じ！それがいいのよ！」
「いいえ！そうではなく――」
「違うよ！ザウアーラント君は――」

ベルクトの印象で女子が言い争いを始めた。正直ベルクトにはついていけない。というより五月蠅くて鬱陶しがっている。
ちなみに、『ザウアーラント』とい姓は千冬が付けたものだ。あったほうが、公私の区別がしやすいという理由だ。後、名だけでは淋しいだろうという理由も少しあった。
「静かにせんか！馬鹿共！」

千冬の一喝でやっと収まった。

「さぁ、ＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ。ザウアーラントは空いている席に座れ」

「はい」

「あの子よ、世界で唯一ＩＳを使える男性って」
「違うよ、後から篠ノ之博士が発表した子がいるから二人だよ。ニュース見てないの？」
「世界的な大ニュースだったよねー」
「二人ともやっぱり入ってきたんだ」
「あなた話しかけなさいよ」
「私いっちゃおうかな」
「待ってよ！まさか抜け駆けする気じゃないでしょうね！」

一時限目のＩＳ基礎理論授業が終わると、他クラスの生徒が教室に押し寄せて廊下で壁と化している。その上、クラスの女子もこちらの様子を窺いヒソヒソと騒いでいる。

（鬱陶しい…）

「よう」
ベルクトが内心うんざりしていると織斑一夏が話しかけてきた。
「なにか用か？」
「いや、別に用って程じゃないが。たった二人しかいない男子だろ？今後この学園で仲良くやっていこうと思ってだな」
「そうか、よろしく頼む」
「おう。じゃ、改めて。織斑一夏だ。一夏でいいぜ」

「なら、俺もベルクトで構わない。よろしく頼む」
「そりゃ助かる。ざうあーらんとって実は言いにくかったんだよ」
（正直どう接触するか悩み所だったが、なんとかなったな…）
軍内部での交渉能力などはあるが、基本的にベルクトに日常（しかも学生）のコミュニケーション能力は皆無といっていい程ない。そのため、織斑一夏にトレーニングを付けるように話を持っていく前にどうやって接触するかが問題だった。だが、これでベルクトにとっての第一関門はクリアした。
（後はどうやって鍛えていくか…）

「ちょっといいか？」
「え？」
「なんだ？」
声を掛けてきたのは、長い髪を高い位置で纏めた、抜き身の刃を感じさせる女生徒だった。
「…箒？」
「こいつを借りていってもいいか？」
（…知り合いのようだし、大丈夫か）
「構わない」
（だが、念を入れて…）
――ピッ
「じゃ、また後でな」

「ああ」

一夏と箒と呼ばれた女子が出て行ってから少ししてからベルクトも席を立ち、教室を出て行く。どこに行ったかはこの女子の行列を見れば楽に分かる。

「あ、あの！」

誰かに声を掛けられた気がするが、ベルクトは構わずに歩いていく。彼にとっての現時点での最優先事項は「織斑千冬の弟の護衛」であるのだから。

『何の用だよ』
『…うむ』
『……』
『……』
『六年ぶりに会ったんだ、なんか話があるんだろ？』
『……』
『そういえば』
『な、何だ？』
『去年剣道の全国大会優勝したってな。おめでとう』
『なんでそんなこと知ってるんだ』
『なんでって、新聞で見たし……』
『な、なんで新聞なんて見てるんだっ』

『あー、あと』
『~~~』
『久しぶり。六年ぶりだけど、箒ってすぐわかったぞ』
『ぇ……よ、よくも覚えているものだな……』
『いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい』
『……』

（幼なじみ…敵意はなさそうだな。あの女は大丈夫だな）
一夏と箒の会話を覗き見ているのは女生徒だけではない。ベルクトもだ。ただし、ベルクトの位置は他の女生徒とは違い、手段もおかしい。上記の会話は肉声ではなく、先程教室を出る前に一夏に付けた盗聴器からの音声だ。

――キーンコーンカーンコーン――

『俺達も戻ろうぜ』
『分かっている……』

（俺も戻らなければ）

「では。ここまでで質問のある人ー？」

二時間目、山田真耶による授業。何ら問題はなく、むしろ分かりやすい説明なのだが、ベルクトの位置から見える一夏の様子は明らかにおかしかった。

「織斑くん、なにかありますか？」

その様子に、山田真耶も不審に思ったのか声を掛けた。

「がぁ！えっと……」

（？）

「質問があったら、訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

（なにやら嬉しそうだな）

「先生…」

一夏がなにやら妙な葛藤でもしている様子だったが、ようやく決心がついたのかおずおずと手を挙げる。

「はい！織斑くん！」

ともすれば、音符でもつきそうなくらい上機嫌な声で返す、山田真耶。

（だから、なんでそんなに嬉しそうなんだ？）

「ほとんど全部わかりません」

（は？）

「ぇ……ぜ、全部ですか…？い、今の段階で分からないって人はどれくらいいますか？」

シーン

誰も手を挙げない。それどころか動かない。だが、教室の端で控えていた千冬のみが動き、一夏へと近づいていく。他の生徒は「なんだろう？」といった感じだが、ベルクトのみは今後に何が起こるか薄々予期していた。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「えー…あ。あの分厚いやつですか？」

「そうだ。必読と書いてあっただろう」

「いやー、間違えて捨てました」

――――パァン！

出席簿による頭部殴打。

（俺の時よりも痛そうだな…）

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの厚さはちょっと……」

「やれと言っている。ザウアーラントは五日で全て覚えたのだから無理とは言わせん」

「…うぅ、ぐぅ。はい、やります」

ギロッと一夏を睨む千冬はとんでもない迫力がある。

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば、必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

当たり前のことなのだが、一夏はやや不服そうだった。

「…貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

――――ビクッ

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

（集団の中にいてこそ人か…）

「なら、俺は今…人なんだな…」

「…え？」

それは、千冬の言葉に一人ちょっとした感銘を受けていたベルクトが思わず漏らした言葉だった。だが、静まりかえっていた教室にはその呟きはよく響き渡った。おかげで、「こいつ、どうしたんだ？」みたいな妙な空気になってしまった。

「ザウアーラント」

「すみません」

「え、えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますからがんばって？ね？っね？」

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」

（助かった。感謝するぞ、山田真耶）

山田真耶が沈黙を破ってくれたおかげで、空気は変わってくれた。それに感謝するベルクトだったが、

「ほ、放課後……放課後にふたりきりの教師と生徒……。あっ！ダ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから……それに私、男の人は初めてで……」

（……）

次の発言には反応できなかった。

「で、でも織斑先生の弟さんだったら……」

「あー、んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

「織斑。わからないところがあったら、初めはザウアーラントに訊け。それで分からなかったら山田先生に訊け。山田先生も忙しい時があるからな。それに同じ男子だから話しやすいだろう」

なにやら、トリップしていたらしい山田真耶が千冬の咳払いによって戻ってきた。そして、教壇に慌てて戻ったが、こけた。

「うー、いたたた……」

（不安になるが、なにか和むな…）

「ちょっと、よろしくて？」

「んぁ？」

「なんだ？」

二時間目が終わり、休み時間になると早速一夏が俺のところに「ここを教えてくれ」と来た。だから、教えようとした矢先に金髪の女生徒が声を掛けてきた。

「まぁ！なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

（鬱陶しい女だな…）

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「俺も自己紹介を聞いていないのでな」

――バンッ！

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

（ほぅ、喧しいだけの小娘かと思ったが…代表候補生か。一応の実

力はあるのだな）

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのは貴族の務めですわ。よろしくてよ」

（いちいち腰や顎に手を当てないと喋れないのか貴様は…）

「代表候補生って、何？」

真剣な表情でそんなことを抜かした一夏に、周りの聞き耳を立てていた女子までずっこけていた。セシリアもあまりのことに固まっているし、ベルクトですら内心唖然としている。

（どれだけ知らないだ、一夏よ…俺よりひどくないか）

「あ、あ、あ…」

「『あ』？」

「信じられませんわ。日本の男性というのは、みんなこれほど知識に乏しいものなのかしら？常識ですわよ。常識！」

「で、代表候補生って？」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補者として選出されるエリートのことですわ。単語から想像したらわかるでしょう？」

「そういわれればそうだ」

「そう！エリートなのですわ！
本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

（バラが見えた気がしたが…疲れてるようだな）

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか」

「一夏、さっきの言い方は怒らせるには適切だが、おだてるには不適切だ」

「あなたも結構失礼ですわよ！」

（フン、気づいたか…）

「大体、あなた何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でＩＳを操縦できる聞いていましたけど、期待はずれですわね。この分だと、そちらの篠ノ之博士が発表された方もそうなのかしら？」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

「俺も期待されてもな…」

「ふん、まぁでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ。
わからないことがあれば、まぁ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？
そういや、ベルクトは？」

（こっちに振るな）
今のセシリアは自分のプライドに傷をつけられたと思っているのか興奮状態だ。ただでさえ鬱陶しかったのが、更に鬱陶しい。案の定、顔がくっつきそうなくらい近くまで詰め寄ってきた。

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！」

「近い。落ち着け」

「これが、落ち着いていられますか！」

（鬱陶しい…殺してしまえば楽なのに…）

――――スパパァーン！

「貴様等、速く席に着け」
千冬がいた。
「俺は席についているのですが？」
「貴様、さっき物騒なこと考えたろ」
（何故わかる…）

「うぅ、また話せなかった…」

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」
三時間目、今度は山田真耶ではなく千冬が教壇に立っている。この授業はよっぽど重要なのか山田真耶までノートを取っている。あるいは、彼女にはまだ任せられないのか。
「ああ、その前に来月行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」
（ん？）

「クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など……まぁ、クラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「え、ちょ…俺！？」

（俺は大丈夫だな）

自分の名前は挙がらないと思っていた。

「はい！私はザウアーラントくんを推薦します！」

「私も！」

「なっ…」

そんな甘い考えを持ってた時期がありました。

「他にはいないか？なければこの二人の内から決定するぞ」

「ちょっ、ちょっと待った俺はそんな――」

「納得がいきませんわ！」

一夏が千冬に異議を申し立てていたが、それを遮ってセシリアが声を上げた。

「そのような選出は認められません！男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を味わえとおっしゃるのですか！？

大体、文化としても後進的な国に暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏が耐えきれなくなったのか、セシリアの発言にかみついてしまった。

（一夏、それでは代表にしてくれと言ってるものだぞ。それに千冬も楽しそうに眺めているし）

「な……おいしい料理はたくさんありますわ！あなた！わたくしの祖国を侮辱しますの！」

「先に侮辱したのは貴様だろう。まさか、自分が罵ってもいいが、自分がされるのは許せないとか言わんだろうな？だとすれば何様だ、貴様」

どうでも良かったが、千冬の視線が明らかに『お前も行け』という目をしていたために、ベルクトも発言することとなった。

「ぐっ、それは確かに……」

流石に自分の暴言に気づいたのか、セシリアもおとなしくなる。だが、一度啖呵を切ってしまった以上引けない。なにより、自らのプライドが許さない。

「ですが、クラス代表はこのわたくしがなるべきですわ！」

「別にそれに関しては、俺は構わない。寧ろやってくれ」

もう構わないと思ったが、千冬はそれで許してはくれなかった。

「ザウアーラント、辞退は許さないぞ。自分を推薦した者の意志を無駄にするな。織斑、貴様もだ」

（行けとは、そこまでか…）

「なら、決闘ですわ！それで決着をつけましょう！」

「いいぜ、この際それで幕を引こう」

「仕方がないな」

話は纏まり、この話はもう終わりだと思ったが、

「ねぇー、ねぇー、ハンデはどのくらいつけるの？」

一人の女生徒が放った一言でまた騒がしくなる。いや正確にはそれに反応して返した一夏の言葉に。

「そうだ、どのくらい付けたらいい？」

ドッとクラスに爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、ＩＳができる前だよ？」

「もし、男と女が戦争したら三日持たないって、言われてるよ？」

「あー…」

男は女に勝てない。

これが、ＩＳができてからの世界の常識。

だが、

「何を言っているんだ、貴様等は」

その常識には無理がある。

「「「え」」」

「それはもし真正面から戦ったらという前提で成り立つものだ。確かにＩＳは現時点では『最強』の機動兵器だ。だがな、ＩＳは全ての女に行き渡る程数はないし、ＩＳを全ての女が操縦できるわけでもない。一騎当千の猛者など一握りだろう。数だけならＩＳ以外の兵器のほうが多い。

それに、ＩＳを扱うのは人間だ。機械じゃない。戦い続ければ疲れる。物量で攻め疲労させたり、偽情報で内部分裂をさせたり、補給ラインの切断などで肉体面、精神面、物資面からも攻めることができる。エネルギーの供給の目処を潰せば消耗戦になる。ＩＳを展開していなければ只の人間だ。通常兵器で死ぬ。さらに戦略兵器などで消し飛ばしてしまうなどの方法もある。

分かったか？戦争の勝敗は、単純な性能差だけでは決まらないのだよ」

「……」

ベルクトの言葉に誰も反応できない。戦争がどうやって行われているかなど知らない年端もいかない子供には返せる言葉がない。

（尤も…そんなことを言ってる俺はそんな一騎当千の連中に負けたのだがな）

「そして今回はＩＳ同士の戦いだ。そこに次元の違う性能差は起こ

らない」

「……ぁ」

そこまで言って、やっと生徒達（&山田先生）は理解が追いついた。そして、自らの意識の甘さに気づいたことと、ベルクトの放つ威圧感に気圧され居心地悪そうにしている。おかげで、教室の空気が悪い。

「…お喋りが過ぎたな。ハンデはなし。これでいいだろ？」

「あ、ああ」

「え、ええ。構いませんわ」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、ザウアーラント、オルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

昼休み

「なぁ、ベルク――」

「ザウアーラント、話がある。ついてこい」

「わかりました」

千冬姉に呼ばれ、ベルクトは行ってしまった。

（あー、ＩＳについて教えてもらいたかったんだが…）

「まぁ、まだ機会はあるだろ」

「あ、あの」
「ん？」
「ちょっと、いいですか？」

「なんでしょうか？」
連れてこられたのは職員室ではなく、人気のない校舎裏。
「今は二人だ。普通で構わない」
「わかった。で、なんなんだ？」
「お前の機体だが、制限をかけてもらう」
「具体的には…？」
「後で細かく設定するが、主にエネルギーの容量限定、武装の威力制限だな。特にエナジーシェイプについては気をつけないといけないのでな」
「そうか、それなら大丈夫だろう」
「大丈夫？」

「いや、こっちの話だ」

ベルクトが気まずげに顔を逸らした。

（珍しいな。こいつがこんな反応をするなど。なにか、あったか…？…もしや）

「ベルクト、負けるかもしれないと心配しているのか？」

――ピクッ

（図星か）

「……ああ。まだ、これの操縦に慣れていないからな」

（てっきり、自信満々で『叩き潰す』なんて考えていると思っていたが）

「負けたくないのか？」

「ああ。クラス代表に興味はないが、あんな小娘に負けるのは癪だ」

（フッ、すれている様に見えて、少年らしい所もちゃんとあるじゃないか）

「小娘とは、貴様も変わらんだろうが」

「まぁ、千冬から見たら変わらんだろうが、一応俺は今年で１８なのでな」

「……そうか。もう戻っていいぞ。放課後また話す」

放課後になり、ベルクトは千冬の所に行き、機体の性能制限について話し合った。外を見てみると空はもう夕焼けの赤に染まっている。

「こんなところだ。アリーナの使用申請はまた今度にしよう」

「ああ」

「ほれ、ベルクト」
千冬がそう言ってこちらに差し出したモノは鍵。

「寮部屋の鍵か？」

「ご名答。ようやくあの部屋ともお別れだな」

そう、ベルクトは結局今日まで懲罰部屋で過ごしていた。
「ここまで過ごすとあの部屋にも変に愛着が湧くな」

「フッ。なら、ずっとあそこで過ごすか？」

「クッ。それは遠慮しておく」
互いに軽口を言って微笑む。
「ところで、同室の者は一夏か？」
だが、この一言に千冬の表情は曇った。

「…いや、一般の女生徒だ。諸事情により、しばらくは別になっている」

この諸事情とは、篠ノ之束が原因となっている。ベルクトを束の紹介としたことで、ベルクトから束に織斑一夏のデータが流れると考えた国があり、それにこれ以上束がＩＳ技術を独占状態とするのを良しとしなかった他の国も賛同してしまい『一緒にするのは様子を見てからだ』ということになった。いくら、ＩＳ学園がどの国からも圧力を受けないからといっても、完全にはね除けることはできない。

厄介事を押しつけたつもりだったのだが、逆に多く掛かっている気がする。

「…そうか。では俺は寮部屋に行くとする」

「ああ、荷物は既に送っておいたからな」

「感謝する」

「同室があの生徒だと知ったらどんな反応をするのだろうな…」

一年生寮の一室、制服から着替えもせずにベッドで枕に顔を埋めている少女がいる。

「あー結局話せなかった…」

（でも、一組にはいることは確認できたし、明日も行けばきっと…）

名は流堂庵璃。ベルクトによって救われた少女で、それからずっとベルクトのことが気になって仕方がない少女である。
休み時間の度に教室に出向き、ベルクトの姿を探したのだが、他の女子に圧倒され近づけず、声を掛けても気づいてもらえなかった。
年頃の少女にとって気になる異性に会えず、気づいてもらえないというのは結構くるものがある。

「はぁ、着替えよ…」
制服を脱ぎ捨て、クローゼットの中から部屋着を取り出す。

――ガチャ

「えっ」
(同室の人!?い、今着替え中なのに!)
いくら同性でも初対面の相手にいきなり自分の下着姿を見られるのは抵抗がある。なので、ちょっと待ってもらおうと振り返ったが、

「ご、ごめんなさい!今、きがえ…」

そこで見た人物に庵璃は固まってしまった。

「べ、ベルクト…さん…」

「あぁ、君か」

入ってきた人物は自分が現在進行形で気になっている異性。
(同室の人ってベルクトさんだったの!?だから、先生「すぐに知る」って言ったの!?)

「ぁ…ぁ…」

「ところで…」

「は、はい！」

思わず声が裏返ってしまった。

「君は服を着ないのか？」

「あ…ぁ…ぁ…」

次の瞬間には一年生寮に響き渡る程の叫び声が上がった。

余談だが、叫び声が挙がった瞬間と一夏が気絶した瞬間は同じ時間であった。

第０５話　初めての高校生活（後書き）

今回、ベルクトに名前を与えましたが、他にもこんなの考えてました。

?:アヴェニス

?:アウエンミュラー

?:アイベンシュッツ

?:ヴァイツ

?:シュヴァイツァー

もし、名前なんて要らない！って言う方、他に挙げたほうが良いっていう方がいれば言ってください。

第０６話　試合の前の懸案事項（前書き）

詳細は後書きで述べますが、すみませんでした！

第０６話　試合の前の懸案事項

あの後は大変だった。タイミング悪く一夏の騒動で部屋を出てきた者が多くいたため、庵璃の叫び声に「何事か」と女子生徒が集まってきてしまったのだ。だが、部屋の中で起こり、ベルクトがきちんと扉を閉めていたため女子生徒は現場が見えず、部屋の前で騒いでいた。それがあまりにも騒がしかったので、遂に千冬が登場し、扉の前に群がっていた女子生徒を鎮圧し、部屋の中に入ってきた。そこで、ベルクトと下着姿のまましゃがみこんでいる庵璃を見て千冬はだいたいの事情を察し、ベルクトは寮長室まで連行され、教育された。こういう場合、悪いのは大概男性である。

そして、千冬に教育されたベルクトは部屋に戻り、布団にくるまっていた庵璃に謝ることでなんとか事なきを得た。

翌朝、ベルクトは食堂にて食事を摂っている。食堂が開いてすぐの時間帯なので人はほとんどいない。何故こんなに早いのかというと流石に気まずかったため、庵璃が起きる前に部屋を出たからだ。ベルクトに感情の起伏が少ないと言っても感情がないわけではない。それに、経験上良くない空気には敏感である。

（千冬に女性の扱い方を教わろうか……）

ここで注意すべきは接し方ではなく、扱い方となっている点だ。そこにまだ以前のベルクトの影が見える。

「おはよう、ベルクト。早いな」

「…一夏。ああ、おはよう」

考え事をしていると、和食セットを持った一夏が話しかけてきた。篠ノ之箒も一緒にいる。ちなみにベルクトの朝食は三種のサンドイッチだ。

「おい、箒。お前も挨拶くらいしろよ」

「……おはよう」

「おはよう」

（一夏の顔に痣があるな。それに…なにやら篠ノ之箒が不機嫌だな）

挨拶をすませた二人はベルクトの隣へと腰掛ける。ベルクトの隣に一夏その隣に箒という構図だ。

「一夏、何かあったのか」

「え、あ、いや、別になんでもないぞ」

一夏が答えようとしたとき、篠ノ之箒からの圧力が増した。

（…なにか弱みを握られているのか？昨日の判断は早計だったか？）

ある意味外れてはいないのだが、ずれている。一夏を知っている人間なら、もしくは昨日の騒動を知っている人間なら「一夏がやらかして、それで機嫌が悪い」で終わるのだが、生憎とベルクトは「一夏が箒に弱みとなるものを握られ、脅迫されている」という考えに至った。

「箒、これうまいな！」

「……」

「ベルクトのサンドイッチはどうなんだ？」

「…ああ、うまいぞ」

（贅沢なほどに…）

あの世界では、まともな食事など入手困難。ベルクトがまともに食べたものなど政府高官が集まる会合に参加させられた時に口にした料理くらいだ。それも数少なく、量も少ない。だから、この世界の基準がないベルクトにとっては、この食堂のメニューは十分贅沢品レベルだ。

「そっかー！やっぱりこの学園すげぇよな！」

「……」

（一夏のテンションが無駄に高い気が…）

「…なぁ、箒。いいかげん機嫌直してくれよ」

「直すもなにも私は機嫌など悪くない」

（ご機嫌取りか？）

「いや、どう見ても怒ってるって顔してるじゃねぇか」

「貴様の気のせいだ」

「いや、だから箒――」

「な、名前で呼ぶなっ！」

「……篠ノ之さん」

「……」

更に不機嫌になる篠ノ之箒。

（何をやっているんだ、この二人？）

「…なぁ、ベルクトどうにかしてくれないか？」

「俺にどうしろと？」

小声でベルクトに解決を頼んでくる一夏だが、ベルクトに十代女子の心情をどうにかするテクなどない。あったら、今日こんなに早く食堂にいない。

「ザ、ザウアーラント君、隣いいかな」

それでもベルクトに頼もうと一夏が食い下がっていると、女子三人組が話しかけてきた。

「ああ、構わな…い？」

（なんだこの生物？）

振り返った目に映ったのは女子三人だ。しかし、ベルクトが驚いたのはそんな所ではない。その格好だ。二人は制服を着ている（というより食堂にいるほぼ全員がそうだ）。しかし、後の一人はなんとも言えない耳のようなとんがりが付いたフードで袖がだぼだぼの服を着ていた。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだ！」

「お、男の子だねっ」

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？つうか、ベルクトも少ないな。それじゃ持たないだろ？」

「問題ない。あまり食べてはいざという時に動けない」

「いや、いざという時って…」

「わ、私たちも平気よね！」

「うん、そうそう！」

（ほう、感心だな…）
意味をはき違え、感心しているベルクトだが、

「お菓子よく食べるし！」

（…前言撤回）
例の女子の発言でまた調子が狂う。
（というか、アレ動いてないか…どういう仕組みだ…？）
しかも、その発言時にピコピコと動いた耳にも頭を悩ませる。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん？ああ。また後でな」

（やはり機嫌が悪いようだな……ん？）
席を立ちこの場を去っていく篠ノ之箒を見ていると食堂に入ってくる見知った顔が２つ見えた。
「……一夏、俺も先に行くぞ」
「なんだよ、ベルクトもか」
「俺は、お前達よりも早く来ている上に少ないんだから当然だ。……一夏、お前も急いだほうがいいぞ」
そう言って、ベルクトも食堂を後にする。慌てて入ってきた庵璃に気づかれないように。

「ＩＳ、インフィニット・ストラトスは操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。ＩＳには意識に似たようなものがあって、お互いの対話――つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、操縦時間に比例してＩＳ側も操縦者の特性を理解しようとします。
ＩＳは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」
三時間目、ＩＳ基礎知識の授業。やはり一夏は駄目そうだった。まぁ、１日でどうにかなる量ではないので当然だが。
「しつもーん。パートナーって彼氏彼女のような感じですか？」
「そ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわか

りませんが……」

生徒の質問に山田真耶は頬に手をあて、何やら想像しながら身を捩っている。時折、目線がある人物に向くのは何故だろう？

「赤くなったー」

「先生可愛いっ」

教室が女子特有の甘ったるい感じになっている。一夏でさえ、胸焼けを起こしそうなこの空気に対してベルクトは、

（意識…俺のブラッドアークにもあるのか…？だから、あんな反応をしたのか…？）

山田真耶が説明した「ＩＳの意識」というものについて考察していた。

――キーンコーンカーンコーン――

「あっ。えっと、次の時間では空中におけるＩＳ基本制動をやりますからね」

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはーい、しつもーん！」

「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

（うぉ、千冬姉がいなくなった途端これか）
たちまち俺の机の周りが女子で固められた。完全に包囲網を敷かれた。くそ、おれは犯人じゃないぞ。
「お、俺だけじゃなく、ベルクトにも行ってくれよ」
自分の被害を減らすため、ベルクトまで巻き込もうとするが、
「だってザウアーラントくんどっか行っちゃったもん」
――――なんですと！？
席を立ち、見てみると本当にいない。席はもぬけの殻だ。
「追いかけてる子もいるけど、私にはちょっと厳しいし」
「というわけで、織斑くん。観念してね」
――――おのれ、ベルクト。裏切ったな！
「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」
くそ、こうなりゃ自棄だ！
「ち――」
――――パァン！
「休み時間は終わりだ。散れ」
――――ぐぉぉぉ、痛い。コレは痛い。アレか普段はだらしないことをばらそうとしたから若干強めなのか？

「一夏、いいかげん座れ。また叩かれるぞ」
「ベルクト！おまえ――」
――――パァン！
ベルクトの忠告虚しく、結局一夏は叩かれた。

「織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかるぞ」
「……へ？」
四限目。授業開始前に千冬が放った言葉に、痛む頭をさすっていた一夏は間抜けな声を返した。
「予備の機体がない。だから、学園で専用機を用意するそうだ」
「？？？」
「専用機！？一年の、この時期に！？」
「つまりそれって政府からの支援が出るってこと？」
「凄いな～、あたしも早く専用機欲しいな～」
（一夏…頼むから最低限の常識くらい身につけてくれ）
周りの女子が騒ぎ出す中、千冬の言葉に訳が分からないといった顔をする一夏に、ベルクトは「こんな状態で守れるか？」と内心頭

を抱えたくなった。

「ザウアーラント、噛み砕いて教えてやれ」

「はい。

現在世界にあるＩＳのコアは４６７機。コアは篠ノ之博士にしか作れず、博士はこれ以上の作製は拒否しているのでこの数は変わらない。各国研究機関もしくは企業では割り振られたコアで研究をするしかない。ちなみにコアの取引は条約で禁止されている。

で、専用機だが本来は国家もしくは企業に属する者しか与えられない貴重なものだ。国家代表や代表候補生などがそうだ。

今回、一夏に専用機が用意されるのは、世界初の男性操縦者としてのデータ収集目的だろう」

「もういいぞ。わかったか、織斑？後で教科書６ページを見ておけ」

「あのぅ、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

（そういえば、姓が一緒だな）

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

「「「えええええーーーーーーっ！」」」

クラスが一気に騒がしくなる。まぁ、稀代の天才の身内がいたら驚くだろう。次々と篠ノ之箒に質問を投げかけていく。

「うそ、お姉さんなの！？」

「篠ノ之博士って今行方不明で世界中の国や企業が探してるんでし

ょう」
「どこにいるか分からないの？」
「あの人は関係ない！」
シーン
「私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」
（あいつも俺と同じか……）
篠ノ之箒の反応にベルクトは己を見た。かつて、鍵として新連邦に追われ、ジル・バルドナを恨んでいた自分を。
「山田先生、授業を」
「は、はいぃ！それでは授業を始めます。皆さんテキストを出してください」
――――もし、束が箒に愛情を持っていなかったなら同じことになったのだろうか？

「ベルクト。どうだ、調子は？」
「悪くはないが、…すまない。一夏に鍛錬をつける話をつけられていない」
昼休み、昨日と同じく千冬と二人で話している。

「ああ、そのことか。ベルクト、お前はどう考えている？」
「月曜の試合までに鍛えたいな。流石に今のままじゃ勝てはしない」
「だろうな」
そう、あの場では、ハンデはなしでいいと言ったが実際はなければ厳しい試合だ。いくら同じ土俵に立てても向こうは代表候補生、こっちはほぼ素人。経験が違うのだ。相手は仮にも代表候補生。このままでは一夏に勝ち目はない。
「ベルクト、今回は何もするな」
「何故だ？負けるのは目に見えているぞ」
「一番初めはつけ上がらせるよりも、徹底的に叩きのめしたほうがいい。そのほうが努力する」
「それが、千冬の弟か？」
「いや、あいつは底辺じゃなくても努力するさ。
それに負けたら自分からお前の所に教えを請いに行くからお前も楽だろ。それともお前が自力でなんとか話をつけるか？」
ニヤリと口角を上げてこちらを見てくる。
（意地の悪い…）
「分かった。今回俺は手出ししない」
「よろしい。どうせ、お前に聞けないなら篠ノ之にでも聞くだろう」

「あの女か…あいつは大丈夫なのか？なにか一夏に対して凄い怒気を放っていたが…」

「怒気？どうせ、一夏がやらかしたんだろう。気にするな。あれは一夏に惚れているからな、お前が心配するような奴じゃないさ」

「惚れている？」

「篠ノ之は一夏のことが好きなんだよ。幼いころからな」

「好き……」

「で、ベルクト、お前は何をしているんだ？」

「…どういう意味だ？」

「お前、昨日から流堂を避けてるだろ」

そう、ベルクトは朝だけでなく今の今までずっと庵璃を避けている。休み時間になると姿を消していたのはそのためだ。

「…どう扱ったらいいか分からん。千冬、俺に女性の扱い方を教えてくれ」

放課後、一夏には箒の、ベルクトには千冬の授業が発生した。

双方ある意味最も難しい授業だ。

ベルクトは自室にて、流堂庵璃と向かい合っている。

「流堂庵璃、改めてすまなかった。事故とはいえ、女性の下着姿を見てしまうとは、本当にすまない。俺にできることならなんでもしよう。」

「い、いえ。そんな、もういいですよ。気にしないでください。…あ、でもまったく気にして貰えないのもそれはそれでちょっと、傷つい…」

「どうした？」

「い、いえ！なんでもありません！」

最後のほうで庵璃がなにやらごにょごにょと言っていたが聞き取れなかった。

「で、俺にできることはないか？」

そうは言われても庵璃には思い浮かばない。確かにあれをなかったことにするのは無理だが、理由は下着姿を見られたことに対する怒りではなく、羞恥心だ。ぎこちないのは羞恥心による自身の心の乱れなので、ベルクトには特にしてもらうことなどない。

他のヒロイン達なら即死攻撃のオンパレードが来るだろうが、庵璃にそういう思考回路はない。断言する。

だが、ベルクトはそう言っても引いてくれなさそうである。

千冬の教育により若干変に責任感を持ってしまったのだ。

（うー、どうしよ…ぁ…いや、でも、それはちょっと恥ずかしいし、

変に思われないかな？）

チラッとベルクトを見ると、

「なんだ？」

ベルクトが真っ直ぐに庵璃の瞳を見てくる。心なしか少し輝いている気がする。その瞳を見ていると庵璃は自分の考えがどんどん大きくなっていくのを感じる。やがて、膝の上で指先をもじもじと動かしながら、その思いを発した。

「あ、その、じゃあですね…私のこと…庵璃って呼んで下さい」

「…庵璃と呼べばいいのか？」

「はい、そうです。そのかわり私もベルクトって呼びますから…」

「それでいいのか…？」

あまりにも軽い内容にベルクトも戸惑っている。だが、庵璃にとっては軽い内容ではない。

「はい！いいんです！」

返事は大きくなってしまい、先までのもじもじとした態度との差にベルクトも一瞬驚く。

（あ…また）

やってしまったと思い、庵璃はちょっとへこんでしまう。だが、

ベルクトはすぐにいつもの状態に戻って平然と返した。

「…そうか。なら、これからよろしく頼む、庵璃」

いつもと変わらない平坦な口調、言葉も素っ気ないものだが――

――

「…はい！よろしくお願いします、ベルクト」

――――庵璃は心からの笑みで返事を返した。

互いを名前で呼びあうことで、距離が縮まったように感じる。

――――余談だが、ベルクトが千冬に教えられた中に「責任を取って嫁にする」というのがあった。

その後、ベルクトは何度かアリーナでブラッドアークを動かして、一夏は箒にずっとしごかれることで試合に備えた。

そして、試合当日

第０６話　試合の前の懸案事項（後書き）

すみません！操作をミスって不完全なまま投稿してしまいました。
急いで加筆修正しましたが、また後で更に加筆するかもしれません。
本当にスミマセン！
不完全と言っても最後の数文と微妙な部分でしたので、ほんと申し訳ないです。

第07話　血天と蒼雫（前書き）

えーと、先週更新できなくてすみません。ちょっと色々被ってしまいましたのでできませんでした。

初戦闘の回です。戦闘になっているか心配ですが、ぜひ読んでみて下さい。

第０７話　血天と蒼雫

「――――なぁ、箒」

「なんだ、一夏」

俺は今、箒と一緒に第三アリーナ・Ａピットにいる。ちなみに、この対決の日までの間（稽古という名のしごき）に名前を呼び合う仲に戻った。喜ばしいことだ。うん。

けど、一つ問題がある。

「ＩＳのことを教えてくれるって話だったよな？」

「……」

あ、顔背けやがった。

「目を逸らすな！今日まで剣道の稽古しかしなかったじゃないか！」

「し、仕方がないだろう。お前のＩＳはまだ届いていないのだから」

「そりゃ、そうだけどな！それでも、知識とか基本的な事とかあるだろう！」

「……」

「だから、目を逸らすなったら！」

このままじゃ負けちまうじゃねぇか！なおも俺が、箒に詰め寄ろうとしたら足音が聞こえた。

「何を騒いでいるんだ、お前は」

「ベルクト！」

そうだ。元はと言えば、ベルクトが教えてくれなかったのが悪い！

啖呵を切った翌日にベルクトに教えてくれるよう頼もうとしたら、休み時間など全ての時間に一夏の前から姿を消していた。そして放課後、箒に道場へと連行され、以後の放課後は全て剣道の稽古を受けることになった。だから、後からベルクトに教えてもらうのも無理になった。

箒の稽古をやめたら？って思うかも知れないが、しようとしたら木刀が飛んでくるんだから無理だ。

「つうわけで、ベルクトお前が悪い！」

「意味が分からない。とりあえず静かにしろ」

俺の怒りが分からないとは、なんてやつだ！…って

「ベルクト。その子は？」

ベルクトに反射的に突っかかってしまったので、ベルクトと一緒にいた女の子に気づかなかった。少なくともクラスの女子の顔だけは覚えているので、同じクラスの女子ではないことは分かる。

「ルームメイトの流堂庵璃だ」

「流堂庵璃です。よろしくお願いします」

一歩前に出てきて一礼してくれた。礼儀正しい。良い子だなー。

「ぐぁ！」
いってぇえ！
「なにすんだよ、箒！」
「フン！」
いきなり足を踏みつけてきやがった。なんだってんだよ一体。こちとら今から試合なんだぞ。試合に響いたらどうしてくれるんだ。
「お前達…」
「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」
俺達――正確には一夏のみ――が騒いでいると山田先生がピットに慌てて入ってきた。普段からどこか危なっかしいのに、慌てているせいで余計に危なっかしく感じる。
「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」
「は、はいっ。す～～～は～～～、す～～～は～～～」
「はい、そこで止めて」
「うっ」
お、ほんとに止めたよ。ノリで言っただけなのに、この人冗談通じないなぁ。
そうして一夏が考えている間に、山田先生の顔はみるみる赤くな

っている。

「あ、あの山田先生…」

流堂さんが心配している。やっぱり良い子だなー。

「……ぷはぁっ！ま、まだですかぁ？」

すみません。忘れてました。

「一夏、目上の人間には敬意を払え。でないと――」

――――パァン！

「こうなるぞ、馬鹿者」

炭酸飲料のように軽い打撃音でありながら、威力はボクシングヘビー級チャンピオン並という矛盾した千冬姉の鉄拳が俺の頭に炸裂した。いや、チャンピオンの一撃なんて喰らったことないけど。

「千冬姉……」

――――パァン！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

うわぁ、聞きました？教育者にあるまじき発言。美人のくせに彼氏がいないのはこの性格のせいだと思う。いや、千冬姉が媚びてる姿なんて見たかないが。

「ふん、馬鹿な弟にかける手間暇がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐできるさ」

読心術まで。相変わらず、ハイスペックな姉だ。

「一夏、あまり苦労をかけるな」

「なんで、ベルクトに！？」

いや、俺も申し訳なく思ってるけどさ。何故にベルクトにそこまで言われないといけないんだ。

「って、私の用件を聞いてください！」

「あ、すみません。どうしたんですか？」

「はいっ！来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」

おお！それは嬉しい報告だ！

「織斑すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番で物にしろ」

ごごんっ、という鈍い音がしてピット搬入口が開く。見えてくる分厚い防壁扉の向こう側。

――――そこに、『白』が、いた。

「これが、織斑くん専用ＩＳ『白式』です！」

（これが一夏の機体か…俺のとは真逆だな）

現れた機体――――『白式』を見て、ベルクトが初めに思ったことはこれだった。『白式』のメインカラーは白。後は部分的に青がある程度で、黒と朱のブラッドーアークとは真逆のコントラストとなっている。

（後は武装がどんなものがあるかだな…それによって今後の育成が変わる）

ベルクト自身は基本的に全距離対応型だ。よってある程度は全距離の戦い方を教えることができるが、白兵戦は少し厳しい。元いた世界の機動兵器とは違い、ＩＳは生身の戦闘に近く、体術とナイフはまだしも、剣などの武器をあまり扱ってこなかったベルクトには教えるのは辛いのだ。

「あの、織斑先生。対戦の順番はどうなっているんですか？」

（そういえば聞いてなかったな）

思考していた意識が、一夏の質問により現実にシフトする。

「先にオルコットとザウアーラントだ。その間に織斑は初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理を終わらせろ。

ザウアーラント、準備しろ」

（まったく、そういう事は先に言って欲しいものだ）
「分かりました。――――ブラッドアーク展開」
胸元にあるブラッドアークから放出された光がベルクトを包み込み、次の瞬間にはもうＩＳを身に纏った姿のベルクトが現れた。
「よし、十分だ」
「おお！ベルクトのＩＳかっこいいな！なんか、俺のと全然雰囲気が違うし。ん？見事に俺のと対照的な色だな」
織斑姉弟が話しかけてくるが、一夏は早く準備してもらいたい。
「問題はないな？」
実は今のブラッドアーク、初めに起動した時とは異なる。見た目としては銃を握っていないだけだが、機能面ではＩＳに偽装するため、この試合の日までに色々と手を加えたのだ。
だが、ブラッドアークの情報は秘匿すべき、というよりも閲覧すら千冬にしかできないので若干の問題があった。それは全ての作業をベルクトがしなければならなかったことだ。千冬も一緒に作業していたが、弄れるのはベルクトだけなので、実際に偽装作業を行ったのはベルクト。いくら千冬の助言があったとしてもベルクトはこちらの世界の機械を弄るのは初めてなので、その仕上がりに不安があるのだ。
「…はい、大丈夫です」
「よし、ならば行ってこい」

「はい」

ブラッドアークを準戦闘態勢に移行させ、ピットゲート開放を待つ。

「頑張ってね、ベルクト！」

「ああ、負けはせん」

庵璃の励ましに返事をしながら、意識を高めていく。思えば、この一週間の間に庵璃とはかなり良好な関係を築けたように感じる。おかげで日常生活が大いに助かった。連れてきているのはそれに対するちょっとした感謝の表れでもある。

庵璃が今日試合をすることを知ったら、「応援に行ってもいいですか？」と言ってきたのだ。彼女が自分にしてくれている分を自分は彼女に返せていないと考えたベルクトは、彼女の頼みを聞くことで少しでも返そうと考えた。

「では、行ってくる」

ゲート開放を確認し、推進機を吹かす。

「おう、行ってこい！」

「…一夏、お前は早く初期化と最適化をしろ」

まだ、ＩＳスーツにすら着替えていない一夏にそう言い放ち、ベルクトはアリーナへと飛翔した。

「ようやく、来ましたわね」
待ち構えていたセシリア・オルコットと対峙すると開口一番文句を言われた。
「文句は一夏に言ってくれ」
「まぁ、いいですわ。ところで、それがあなたのＩＳ…随分と変わっていますわね」
「まぁ、ほぼ全身装甲だからな。異質だろう」
操縦者はシールドバリアーで守られるため全身装甲にするメリットはあまりない。むしろ、機動性が落ちるのでデメリットになる。
（だが、思い込みで判断すると痛い目を見るぞ）
「さて、始めようか」
「ええ、そうですわね。では篠ノ之博士が見つけた男性操縦者の実力見せてもらいますわ！」
言い放つやいなや、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトｍｋ？》を放ってきた。それを、半身を引くことで躱す。
（開幕だな。代表候補生の力確かめさせてもらう）
「当然躱せますわね」
続けて、今度は弾雨のような射撃を行ってくる。それを、ベルクトは僅かに身を捻る最小限の動きと、時に大きく離脱するという回避運動を繰り返して避け続ける。

「まるで円舞ですわね。そんなに踊りたいのでしたら、一曲奏でて差し上げますわ。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）を！」

（フン、慢心か…っ！）

――――パァン！

――――シールドエネルギー、残量７８０――――

（他人のことは言えないな…）

弾丸の一つが右足を撃ち抜いた。それにより『絶対防御』が発動し、エネルギーが削られる。

「あら、被弾しましたのね。後どれだけ持つかしら」

セシリアはそれが不自然なことに気づいていない。着弾した箇所をしっかりと捉えていなかったのだろう。

当たった箇所は装甲部分。通常のＩＳならシールドバリアーが破壊、次いで装甲が破壊されて、最後に生身の部分に対して『絶対防御』が発動する。だが、今回は装甲部分で発動した。それはブラッドアークの存在故だ。ブラッドアークの装甲に使われている素材は存在せず、また、代えとなる素材を用意するための研究所などない。よって、もし破損した場合修復が不可能なのだ。なので、通常シールドバリアーだけの装甲部分にも『絶対防御』が発動するようにした。装甲に被弾して『絶対防御』が発動、その分をシールドエネルギーから引いていくように設定している。

厳密に言うと、これも『絶対防御』もどきで、実際は異常に強固なシールドバリアーに近い。なので『偽・絶対防御』とでもいうものだろうか。

ちなみに実弾兵器も規格が合わないので同様に補充ができない。

「どうやら、これだけでは無理のようですわね。なら本気でいきましてよ！」

（初めからそうしろ）

肩部ユニットのビット・ベースから４基の自立機動兵器を切り離し、こちらに向かってくる。第三世代型兵器『ブルー・ティアーズ』だ。

（イクスブラウのあれと似たようなものか…）

先程と同じように回避しながら、ベルクトは冷静に分析していく。

（く、当たりませんわ）

ブルー・ティアーズを操りながら、セシリアは内心焦っていた。今も本能的に死角となる位置から狙ったのにそれを見事に躱している。

初めこそ、回避が得意なだけと思っていたが、開始から１５分以上経った今、ここまで撃っているのに当たらないのは得意の一言では片付けられない。

（それに一切こちらに攻撃していないのも気になりますわ）

ベルクトは銃を握っているがセシリアを撃つどころか向けてすらいない。舐められているとも思えるがそれに対する怒りよりも、得体のしれない不気味さを感じる。

（ですが、わたくしは負けませんわ！）

気を引き締め直すセシリアだったが突然ベルクトの動きが止まっ

たので、思わず攻撃の手を止めてしまった。

「もういい」

「えっ？」

「セシリア・オルコット。お前の実力は分かった。お前の温さも」

「……何を言っていますの？」

「本当の恐れも嘆きも知らないお前では俺には勝てない」

「だから、何を言っていますの！」

「いくぞ、セシリア・オルコット。絶望を教えてやろう」

「訳のわからないことを！ああ、もう！早く落ちてしまいなさい！」

ライフルを放ち、続けてビットも向かわせるが、ベルクトは上半身を逸らし、射線と平行になることで初撃を躱し、続くビットの攻撃も体の一部分を支点にして躱すという曲芸じみた回避を行う。

「なんなんですの、さっきからその回避の仕方は！」

悪態をつきながらも、気取られぬようにビットを死角へと誘導する。

（これで…）

「確かに、このビット兵器は全方位から攻撃できる。そして、人間としての死角という隙を突くお前の観察眼も大したものだ。…だが

な」

振り向きもせずに握っている銃でビットを撃つ。

「……なっ！？」

威力が低く設定してあるのか、ビットは破壊されなかったが、衝撃で銃口があらぬ方向を向かされた。

「毎回同じようにしていれば通じない。わざと隙を見せればそれに喰いつく。清濁織り交ぜなければせっかくの第三世代型兵器が泣くぞ」

「くぅ！あなたに言われずとも！」

（なら全方位から！）

「そして」

「……！」

全身に衝撃が走る。ベルクトの銃から撒き散らされた弾丸がセシリアを撃ち抜いたのだ。

「これを使っている間貴様は動けない」

「くっ！」

（そこまで分析していたなんて…！）

体勢を整えるため一旦ビットを帰還させ、距離を取る。絶好のチャンスだろうに、ベルクトは追ってこない。

「忠告感謝しますわ。でも、どうしまして？絶望を教えて頂けるのでは？」

劣勢にも関わらず、虚勢を張るセシリアだったが、それは焦りの裏返しだ。そうでもしないと、試合を続けられない程に手を潰されている。
（奥の手も通じるかどうか…怪しいですし…）
「フン、承知した。だが、その前にチャンスをやろう。次のお前の攻撃、俺はここから動かない」
「なっ！」
余りにも不遜な言葉に沈んでいた気持ちが怒りに染め上げられた。
「……馬鹿にして！なら、お望み通り！」
全方位から射抜くために、４基のビットを向かわせる。
「狙い撃たせてもらいますわ！」
（いくら、余裕があってもこれを喰らえば…）
包囲完了と同時に放つ。――――否、放とうとした。

――――フッ

「えっ？」
急にビットの感覚が無くなり、ビットが地上へと落下していく。
（ブ、ブルー・ティアーズ！）
意識を集中させるが一切の反応がない。遂には完全に地上へと落下し、地面に突き刺さった。
（な、何が…）
「あ、あなた、一体何をしましたの！？」
「戦闘で相手に尋ねるとは愚行だぞ。それよりも――――避けろ」
――――警告！敵ＩＳが砲撃体勢に移行。非固定浮遊部位に高エネ

ルギー反応。

「なっ！」

ベルクトの言葉とＩＳの警告により、その場から緊急離脱する。

刹那さっきまでいた空間を紫色の極光が通りすぎた。その光はアリーナの遮断シールドとしばらく拮抗した後、ようやく消えた。

（遮断シールドと拮抗するなんて…なんて威力…）

あまりの威力に全身から嫌な汗が噴き出す。

「余所見できる状況か？」

「……！」

思いの外、近くから聞こえた声に驚いて視線を戻すと、ベルクトが目と鼻の先まで近づいてきていた。

「…っ！……あぁ！」

後退し距離を取ろうとするが間に合わず、首を掴まれ、投げ飛ばされる。

（く、せめて一撃でも）

吹き飛ばされながらも腰部ユニットのミサイルビットから、ミサイルを撃ちだす。そして、なんとか体勢を整え、着弾を確認する。

「こ、これなら、と、届いたでしょう…」

一矢報いた、と思い、セシリアが見たのは、

――――ミサイルを苦も無く、エネルギー刃で切り裂き、こちらに向かってくるベルクトだった。

「そんな…」

奥の手も使い切ったセシリアに打つ手はもうない。

「だから、戦闘でぼうっとするな」

茫然しているセシリアにベルクトはダブルチッキを喰らわせ、そのまま地上へと叩き落とす。

「きゃあああぁぁぁ！」

――――ドカァァァァンッ！

「くぅ…」

「これで、終わりだ」

――――警告！敵ＩＳが砲撃体勢に移行。非固定浮遊部位に高エネルギー反応。

叩きつけられ、衝撃で意識が朦朧とするセシリアが見上げた空には、

――――後光を纏った黒いシルエットの堕天使がいた。

（綺麗…ですわね）

それは自然と浮かび上がった、純粋な思い。

――――だが、綺麗に思えても、それが慈愛に満ちているとは決まっていない。

次の瞬間、セシリアに黒いエネルギー球が殺到する。

『試合終了。勝者――――ベルクト・ザウアーラント』

蒼雫は血天により、地に落ちた。

第07話　血天と蒼雫（後書き）

感想を見ていると、なんかフルボッコを期待しておられるのかと思いまして、せっしーには犠牲となっていただきました。ごめんね、せっしー

次回の一夏戦をどうもっていくか、妄想と没案が大量に出てきてます。では、考えてきます！

第０８話　血天と白式（前書き）

まずは、謝罪を。
前回の『絶対防御』のくだりですが、シールドバリアーとごっちゃになってました。すみません！
修正して、なんとか言いたいことが伝わるようになったはずです。

第０８話　血天と白式

「では、頼みます」
中にいる養護教諭に後のことを頼み、部屋を後にする。

あの後、気絶したセシリアをベルクトは保健室へと連れて行った。ベルクトの砲撃により、抉れてしまった地面の整備に時間がかかるのでお前が連れて行けと千冬に言われたからだ。
（加減はしたし、絶対防御は貫いていないのだから放っておいても構わないと……）

「…ベルクト」

「なんだ、庵璃」

千冬にちょっとした反論を心内でしていたベルクトに、庵璃が少し固い口調で声を掛けてきた。
何故庵璃がいるかというと、ベルクトとセシリアを二人きりにするのはマズイからといった理由ではなく、同じ女性というわけで千冬が同行を命じたからである。
――――だが、先の不安が少しもなかったとは言い切れない。なぜなら、ベルクトがセシリアをお姫様だっこという創作物の中でしかお目にかかれない方法で運んでいたから。

「あそこまでする必要があったの？」

「あそこまでとは？」

少し怯えの混じった口調に何とも言えないものを感じるが、ベル

クトには何を言っているのかピンとこない。

「…オルコットさんとの試合の後半…」

（ああ…）

なんとなく分かった。確かに後半の試合の流れはベルクトによる虐殺試合（ワンサイド・ゲーム）とも言えるもので、特に最後の砲撃はやりすぎと言われても致し方ない。そして挑発して、セシリアを嬲り殺しにしたベルクトに良い感情は抱く者は皆無だろう。その真意に気づいている者を除いて。

「先の問いだが、必要だった」

「…どうして？」

「ＩＳは兵器だ。それをあのように慢心して扱っては怪我、下手をすれば死ぬ」

「そんな…ＩＳはスポーツだよ？『絶対防御』だってあるんだから死ぬなんて…」

「今はな。条約で軍事利用を禁止していると言っても国家防衛の要としてＩＳは絶対的存在だ。戦争が勃発すれば条約など無視する国も出る。そうなれば、『絶対防御』を貫く武装もできるかもしれない。その時にあんな状態では死ぬ」

「……」

「だから、俺は教えてやった。打つ手を全て封じられ、ただ自らが墜とされる時を待つしかない恐怖と絶望を。そうすれば、次から慢

心などしないだろう」

「…つまり、ベルクトはオルコットさんのためにしたってこと？」

「さぁな。それはセシリア・オルコットがどう受け取るかだ」

絶対防御分のエネルギーはちゃんと確保されていたので、セシリアに外傷はない。精神的な外傷はできているかもしれないが、代表候補生だから心配ない、もしそうなったらそれまでだった、とベルクトは考えている。

「…優しいね、ベルクトは…」

「俺が…優しい…？」

庵璃がふと微笑んで、そんなことを言うものだからベルクトは戸惑う。

「そうだよ。初めは何であんなことしたんだろ、ベルクトはこんなことが好きなの、って怖かった。でも、今のを聞いたら、オルコットさんを死なせたくないって考えでやったって分かった。人を死なせたくない。それって、十分優しいよ？」

「…俺は、優しくなどない。周りも俺が優しいなどと思わない」

「優しいって。それに私が優しいって思ってるんだから、少なくとも一人は思っているよ」

先程までの暗い雰囲気など既になく、庵璃は慈愛に満ちた笑顔を向けてくる。

「フッ、物好きめ」
「あ」
「どうした？」
「初めて笑ってくれたね。やっぱり人間、笑顔がいいよ」
「…早く戻るぞ」
アリーナへとベルクトは足を向ける。
「もしかして照れてる？」
「……」
更に歩調を速める。
「あ、待ってよ！ベルクト！謝るから待って！」

『アリーナの整備、終了しました。織斑くんとザウアーラントくんは所定の位置についてください』
ベルクトの砲撃により抉られた地面の整備が終わり、山田先生の放送がピットに響いた。ちょうど、庵璃とアリーナ・ピットに戻っ

てきた時だ。

「丁度良いタイミングだったな」

「そ、そうね」

「庵璃、もう少し体力を付けないと、この先苦しいと思うぞ」

「ど、努力します…」

あれから、初めは競歩程度だったのだが校舎を出てから追いかけっこになり、アリーナ・ピットまでずっと走ってきた。ベルクトは息一つ乱していないが、庵璃はかなり辛そうだ。

「まぁ、いい。では、俺は行ってくる」

「は、はい。頑張って」

ブラッドアークを纏ったベルクトの背中を庵璃は見送った。

「よう、ベルクト遅かったな」

アリーナでは既に一夏が待っていた。初期化と最適化が終わり、一次移行（ファースト・シフト）が完了したのだろう。さっき見た時は無骨だった形状が、滑らかな曲線とシャープなラインにより洗練されたモノへと変わり、色も『白』から白より尚も白い『純白』へと変わっていた。手には

ブレードを持っている。
「…貴様まであいつと同じ事を…」
「？…ところで、セシリアは？」
軽い口調から少し真剣味を帯びたモノに変わった。
「別に大事ない。そもそも『絶対防御』は貫いていないし、ちゃんと加減はしている」
「加減…ね。お前にとっては全然相手にすらなってなかった、ってことか」
「一夏？」
「…なぁ、ベルクト。最後の攻撃はひどくないか？」
（ああ、一夏、貴様もか）
「それか…」
先と同じ問答が開始されそうな雰囲気にやや嫌気が差す。
「一夏、そのことはこの試合が終わってからにしろ。終わったら話してやる」
なので、先手を打たせてもらう。
「…分かった。もともと、ベルクト相手に他のことを考えている暇なんてないしな。けど、終わったら絶対に聞かせてもらうぜ」

「ああ」

「なら…いくぜ、ベルクト！」

ブレードが変形し、エネルギー刃を展開して、一夏が迫ってくる。

「来い、一夏」

それに対し、迎え撃つためにベルクトもカオスブレードを展開する。

――――キィィン、キィィン！

（くそ、一撃も通らねぇっ）

刃を交わらせること数十合。その間、一切の攻撃が通っていない。ベルクトにも一夏にも。

ベルクトはわざわざ俺に合わせて、接近戦しかしてこない。その間に俺を撃てる瞬間があったのにもかかわらず…。

（つまり、それだけの実力差があるってことか…！ていうか、何でそんなにその武器使い慣れてんだよ！）

驚くべき点は、ベルクトのブレードの使い方だ。こちらが、一本の太刀を振るうことで行う攻撃に対し、ベルクトは左腕の装甲下部から発生させたエネルギー刃を払う、突く、引くという動作で全てをいなす。手で持つ武器と違い、力を込めにくく、引く動作をかなり速く行わなければ、突いた後に隙ができる。

初めはそれを狙って攻撃を仕掛けたが、見事にいなされた。

（こんな武器、暗器くらいしかねぇだろ！ぜってぇ、日常で使わないだろ！）

「戦闘中に考え事か…どうやら加減が過ぎたようだな」

「いやいや、結構一杯一杯ですよ？」

「会話が成立しているんだ。余裕だよ」

そう言って、ベルクトは右腕の装甲下部からもエネルギー刃を展開させる。

「二刀流かよ…」

「さぁ、セカンドステージだ」

（単純計算で手数が2倍、一本でも厳しいってのにっ！）

「こうなりゃ……やってやりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺が一本に対し、向こうは二本。必然的に一夏は一連の流れを加速しなければならず、先程よりも剣戟の速度が上がっていく。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

（伊達に今日まで箒のしごきに耐えてきてねぇっ！）

この機体には射撃装備が一切ない。武装はこの『雪片弐型』のみ。剣を箒から教えてもらったのはあながち間違いではなかった。

しかし、いくらなんでも一週間程度では三年以上ものブランクは埋められず、慣れないＩＳでの戦闘ということもあり、速度を上げ

ていくベルクトの攻撃に段々と一夏はついていけなくなった。それに比例して、シールドエネルギーがどんどん削られていく。
もとより、軍人であり、稼働時間が一夏よりも長いので無理はない。追いつかせてもらっているのであって、追いつけていると思っている方が傲慢だ。

「一夏、そろそろ詰むぞ」

「まだま……がぁっ！」

剣戟の最中、刃にばかり集中していた一夏の脇腹にベルクトの蹴りが入り、吹き飛ばされた。

（なんつぅ威力だ…）

――――シールドエネルギー、残量３４０――――

（『絶対防御』が発動した！？蹴られただけなのになんで！？）

「また教えてやるから、今は目の前に集中しろ」

「…！」

声に意識を呼び戻されると、ブレードを振り下ろそうとしているベルクトがいた。

（回避は…無理か！くそっ！）

仕方なく雪片で受け止めるが、ＩＳに慣れていない一夏では不安定な姿勢のために力を込められない。

「うぉぉぉぉっ！」

つまり、再び吹き飛ばされる。

（くそ、この流れ…セシリアの時と同じだ！どうにかしないと！）

「まだ諦めていないな」

「諦められるかっての！俺は千冬姉の弟で、この武器も千冬姉と同じ武器だ！これで、諦められるか！

ベルクト！お前に勝つことができなくても、せめて一矢報いてやるぜ！」

（いつまでも一方的に守られてるだけじゃ駄目なんだ！もう守られるだけの関係は終わらせる！）

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

刺し違え覚悟でベルクトに向かい、大上段に振り上げた雪片弐型を振り下ろす。

「甘いぞ、一夏」

だが、それも両手のエネルギー刃を交差するようにして受け止めれた。

（もう、エネルギーが残り少ない。ここで引いてもジリ貧だ。だったら…このまま、押し切る！）

「うおおおおおおおおお！」

――――唯一仕様（ワンオフ・アビリティー）『零落白夜』発動

突如、エネルギー刃部分の光が増し、雪片の刀身全体が一際強烈な光を放つ。
そして次の瞬間、ベルクトのエネルギー刃を――――切り裂いた。

「なっ！」

流石にベルクトも予期していなかったのか慌てた様子で、バックステップで回避する。が、間に合わず、エネルギー刃の切っ先が胸部から腹部にかけて切り裂いた。

「馬鹿な…一夏、貴様一体何をした！」

（ベルクトが声を荒げているのなんか初めて聞いたぜ。そんだけ予想外って事か。
よく分かんねぇけど、チャンスだ！もういっちょう！）

「もう一撃いいいい！」

「チィっ！」

『――――試合終了。勝者――――ベルクト・ザウアーラント』

「え？」
「は？」
……え、なんで？

第０８話　血天と白式（後書き）

終わり方が前回と似たような感じですみません。しかも少ないｏｒｚ
次くらいで、せっしー回収したいと思いますのでこのぐらいがちょ
うど良いかと思いましたので、ここで切っちゃいました。

第０９話　試合の後の報告事項（前書き）

先週は更新できなくて申し訳ありませんでした。

活動報告のほうではその旨を書いておりましたが、そちらをご覧になっていない方は知らなかったと思うので申し訳なかったです。

第０９話　試合の後の報告事項

「う…」

（…ここは？）

診察と軽い手当を受け、ベッドに寝かされていたセシリアが目を覚ました。まだ意識が朦朧としており視界に入った天井のみでは自分がおかれている状況が理解できない。

（わたくし、確か…試合を）

順を追って、そこまで思い出したところで――――

『…ベルクト』

「ッ！！」

扉越しに聞こえた名前により、自らに起こったことを思い出す。

（あ…あ…）

嫌な汗が出てきて、気持ち悪い。言葉がうまく纏まらない。敗北した屈辱による怒りなどよりも、為す術もなく墜とされたことによる恐怖が湧き出てくる。

『あそこまでする必要があったの？』

『あそこまでとは？』

恐怖に苛まれながらも扉越しに聞こえる会話から意識が外せない。

恐怖、あるいは無意識に自らの恐怖の元凶を知りたいが故に体が動作を拒否し、聞きたくないという自らの意志に反す。

『…オルコットさんとの試合の後半…』

（……）

『先の問いだが、必要だった』

（……必要だった？わたくしを嬲ることが…？）

ベルクトの発言に恐怖の中にも僅かな怒りが芽生えてくる。“勝つために”必要だった手段としてではなく“只単に”必要だった、と感じさせる響き。その響きがセシリアの心をざわめかせたのだ。

『…どうして』

『ＩＳは兵器だ。それをあのように慢心して扱っては怪我、下手をすれば死ぬ』

（……ッ！）

だが、その怒りもベルクトの言葉で失せてしまう。

『そんな…ＩＳはスポーツだよ？『絶対防御』だってあるんだから死ぬなんて…』

『今はな。条約で軍事利用を禁止していると言っても国家防衛の要としてＩＳは絶対的存在だ。戦争が勃発すれば条約など無視する国も出る。そうなれば、『絶対防御』を貫く武装もできるかもしれん。その時にあんな状態では死ぬ』

『……』

話している女性が息をのむのが分かる。セシリアもそうだ。彼女は代表候補生として特別な訓練を受けており、有事の際の対応も頭にある。だが、あくまでそれは『想定』であり、彼女も戦争を知らない『ただ兵器が使える小娘』でしかない。その上、慢心して負けたのは事実なのだから反論の余地などない。

『だから、俺は教えてやった。打つ手を全て封じられ、ただ自らが墜とされる時を待つしかない恐怖と絶望を。そうすれば、次から慢心などしないだろう』

（ええ…確かに味わいましたとも……）

それは僅かばかりの反抗。最早、ぐうの音も出ないほどに自らの矜持を壊された彼女の。

『…つまり、ベルクトはオルコットさんのためにしたってこと？』

『さぁな。それはセシリア・オルコットがどう受け取るかだ』

（わたくしが、どう受け取るか…？）

『…優しいね、ベルクトは…』

（何を言っていますの、この方…あれが女性に対する仕打ちですか！）

まだ感情の整理がついていないセシリアは、ベルクトと会話している人に「頭大丈夫ですの？」と真剣に言いたくなった。

常の彼女ならば、もう少し早い段階でベルクトの発言から自分で気づけただろう。

『そうだよ。初めは何であんなことしたんだろ、ベルクトはこんなことが好きなの、って怖かった。でも、今のを聞いたら、オルコットさんを死なせたくないって考えでやったって分かった。人を死なせたくない。それって、十分優しいよ？』

（わたくしを死なせたくない…）

そんな風に他人に思われたのは久しぶりな気がする。思い返せば、この数年は心休まる時などなかった。

３年前に両親が事故で他界してからは金の亡者共がその莫大な遺産を狙ってきた。その中にはセシリアを亡き者にしようとした者もいる。

その者達から遺産を守るためにあらゆる勉強をした。その過程でＩＳ適性がＡ＋と分かり、国籍保持のための好条件が政府から提示された。その条件の中には両親の遺産を守るために有効なものがあった。そして代表候補生になったので、今ではその者達も少なくなり、なりを潜めている。

だが、代表候補生となったことで今度は、セシリアを取り込もうとする者達が多くなった。代表候補生という実力と地位、オルコット家の名と遺産、更にはセシリア自身の容姿。それらを目当てに自ら、もしくは自らの子息と婚約させようと画策しているのだ。

だから、社交界で会う男性の目には下心が見え、その目にはセシリア自身が映っていない。その態度も「この俺と結婚できるのだから幸せだろう」という不遜さ、「こいつと結婚すれば金が」という浅ましさ、「こいつを好きにできる」という卑しさが垣間見えるものばかりだ。それに呼応するように発生する周りの女性の嫉妬も彼女を辟易とさせる。だが、特に彼女を不快にさせたのは、彼女に何とか取り入ろうと媚びる姿勢だ。

その様は、亡き父の面影を連想させる。母の顔色ばかり窺う人だった父。その姿を見て、『将来は情けない男とは結婚しない』とい

う思いを抱いた。故に、特にそのような態度の者には不快感が募る。
だから、突如現れた男性ＩＳ操縦者に興味を持ち、自分の理想の男性になりうるだろうかと期待した。その結果は――――

（初めは…無知で、無礼で、期待はずれだと思いましたが…戦ってみると、わたくしのほうが無知で、無礼でしたのね。
彼は驕らず、冷静に、わたくしをきちんと分析した…その上でこちらの欠点を指摘しながら、わたくしを倒した…これでは試合ではなく教導ですわね…
…それに、まるで無関心に見えながら、わたくしを案じてくれる優しさ…）

かなりの好印象だった。
――――しかし、彼女の言う理想の男性像としては、ベルクトは正直微妙にずれている。彼は、媚びはしないが、自らの目的のためには他に取り入り、利用する人間だった。それに見た目の印象としては、ひ弱そうな男とも見られる。その理由の例を挙げるとすれば目だ。
一夏は生気に満ちた力強い目をしているが、ベルクトは生気のない濁った目をしている。あの戦いの後、こちらの世界に来てからは多少生きることに意欲的になり、マシになったと言えど、まだ以前の彼から完全に変わったわけではない。

――――だが、そんなことは彼女にはもう関係ないだろう。

「ベルクト、ザウアーラント……」
先程とは違い、その名を口にして湧き起こる感情は恐怖ではない。胸が熱くなり、ドキドキとしてくる。むしろ、自然と心が満たされる心地よい感情だ。
（この感情はなんでしょう……？）

初めて知る自らの感情にセシリアは戸惑う。だが、彼女もその感情がなんなのかは分かっている。
（知りたい…彼のことを…）
恐怖から解放された彼女に、疲労による眠気が襲ってきた。そのまま心地よい睡魔に身を委ね、彼女は意識を手放す。

「青春してるわねぇー。……けど、私がいること忘れてない？」
カーテンで仕切られたベッドにいるセシリアにも聞こえたのだから、中にいた彼女に聞こえないはずがなかった。
一人、養護教諭の呟きが静まり返った保健室に寂しく響く。

「俺、なんで負けちゃったんだ？」
現在試合が終わって、俺とベルクトはピットに戻っていた。近くには箒、流堂さん、山田先生に千冬姉もいる。

「バリアー無効化攻撃を使ったからだ。武器の特性を考えずに戦うからああなる」

「『バリアー無効化』？」

「相手のバリアーを切り裂いて、本体に直接ダメージを与える。『雪片』の特殊能力だ。」

千冬姉が俺の疑問に対して、空中投影ディスプレイを使って説明をしてくれる。映像は俺がベルクトの装甲をブレードごと切り裂いた場面だ。

（改めて見ると、やっぱこれすげぇよな……）

「これは、自分のシールドエネルギーをも攻撃に転化する機能だ。私が第一回モンド・グロッソで優勝できたのも、この能力によるところが大きい」

まさか、世界最強の姉と同じ武器とは。名前から薄々察していたが、実際本人の口から聞くとやはりとんでもないことだ。

「そうか、それで白式のシールドエネルギー残量がいきなり０に…」

「まぁ、例え特性を知っていても、どのみちお前はザウアーラントに勝てはしなかったのだから大して意味はない」

「うっ……」

（…そうでした）

確かにあの時シールドエネルギーが０にならなかったとしても俺はベルクトには勝てなかった。一矢報いたことでちょっと調子に乗っていた。

「ＩＳの戦いはシールドエネルギーが０になった時点で負けになります。バリアー無効化攻撃は自分のシールドエネルギーと引き換えに相手にダメージを負わせる。いわば、諸刃の剣ですね」

（なるほど…）

山田先生の補足に、改めて俺は雪片の特性を理解する。なのに、我が姉が爆弾発言をしてくれた。

「つまり、お前の機体は欠陥機だ」

「欠陥機！？」

「言い方が悪かったな。ＩＳはそもそも完成していないのだから欠陥も何もない。お前の機体は他の機体よりちょっと攻撃特化になっているということだ」

「…はぁ」

（それっていいのか？）

「ＩＳは今待機状態になっていますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね」

山田先生が俺に、鈍器と呼んで差し支えない『ＩＳ教訓本　改訂第３版』を渡してくれた。ちょっとめくってみたが、こんなに分厚いのに１枚１枚がめちゃくちゃペラ紙だ。

（いかん…眩暈が…）

「一夏、そんな状態で大丈夫か？」
「大丈夫だ。問題ない」
「？」
うぉぉぉぉ、分かってくれなかった。ベルクトに返したけれどまったく意味が通じてない。ボケに無反応ってのが一番辛いんだぞ！
「なら、今話そうか？」
「話す？」
（はて？何か…）
「…試合が終わったら、セシリア・オルコットの試合の理由を俺に話させると言っていたはずだが？」
「あ…」
突然負けたことにばかり考えがいって、すっかり忘れてた。
「悪い。すっかり忘れてた」
「……」
ベルクトが呆れたような目で俺を見てくる。正直嫌だが、こっちに非があるので何も言えない。
（けど、話はしっかりと聞かせてもらわないとな）
「じゃあ、ベルクト教えてくれよ。なんで、セシリアにあんなことしたのか」
「分かった。だが、正直2度も話すのは面倒だから要約して話すぞ。あれは――――」

「――――これが理由だ」

「……」

ベルクトの言う理由は尤もだ。尤もだけど……それが正しいことだとは俺には思えない。なのに、俺には返せる言葉がない。それ程にベルクトの言葉には重みがあった。とても同じ年代とは思えない。

「なぁ…ベルクト」

それでも、一つ聞いておきたい。

「なんだ？」

「お前は…心が痛まなかったのか？」

例え、セシリアを思っての行動だとしても、圧倒的な力で女性を叩き落とした。それを何も感じず行ったのなら、俺はベルクトに一発入れないといけない。

心を痛めずに行ったそれは教導ではなく、教導を騙った暴力でしかない。人の痛みを分からずに行った教導は、何も意味を持っていないのだから。

「分からないな…」

「…分からない？」

「そんな感情が今俺にあるのか…それすら分からない」

「……」

初めはとぼけているのか、と思ったが違う。分からない、そう言ったベルクトの表情がとても遠く、悲しい色をしていたから。

（自分の感情が本当に分からない……ベルクト…お前は、一体？）

この時のベルクトはひどく脆そうで、今にも消えてしまいそうなほど存在が希薄だった。

俺は、いつの間にか拳に入れていた力を抜いた。

「正直、納得はできないけど……分かったよ、ベルクト。お前がセシリアのためにしたってことは」

「そうか…」

「けど、やっぱあの仕打ちはないと思うぞ。だから、セシリアにちゃんと謝っておけよ」

何か嫌な感じがする空気を換えようと、少しおどけた口調でベルクトに言ってやる。

「…分かった。後で謝っておこう」

それを察してくれたのかは分からないが、ベルクトもいつもの感じに戻って返してくれた。

「話はついたようだな。では、今日のところはもう帰って休め。ああ、ザウアーラントは残れ」

頃合いを見ていたのか千冬姉が俺たちにそう言い放った。そういや、この場にはみんないたな。見回してみると、千冬姉と流堂さん以外心なしか微妙に暗い。やっぱり、ベルクトの話のせいだろうな…。

――――パァン！

「さっさと帰れ」

そんなことを考えていたら、千冬姉に叩かれました。ありがたいお言葉と共に。

（ふん、確かに叩きのめしたほうがいいとは言ったが、オルコットにもやるとは…まぁ、あいつは少々自信過剰気味だったからな。良い薬になっただろう）

ベルクトの話を聞く前から彼女――――千冬にベルクトを責める考えなどない。ただ、少々ベルクトの力を甘く見過ぎていたか、と思っただけだ。

（他の生徒共もＩＳの恐ろしさを知ったことだろう……）

周りの人間はベルクトのやったことに対して、否定的な感情を抱く。大抵の者は、そこで思考が止まり、その先にあるベルクトの真意に気づく者はいないだろう。ＩＳが兵器であり、危険なモノであることを認識できれば、まだ良いほうだ。授業で言っても、本当の意味で理解しているものなど少ないのだから。

そして、ベルクトの話を聞いた彼女がベルクトに対して感じたことを端的に表すとしたら――――弱い、だった。

（一夏の質問に答えた時のあの表情……本当に分からないという表情だった。軍人だったから、感情が麻痺しているのか……）

脳裏にかつての教え子の顔が若干よぎるが、それは違うと即刻切り捨てる。

（ベルクトはあいつとは違う。あいつは強さを分かっていなかったが、ベルクトは分かっている。だからこそ……ひどく弱く見える）

ベルクトを聴取していた時の会話から、その強さを持った者に敗れたことは分かる。ベルクトは作戦行動中に撃墜されたと言った。この短期間であそこまでＩＳを扱えている奴が弱かったはずがないだろうし、慎重な奴が敵の作戦に嵌るとも考えられない。何より奴のブラッドアークは向こうの世界で扱っていた機体と同じものだと言っていた。悪辣な機体であるアレと卓越した操縦者であるベルクト。生半可な兵器とパイロットでは為すすべなく落とされるだろう。ならば、ベルクト以上に強い敵、単なる破壊力などに頼らない本当の意味で強い者に敗れたのだと考えられる。

（今の奴はそれに対して羨望を持っているようだが、どうすればいいか分かっていない…奴にも守りたいと思える者が出てくれれば…）

「…分かった。後で謝っておこう」

そうこう考えているうちにもう話がまとまったようだ。

（少し考え過ぎていたな…）

「話はついたようだな。では、今日のところはもう帰って休め。あ

あ、ザウアーラントは残れ」

（まったく、全員暗い顔をしおって……山田先生まで）

解散を宣告して、ふと見回してみるとほぼ全員の顔に影が差していた。山田先生までそうなっているのは正直頭が痛い。

（山田先生……君は理解していて欲しかったよ。というよりも、先生が生徒の前でそんな表情を晒しては駄目だ……）

――――パァン！

「さっさと帰れ」

（やれやれ……ん？）

とりあえず、ぼさっと立っている愚弟に制裁を加え、ＩＳ操縦は凄いのに普段は頼りない山田先生に内心軽く嘆いていると、一人だけ――――流堂庵璃だけが普段と変わらず、いや、心なしかベルクトに対して労りと、少量の悲痛が混じった視線を送っているのに気付いた。

（流堂…？何故、そんな目を？）

ベルクトの話を聞いて、あの事件の被害者という点を除けばただの一般生徒であるはずの彼女が怯えもせず、ベルクトを見ているのが疑問に思った。その目は「お疲れさま」「痛い」とでも言っているかのようだった。

彼女がベルクトに気があるのは分かっている。そうだとしても怯えてもおかしくなく、仮に怯えなかったとしても先の二つの感情を出すというのはやはり変だ。

（…知っていた？ベルクトが話したのか？）

そこまで考えて、ベルクトが話す前に言っていたことを思い出す。

――――正直２度も話すのは――――

（そういえば、ピットに戻ってきた時……なるほど、理由は知っていたか。だから余裕があり、聞けていたわけだな。
それで、さっきのベルクトの表情に気づき、そんな顔をしたのか…）

件の流堂庵璃はベルクトに外で待つことを伝えて一夏と篠ノ之と一緒にピットを後にしようとしていた。

（ベルクト…お前が欲しいものは案外近くにあるぞ）

第０９話　試合の後の報告事項（後書き）

やっと小説一巻の１話、アニメ版の２話が終わりました。
そういえば、ここ小説だと日付合わないんですよね。
入学式の日の再来週にあるクラス対抗戦⇒この言った日の一週間後に代表決定戦⇒それから四月下旬に鈴が来る⇒喧嘩して数週間後、五月。

ｗａｉｔ…

どうやっても日が合わないですよね？

以下ちょっと報告
バイトが決まって、私この一か月近く研修してて、来月からお店がオープンするんです。ですが、クルーが足りてないらしく、限界まで出勤しないといけないらしいですので不定期度合が上がりそうです。
週一更新をしたいですが、それが更に厳しくなります。
読んで頂いている方には申し訳ないです。

第１０話　転校生はＳｅｃｏｎｄ　Ｃｈｉｌｄｈｏｏｄ　Ｆｒｉｅｎｄ（前書き

日曜に投稿するはずが、途中で寝落ちしてしまいました。申し訳ないです。

いまだ、書き方が安定しません。会話文のところを詰めてみましたがどうでしょうか？

第１０話　転校生はＳｅｃｏｎｄ　Ｃｈｉｌｄｈｏｏｄ　Ｆｒｉｅｎｄ

「では、これよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んでみろ」

四月も下旬。あのクラス代表決定戦から一週間以上経ち、遅咲きの桜も全て散ったこの頃。グラウンドにて俺たち、一年一組はＩＳ実習訓練を行っている。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

既にセシリアは展開を終え、俺を待っていた。確かにセシリアは一瞬で展開できたが、俺は白式がまったく反応してくれない。

（というより、俺はまだ新人だぞ……）

そんなことを言ったら、鉄拳が飛んでくるので言わず、俺は右手のガントレット――白式の待機形態――を左手で掴み、ＩＳが展開されるイメージを強く意識する。

「こい、白式！」

刹那、右手から薄い膜が展開されるのを感じると俺の体は光に包まれ、それが消えた時にはＩＳを纏っていた。試合から度々放課後の特訓などで展開したが、このポーズが一番しっくりくる。

「よし、飛べ」

「はい」

「よーし…うぉ！っと！あぁ！」

我らが鬼教官の命を受けて、セシリアはあっという間に遥か上空に行ってしまった。俺も早くしないと怒られるので、続けて飛ぶが姿勢制御が上手くいかずにぶらぶらと情けない姿を晒してしまう。

『遅い。スペック上の出力では白式の方が上だぞ』

「そう言われても……自分の前に角錐を展開させるイメージだっけ？ぬぉー、よくわかんねぇ」

『イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ』

通信機から飛んでくる千冬姉のお叱りの言葉に疑問を浮かべていたら、個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）でセシリアがアドバイスしてくれる。これは、声に出さなくても相手と会話できる完璧な内緒話方法だ。やり方は『頭の右後ろ側で通信するイメージ』らしいのだが、正直分からん。

そうそう、今ではセシリアとも仲が良い。あの試合の後、俺はベルクトにコーチを頼んだ。そうしたらセシリアも一緒に特訓に参加し始め、ベルクトに一緒に教えられたり、逆に俺とベルクトに教えたりと色々……俺が教えられてばっかりです。まぁ、そんなこんなで仲良くなりました。そういや、ベルクトに頼んだ時、何故か箒は不服そうだったな。というより、ベルクトの話を聞いてからどこか影がある気がする。

「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやってみせろ」

ちょっとした回想をしていたら、次のお達しだ。

「了解。ではお先に」

セシリアはすぐに従い、地表へと降下していった。そして、見事に停止してみせた。

「うまいもんだなぁ。よし、俺も」

セシリアの操縦に感心し、俺も降下を開始する。

（意識を集中。背中の翼状の突起からロケットファイヤーが噴出しているイメージ…それを傾けて、一気に地上に……！）

――――ヒュイッ

（え…？あぁ…！やばい、これ違う…！）

気づいた時には時既に遅し。豪快な音と土煙を巻き上げ、俺はグラウンドに着地――――専門用語で、というより誰が見ても墜落――――した。

「いってぇ～死ぬかと思った」

「馬鹿者。グラウンドに穴を空けてどうする」

「うぅ……すみません」

「情けないぞ、一夏。お前はクラス代表なんだぞ。このクラスを代

表する人間なんだから、もっと気を引き締めろ」

そう、箒の言うとおり、一年一組のクラス代表は俺だ。

――――思い返すは、試合翌日の朝のＳＨＲ。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生が嬉々として喋っているが、俺も他の女子も何故？って顔で教室は静まり返っている。そりゃ、そうだ。あの試合で俺とセシリアは負け、最終的に勝ったのはベルクト。代表はベルクトだと誰もが思っていたのだから。

「あの、先生」

「はい、織斑くん」

「あのなんで俺なんですか？勝ったのはベルクトですよ」

おそらく全員が思っているだろう疑問を俺が代表して尋ねる。

「あ、それはですね。ザウアーラントくんとオルコットさんが織斑くんを推薦したからです」

「は？」

（ちょっと待て、推薦？）

……。

「どういうことだよ、ベルクト！」

「どうもこうも推薦しただけだ」

「いやいや！なんで俺を推薦したか、ちゃんと説明してくれよ！ていうか勝ったやつが代表だろ！？」

俺にとっては一大事な要件で慌てているのに、その元凶はどこ吹く風といった様相で言葉を返してくる。

「一夏、まず思い出せ」

「何を？」

「決着をつけるとはいったが、勝ったやつが代表だとは言っていない」

「……あー。いや、けどあの流れ的にそういう意味だろ！？」

「知らん」

いや、知らん、てそんなガキみたいな……。

「他の理由も簡潔に挙げると……」

「なんだよ」

「…一夏、お前が弱いからだ」

「…ぐ、そのとおりだけど……」

ズバッと言ってくれるな。こんちくしょう。

「だから、お前に経験を積ませる意味でお前を代表に推薦した」

言ってることは分からんでもないが、なにか腑に落ちない。

（このままじゃ、俺がクラス代表に……どうすれば……そうだ！）

「お前、それは辞退だろ」
そうだ。千冬姉も辞退は許さないと言った。いくらベルクトでも千冬姉には逆らえないはず。

「いや、違う」
「はぁ？」

「推薦された俺が推薦することで、俺と俺を支持した人間の票が一夏に加わった。だから支持票が現在最も多いのは一夏、お前だ」
「いや、それおかしいだろ……ベルクトを推したってことは俺を支持してなかった人だろ？それが俺を支持って…納得いかないだろ？」
「推薦された俺が推薦するのだからいいだろう。それに俺を支持する人間など最早いないだろう。だから問題ない」
「あ」

アレか……。態々話さないだろうから、クラスのみんなは怖がっているんだろうな。朝からベルクトがいる所、空気が重かったもんな。

「だから、セシリアと話し合って、一夏を推すことにした。つまりお前に退路はない」

「……はぁ、さいですか」

「一夏、覚えておけ」

「なんだよ……」
もう、なんか疲れた。朝なのに。

「敗者に権利などない」

――――回想終了。

俺がこうなった元凶は穴の上から俺を見下ろしている。正直ちょっとは心配してくれてもいいと思うんだ。

嘆いていたら、授業終了のチャイムが鳴った。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

え、これを埋めろと？土どこにあるんだよ。

「はぁ、ベルク――――って誰もいねぇ！」

手伝ってもらおうと、とりあえず穴から這い登って声をかけようとしたら、グラウンドには誰もいなかった。……俺、みんなに嫌われてるのかな。

と思ったら、夕食後の自由時間。寮食堂にて、俺は多くの女生徒に囲まれていた。

「「「織斑くん、クラス代表就任おめでとうーーーー！」」」

――――パパパァン

「「「おめでと～！」」」

うん、みんなが俺のためにこんなことをしてくれるってことは、俺は嫌われてないよな。よかった。よかった。

でも、なんか押し付けられた感じでなった代表だから、正直このパーティは居心地が悪い。

「どうしたの？」

「いや、何でこのタイミングなのかなー？って思ってさ。決まってからそこそこ日が経ってんじゃん？」

俺の態度を怪訝に思った一人の女子（谷本さんだっけ）が声を掛けてくるが正直に言うわけにもいかず、ふと疑問に思ったことを言った。

「あー、それね。実は――――」

――――パシャ

「はいはーい、新聞部でーす。話題の男性操縦者にインタビューしにきましたー」

なんか、また人が増えた。既にクラスのことなのに、クラス人数を超えている状態だから今更だけど。

「あ、紹介が遅れましたー。私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってまーす」

新聞部？てことはあれか？これが全校に発信されるのか。

「ささ、新聞に載せる写真を撮るから、セシリアちゃんと……あれ？ベルクトくんは？」

「あ、ベルクトなら用事があるからって、食事が終わったらすぐにどっかに行きましたよ」

そう、ベルクトは特訓後、食事をするまでは一緒なんだが、食事後は「用事がある」と言って決まってどっかに行ってしまう。コーチを頼んだ初日からずっとだ。聞くのもどうかと思って聞いてなかったが、流石に一週間以上も続いていると気になってくる。

（ま、明日にでも聞くか……）

「そっかー、残念。じゃあ、二人で撮るからそこに並んでー」

（とりあえず、これを乗り切ろう）

結局、写真はクラスの集合写真になった。

「あれ？そういや理由は？」

「え？色々と許可を取るのに時間がかかっただけだよー」

（なんだそりゃ……）

「ふふん、遂にきたわ、ＩＳ学園……」
同時刻。ＩＳ学園の正面ゲート前に、一人のボストンバック少女が降臨した。

――――翌日。

「もうすぐクラス対抗戦だね」

庵璃と別れ、一夏、箒、セシリアと共にクラスに入り、それぞれの席に荷物を置いた後、一夏の席に集まっていると一人の女生徒が話しかけてきた。無論、話しかけられたのは俺ではなく一夏だ。

「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いてる？」
「ああ、なんとかって転校生に変わったのよね」
「転校生？今の時期に？」

確かにまだ四月も終わっていないこの時期に転校生など珍しい。しかも、この学園に転校生など、どう考えても特別な人間だ。ここはただの学校ではないのだから。

「うん。中国から来た子だって」
「へー。どんなやつだろ？強いのかな？」

「今のところ。専用機を持ってるのって一組と四組だけだから、余裕だよ」

（四組にもいたのか…後で庵璃に聞くとしよう）

「――――その情報古いよ」

「「「え？」」」

会話に割り込んできた声の主がいるであろう入口に視線を向けると、肩が露出した制服を着た女生徒がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

（なんだ、この生意気な小娘は……）

「鈴……？お前、鈴か？」

（一夏の知り合いか……？また幼馴染か？）

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

そう言い、勢い込んでこちらに指を指す。それに反応してか、クラスがにわかに騒がしくなるが、

「鈴……何格好つけてるんだ？すっげー似合わないぞ」
「んなっ……！なんてこと言うのよ、アンタは！」

続く、一夏の言葉で一気に毒気が抜かれた。
（一夏といると、なぜか知らんが気が抜けるな……あぁもう終わりだな）

――――ガン！

「いったぁ……何すんの！…うわ」
「もうＳＨＲの時間だぞ」

拳骨と共に千冬登場。

「ち、千冬さん……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。邪魔だ」
「す、すいません……」

やはり、千冬が来ると速攻で片が付いた。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

件の転校生はフンと鼻を鳴らして帰っていった。
（元気な奴だな……千冬も知ってるようだし大丈夫か）

「あいつが代表候補生……」

――――パァン！

「さっさと座れ、この馬鹿が」

（今日も一日が始まるな）
一夏が叩かれるのを見て、ベルクトは一日の始まりを感じた。

――――昼休み。

「びっくりしたぜ。お前が二組の転校生だとはな。連絡くれりゃ良かったのに」

「そんなことしたら劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」

「なぁ、お前ってまだ千冬姉のこと苦手なのか？」

「そ、そんなことないわよ。ちょっと、その……得意じゃないだけよ」

現在、俺はいつものメンバーと、一夏と凰鈴音の関係が気になる＋αで食堂に来ている。はっきり言って、大人数すぎて邪魔だ。

「ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

「ねぇ、ベルクト。どういう状況なの、これ？」

「俺にも分からん。一夏の説明待ちだ」

横にいる庵璃が尋ねてくるが、俺も知らないので答えられない。ここに来るまでに、箒が「アイツは誰だ！」と詰め寄っていたから一夏以外は千冬くらいしか彼女を知らないだろう。
二人が空いている席に座り、他のメンバーは周辺の席を陣取る。構図としては一夏と鈴のテーブルを間に挟み、奥にベルクト、庵璃、セシリアと箒、手前に他のメンバーだ。

「で、いつ代表候補生になったんだよ？」
「あんたこそ、ニュースで見たとき、びっくりしたじゃない」
「俺だって、まさかこんなとこに入るとは思わなかったからな」
「入試のときにＩＳ動かしちゃったんだって。なんでそんなことになっちゃたのよ？」
「なんでって言われてもなー。高校の受験会場市立の多目的ホールだったんだよ。そしたら迷っちまってさ。係員に聞いてもよく分からないし。あちこち動き回ってたら、ＩＳが置いてある部屋に入っちまったんだよ。それで、物珍しさで触れてみたら、反応しちまったんだ。
で、その後色々あって、この学園に入れられたってわけだ」
「ふーん。変な話ね」

（……一夏、もう何も言うまい）

「大丈夫、ベルクト？」
「大丈夫だ」
「そうですか？ご気分が優れないようなら無理は禁物でしてよ」

……何故か、最近セシリアがやけに俺にかまってくる。ギスギスした態度よりはマシだが、どうにも解せない。

思えば、あの後セシリアに謝りに行ったときからそうだった。何故か俺の顔を見て嬉しそうになったし、俺が謝ると困ったような笑顔で「わたくしの為にしてくださったのですからお気になさらず。わたくしの至らない所が分かりましたし、お礼を言いたいくらいです。ありがとうございますわ」と言い、フルネームで呼ぶと「どうか、セシリアと呼んでくださいまし」と、こっちが困惑させられた。

それに、放課後の特訓にも参加してくる。俺も学べることがあるので、ありがたいのだが、やはり――――

（謎だ）

「ど、どうかなさいまして？」

「いや、少し考えごとをな。で、あの凰鈴音はどういうやつなんだ？」

「……なにやら、一夏さん曰く、セカンド幼馴染だそうで今特訓のコーチを申し出ているようですわ」

考えていて、ジーとセシリアを見ていたようだ。誤魔化しついでに、聞いてなかった内容をセシリアに尋ねたのだが、心なしか表情が硬いのは何故だろう？横の庵璃もだが。箒は一夏と鈴の所に行っていた。

――キーンコーンカーンコーン――

ほとんど食べていないのだが、チャイムが鳴ってしまった。勿体ない気がするが、千冬の叱りは受けたくはない。背に腹は代えられないので、二人に声をかけて退散するとしよう。

「行くぞ。怒られるのはごめんだ」

「うん」

「そうですわね」

（にしても、本当に幼馴染だったとは……まだ出てくるんじゃないだろうな）

――――放課後。第三アリーナ。

今日も今日とて、いつもの面子でＩＳの特訓をしている。今日は打鉄とラファール・リヴァイヴを借りてきているので、それを使っての実践的な特訓だ。

俺は白式を展開した状態で、打鉄に乗っている箒に剣を教えてもらい、ベルクトとセシリアはラファールに乗っている流堂さんを見ている。

なんでもセシリアが言うには、生身での訓練もいいが、今はＩＳを少しでも多く動かして早くＩＳと馴染むほうがいいらしい。それでも操縦は人間の動作の延長線上だから、箒の稽古も武器がブレード一本の俺には必要になるそうで、稽古も続けている。なんでもベルクトとセシリアは接近戦を教えられないらしい。

正直ベルクトは「いや、できてただろ！」とも思ったが、よくよく考えたら「ベルクトが使ってたのって剣じゃねぇよな」と気づき、「剣なら確かに箒だな」という結論に至った。というわけで、剣道全国一位の実力を持つ箒に任されている。

ちなみに訓練機の使用許可を取るには結構手間がかかるのでＩＳを展開する日、展開しない日と分けている。展開する日は基本動作、セシリアとの模擬戦、もしくは箒とのＩＳを使った剣の訓練を、展開しない日は生身での剣道稽古を行っている。

なんでベルクトが入ってないのか？俺も疑問に思って

「なんでベルクトは教えてくれないんだ？」

って聞いてみたら、

「少しは自分で考えろ」

って返された。その言い方だと、まるで俺が何も考えてないみたいじゃないか。

まぁ、そんなわけで、ベルクトは基本的にずっと流堂さんのことを見ている。これって、俺のコーチじゃないよな。いいなぁー、流堂さん。

「うおぉ！」

「私との訓練中に他のことを考えるか……いい度胸だな……一夏ぁ！」

考え事をしてたことがバレて、俺は箒の一閃を見事に喰らって吹き飛ばされた。

（つぅ……！）

「おまっ……どんな威力だよ！」

「雑念があるお前が悪い」

シールドが斬撃自体は防いだが、衝撃はモロにきた。いくらＩＳのパワーアシストがあって俺が気を抜いてたとしても、流石に人一人を吹き飛ばす威力はおかしいと思うぞ。

「時間だな。終わるとしよう」

「おーう」

なんか俺が吹き飛ばされるのを見計らってたみたいなタイミングで終了を告げたな、ベルクト。
（まぁ、ちょうどいい時間か。打鉄とラファールを返さないといけないし……あ）

「そういや、ベルクト」
「なんだ」
「お前ってさ、いつもこの後一体何やってるんだ？」

後片付けをしている最中に近くまで来ていたベルクトに質問をぶつける。言いたくないなら無理に言わなくていいけど、と続けようとしたら――――

「ブラッドアークの修理だ」
「言いたくないなら――――え？修理？」

あまりにもあっさりと帰ってきたものだから、間抜けな返しをしてしまった。

「一夏が胸部から腹部にかけての装甲を切り裂いただろ。それの修理だ」
「え、ベルクトがやってんの？」
「ああ、色々とあってな」
「へぇーー」

（すげぇよ。ベルクト……）

「そういうことだから、俺は先に失礼する」

感心している俺とは違い、ささっと作業を終わらしたベルクトは

そう言って、先にアリーナを後にした。

「来たか」
「すまない。待たせたか？」
「いや、さほど待ってはいない」

――――ＩＳ学園第六整備室。
普段はあまり使われないこの整備室に、今は織斑千冬とベルクト・ザウアーラントの二人がいる。

「どうだ、あの愚弟の様子は？」
「そうだな……だいぶいい。教えたことを理解しようと努力し、少しずつだが身に付けている。今はまだ知識と経験が少ないからあれだが、後々それが付いてきたら化けるかもしれんな」
「フッ、随分と高評価だな」
「事実とそれに基づく客観的な意見を述べただけだ」

やれやれ、可愛げのないやつめ。

「まぁ、順調なようで良かったよ。さて、やるか」
「ああ。早くやってしまおう。もう今日で全部終わるだろう」
「そうだな」

そう言って、ベルクトは早速ブラッドアークを展開、投影パネルとディスプレイでタイピングを開始する。

（思い返せば面倒くさいことをしてくれた者だな、あの愚弟は。しかし、まさか私と同じ唯一仕様を発現させるとは……）

代替パーツを整備科に発注し、それを大まかに整形し直す。そして、それを破損箇所と交換し、今度は細かに整形し直す。言葉に直すとこれだけだが、知識が乏しいベルクトが作業すると難易度が高い。

そう、発注以降の作業は全てベルクトが行った。偽装作業の時と同じく、千冬が手伝ったが一夏の特訓が入ったために時間が減った。おかげでこんなに時間がかかってしまった。

今日するのは計器類とのリンク、『偽・絶対防御』の範囲設定反映などのシステム面での最終調整だ。これで修理工程の全てが終わる。

（ふぅ。今年は厄介ごとが多いな）

――――余談だが、発注した際にこのパーツがベルクトの機体に使われることを知った女生徒達のやる気は千冬を引かせた程だった。

「一夏のバカ！ボケ！鈍感！唐変木！朴念仁！」

（……なんだ？）

作業が終わり、夕食をとった後、食堂から戻ってくるときに前方から例の転校生の声が聞こえてきた。ボストンバックを背負って、何やらイラついている。

「あ！あんた！」
「？なんだ？」
「どうして、あんたじゃないのよ！」
「は？」
「そもそもあんたが同室だったらよかったのよ！何やってんのよ、あんた！あんたがそんなんだから、あの子が一夏と同室なのよ！あぁ，もう腹立つ！」
言うだけ言って、こっちの言葉など聞く気がないのかスタスタと行ってしまった。
「だから……一体なんなんだ？」

第１０話　転校生はＳｅｃｏｎｄ　Ｃｈｉｌｄｈｏｏｄ　Ｆｒｉｅｎｄ（後書き

今月、前期末テストと自由課題という名の必出課題があるので今月の投稿確率がかなり低くなりそうです。

第１１話　クラス対抗戦前の……水面下戦争？（前書き）

こんばんっぱー、お久しぶり、初めまして。ロマネスクです。

１か月以上更新できなくてすみません！テストも課題も終わったのでまた執筆再開します！

第１１話　クラス対抗戦前の……水面下戦争？

「はぁーーーー、つっかれたーーーー」

ベルクトが抜けた後、俺達は訓練機を返却した。ちなみに、この返却の際に使用するＩＳ専用カートは人力で、打鉄とラファールを載せたＩＳ専用カートを押すのは楽じゃなかった。既に何度か行っていることだが、経験しても重い物は重い。そんなすぐに慣れる重さでもないし。

「おつかれ、一夏」
「おっ？」

自らを呼ぶ声に対して、疲労感で下がっていた頭を上げると久しぶりに会ったセカンド幼なじみがいた。

「はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」
「おー、サンキュー。気が利くな」

寮部屋に帰ってから水分を摂るつもりだったので俺は飲み物を用意していない。いつもなら問題ないが今日はかなり疲れたので、心優しき幼なじみが差し出してくれたタオルと飲み物を受け取り、活用させてもらうとする。

（でも、クラス対抗戦まで今後もこの調子だと今度から用意するかな……お、流石鈴）

鈴が用意してくれたスポーツドリンクはぬるい。だが、健康を意識する俺にとって、このチョイスは正しい。一時の爽快感のために、

体のダメージを無視することは俺にはできない。

「変わってないねー、一夏」

「そりゃ、いくらなんでも一年程度じゃ変わんねぇって。それに俺は不摂生で自分と自分の家族を泣かせたくない。若い頃からの不摂生はクセになるし、後で痛い目見るんだぞ」

「言い方はいいけど。考え、ジジくさいよ」

「う、うっせーな……」

心を読んでいたかのようなタイミングで話しかけてきた鈴にドギマギとする。にやにやとした表情でこっちを見ている鈴の目は全てを見透かすようで落ち着かない。考えが分かるのはいいことだが、分かりすぎるのもどうかと思う。

（ていうか……なんか、こいつ可愛くなってないか？）

そんな見透かすような視線のせいか、鈴が大人っぽくなった気がして、俺は鈴に『異性』を感じずにはいられなかった。今まで仲の良い『女友達』として接していたのに『異性』を意識し始めると、ぎこちなくなってきてしまう。

「……やっと二人きりだね」

（……なんで、このタイミングでそんなしおらしい態度なんだよ！いつもの元気なお前はどうした！）

「ん、そういやそうだな」

箒達はさっさと帰ってしまって、現在アリーナ更衣室には俺と鈴の二人しかいない。だから、なおさら鈴の態度が気になってしまう。

「一夏さ、やっぱ私がいないと淋しかった？」
「ま、まぁな。あ、遊び相手が減るのは、大なり小なり淋しいな。うん」
「そうじゃなくてさぁー。久しぶりに会った幼なじみなんだから、色々と言うことがあるでしょ」

にこにこと上機嫌で話してくる鈴に一抹の不安を感じ、少しはいつもの調子に戻ったが未だ妙な高揚感がある。

「……あー悪い、鈴。そろそろ体冷えてきたから部屋戻るわ。箒もシャワー使い終わった頃だし……」

「……シャワー？」

「箒って、あのファースト幼なじみとか言ってた子よね？あんた、あの子とどういう関係なの？」
「どうって……幼なじみだよ。ファースト幼なじみ」
「お、幼なじみとシャワーの何の関係があるのよ！」

この場を逃れるためにした発言の一部に鈴が過剰に反応してきた。なんでそんな必死なのか分からん。

「俺、今箒と同じ部屋なんだよ」

「はぁ！？」

「部屋を用意できなかったんだと。だから――」

「そ、それってあの子と寝食を共にしているってこと！？」
「まぁな。でも、箒で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら、緊張して寝不足になっちまうからな」
「……ぃ……」
「ん、どうした？」
「……たら、……ね……」
「え？」
さっきまで上機嫌で話していた相手が、急に俯いてぶつぶつ言うものだから心配になって顔を覗き込もうとしたら――――
「だから！幼なじみだったらいいわけね！？」
「うぉ！」
突如、顔を上げられてもうちょっとで頭突きをくらいそうになった。咄嗟に身を引いてなかった確実に当たってな。これも日頃の訓練の成果だな。
「分かった。分かったわ。ええ、ええ、よく分かりましたとも」
さっきまでのドキドキとした雰囲気など、どこにあったと言わんばかりの変わりようにちょっとした不安が胸に宿ってきた。
「一夏っ！」

「お、おう！」
「幼なじみは二人いるってこと、覚えておきなさいよね！」
「いや、別に言われなくても忘れ……」
「じゃあ、後でね！」
行ってしまった。何故かは知らんが俺に多大な危険が及びそうな気がする。
「う……冷えてきたな。戻ろう」

「というわけだから、部屋変わって」
「ふ、ふざけるな！なぜ、私が！」
夕食も済ませ、就寝前のくつろぎタイムに俺がお茶を入れていると突如、鈴が部屋に襲撃してきた。ボストンバックを担いで。流石、自称「ボストンバッグ一つあれば、どこでも行ける女」。フットワークが軽い。
「いやー、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？」
「べ、別にイヤとは言っていない。それに、これは私と一夏の問題だ」
「大丈夫。私も幼なじみだから。ねぇー？」

「俺に振るなよ……」
（忘れるなってこういうことかよ……）

そう返した後も口論は続いている。この二人相性最悪だ。我が道を行く鈴に、人一倍頑固な箒。鈴は人の話を聞いてないし、箒はそれに対して怒る。そのせいで噛み合わない会話がずっと続いている。言論による平和的解決は無理そうだ。

ていうか、間に俺を置いて口論しないでくれ。せっかく入れたお茶、どうすりゃいんだよ。

「とにかく！部屋は変わらない。自分の部屋に戻れ！」
「……ところでさ、一夏。約束覚えてる？」
「約束？」
「そう、小学校の時に――」

「む、む、む、無視するなっ！！こうなったら……！」

あ、箒のやつ！

頭に血が上った箒は傍に立て掛けておいた竹刀を握りしめ、大上段に構えた。そして、冷静さを欠いたまま、生身の鈴に向けて振り下ろした。

「はぁ！」

――――バシィン！

「っつ！」

「「い、一夏！」」

間一髪、なんとか伸ばした右腕で竹刀を受け止めれた。咄嗟だったから、持ってたお茶は零してしまったし、何も持てなくて腕で受けたので腕が衝撃で痺れているが、最悪の事態は回避されたんだからいい。

「一夏、あんた何してんのよ！」

（いや、助けたんだから何してんだはあんまりじゃないか？鈴よ）

そう思い、鈴を見ると、右腕にＩＳを部分展開していた。あの一瞬で部分展開ができるってことは、鈴が相当な実力者だということが分かった。場違いな状況分析だけど。

「あー、もしかして俺必要なかった…？」

「そうよ！あんたに助けてもらわなくたって、自分でなんとかできたわよ！」

「……そりゃ、どうもすいませんでしたね……」

俺の指針に基づいて行動したから後悔はないが、その物言いに少しへこむ。

「…まぁ、体を張って止めてくれたのは嬉しかったけど」

「ん？」

「……な、何でもないわよ！ただ……」

「どうした？」

「……その……ありがと」

初めのほうは聞こえなかったが、最後のお礼の言葉だけは聞けた。

お礼目的でやったわけじゃないが、感謝されるのはいいな。

（……さてと、問題はこっちか……）

鈴から視線を移すと、さっきまでの勢いが嘘のように消え去り、顔面蒼白になっている箒がいた。竹刀を持つ手にも力が入っておらず、いつも凛とした雰囲気など消え失せ、今にも倒れそうな雰囲気だ。

「箒」

――ビクッ！

名前を呼んだだけだが、呼ばれた当人は打ち捨てられた子犬のように怯えていた。

「自分がしたことは分かってるだろ？」

「……」

――コク

小さく頷くことで意志を示す箒。

――――怒りで自制心を失った。

白式の待機形態であるガントレットに当たったからよかったものの、この威力生身で受けていたら骨折は免れなかった。

幼い頃から剣道を学び、自分の心を律することを学んできているからこそ、箒も自分が放った一撃の重さを分かっているし、自分がしでかしたことに気付いている。だからこそ、彼女はここまで怯え

ている。

「だったら、どうすればいいか分かるだろ」

「……すまなかった。凰、一夏」

腰を折り、深々と頭を下げる箒。謝られた鈴は面食らう。さっきまで言い争いをしていて、一歩も引かなかった相手が自らの過ちを認め、素直に頭を下げることが信じられないといった表情だ。

別に箒は頑固であっても、自らの過失を認めない愚か者ではない。そんな人物であれば、家族ぐるみとはいえ、あの千冬姉が相手にするわけがない。

「いいわよ、別に。実害なかったし……後、あたしのこと……鈴でいいよ」

鈴も鈴で小さいことは気にしない性格なので素直に謝罪を受け取り、素直に非を認めた箒に好意を持ったのか名前で呼ぶことを許可した。

実際はまた違った理由も含まれるが、一夏には知る由もない。

とりあえずはこれで一段落ついたのだが、箒は先の失態を引きずって無言だし、鈴も勢いを削がれ、どうしようかいった感じで……気まずい。

（どうっすかな、この雰囲気……。あ…）

「そういや、鈴。約束がどうとか言ってたな」

「え、あ、うん、約束……そうそう、約束！」

最初は戸惑ったが付き合い長いだけあって、俺の意図に気づいて

くれたのだろう。すぐに俺の言葉に乗っかってきてくれた。鈴にとってもさっき自分から言い出したことだし、気になっていたはずだ。ナイス俺。

「何の話だっけ？」
「え……覚えてないの？」
「いや、約束って言っても結構したから色々あるだろ？だから、どれかなー？って」
「あ、そういうことか。忘れたのかと思ったじゃない。……この年であれをもっかい言うなんて無理！」
「ん？」
「いや、こっちの話、こっちの話！……えっと、その、小学校の時の……」

顔を伏せ、こちらを上目遣いでちらちらと見てくる鈴。心なしか顔も赤い。ふと、更衣室でのことを思い出してしまうが今は必死に払う。

（なんだ？そんなに恥ずかしい内容なのか？小学校……）

記憶を辿り、小学校の時の記憶を漁る。そこまで辿った段階で、今の鈴の態度が引っかかった。

「あ」
「思い出した！？」
「あれか、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」
「そ、そう、それ！」
「奢ってくれるってやつか？」

「は？」

「……はいい？」

あれ？間違えた？なんか箒まで驚いてるし…。俺なんか変なこと言ったか？

「え、いや、だから、俺に毎日メシをご馳走してくれるって約束だろ？」

「……」

怖い。限界まで膨張した風船が割れる前というか、花火に火の点いた導火線が吸い込まれ爆発する前の一瞬の間というかなんというか。そんな張りつめた空気が鈴から滲み出てきている。

「あの～、り――」

――――パァン！

「……え？」

一瞬何が起こったのか分からない。けど、ひりつく左頬、右手を振りぬいた鈴。それらを知ることで自分が鈴にぶたれたのだと分かった。

しかも、鈴の目には涙が滲み、泣くのを堪えるために唇をきつく引き結んでいた。今にも泣きだしそうな表情でこっちを睨みつけている。

「最っっっ低！」

「え、あの、鈴……」

「女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

「いや、あの、約束はあってたんだろ？」

まずい。理由は分からんが女の子を泣かせるのはまずい。それに鈴は怒らせるとこじれることが多いので厄介だ。ていうか、女性は全般的に怒らせると厄介だ。女は男の三倍感情が長持ちするっていうし。

「約束の意味が違うのよ！意味が！」

「だったら説明してくれよ！どんな意味だったんだよ」

「せ、説明って、そんなことできるわけないでしょうが……」

「いや、それじゃ分かんねぇって」

「うー」

いや、唸られても。てか、意味が分からないじゃ、本当に何もできやしない。

「じゃあ、こうしましょう。来週のクラス対抗戦。そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられる。どう？」

「いいぜ。じゃあ、俺が勝ったら説明してもらうからな」

「い、いや、説明はその……」

泣き出しそうな表情ではなくなったが、今度は鈴のやつ急に赤くなりだして、固まりだした。そんなに内容が恥ずかしいのか？

「いやなら、やめたらどうだ？」

「はぁ？誰がやめるのよ！あんたこそ、私に謝る練習でもしておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ！馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

――イラ。

親切心で言ってやったのになんだよ、この扱い。てか、俺なんで俺ここまで言われてんだ？

「うるさい、貧乳」

あ、やばい。

――――バシィン！

今度は右頬。利き手じゃないはずなのに、さっきより強い。

「…フ、フフ」

「あ、いや、鈴…」

「……言ったわね……言ってはならないことを言ったわね……」

虚ろな目で、地の底から響くような声。さっきとは格が違う怒り。

鈴が一番気にしていることを言ってしまったのだから当然、俺が悪いのだが怖すぎる！

「悪い！い、今のは俺が悪かった！すまん、鈴！」
「今の『は』ぁ！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪い！！」
「いや、ほんとすまん！」
「許さない…手加減してあげようかと思ったけど、そんなに死にたいならお望み通り――全力で叩きのめしてあげる」

人を射殺せそうな鋭い視線を俺に向け、鈴はボストンバックをひっ掴み部屋を出る。

「覚悟しておきなさい」

――――バタン

扉を閉める寸前、不吉な捨て台詞を吐き、セカンド幼馴染は帰っていった。やばいなぁ。さきのは確実に俺が悪い。どうやって許してもらおうか。つか両方とも頬が痛い。あ、なんかシャレっぽい。

「一夏……」
「ん、箒？」

会話に入ってこず、終始おとなしかった箒が話しかけてきた。やはり、まだ引きずっているのか、そこにいつもの凛とした佇まいはない。

「箒、そんな暗くなるなよ。ちゃんと自分がしたことわかってるんだろ？鈴も許してくれたんだし、俺も気にしてないって。だから、早くいつもの箒に戻ってくれよ。そうしてくれないと俺の気が滅入

っちまう」

「…分かった。だが、少し待ってくれ。流石にすぐは無理だ」

「そりゃ、そうだな」

とりあえずは落ち着いてきたみたいだ。寝て、明日になれば戻ってくれるといいんだが。

「あ。なぁ、箒？」

「なんだ？」

「鈴のやつが言ってた約束の意味、箒なら分かるか？」

「……お前というやつは」

あれ？なんか箒さんの雰囲気が変わりましたよ。具体的に言うと、ちょっと持ち直した時にまた問題が投げかかってきたみたいな、なんでそんなこと聞いてくるんだって感じか？あれ、具体的かこれ？

「一夏」

「おう」

「馬に蹴られて死ね……」

（えーーー）

もの凄いテンション低めで言われたけど、これ低いほうが辛いな。なんか真剣味がある。

「以上です」

今、俺は正座している。何故かって？それは――――

あれから少しして、ベルクトが部屋に来た。

「一夏」

「お、どうした、ベルク――がっ」

急に鳩尾に衝撃がきて、俺は数歩後ずさる。

「とりあえず、一発殴らせろ」

「いや…既に…殴ってる、だろ」

「さっき、あの転校生と遭遇したんだが…」

「無視かよ…って、転校生って」

「何故か一夏を散々罵倒していて、俺を見るなり、『どうして、あんたじゃないのよ！そもそもあんたが同室だったらよかったのよ！何やってんのよ、あんた！あんたがそんなんだから、あの子が一夏と同室なのよ！あぁ，もう腹立つ！』と俺に言ってさっさと行ってしまった」

「鈴のやつ、ベルクトにあたるなよ。てか、もしかしてこれ、その仕返しか？」

「俺にはやつの言っていることが分からん。だから、何があったのか説明してもらおう。俺が一夏達と別れてから全部だ」

「うわ、面倒だな」

「箒、貴様もだ」

「いや、箒はいいだろ」

正直、箒はもう勘弁してやってほしい。まだ暗いままで元気がない。そう思って、ベルクトに進言するが――――

「一夏の説明だけでは心許ない」

俺の説明にあまり期待していないというような返事が返ってきた。

「てか、ベルクト怒ってないか？」

「正座して話せ」

こう言った流れで俺と箒は正座してベルクトにありのままを話した。だって、省略しようとすると何故かバレ、その度にベルクトの威圧感が増すものだから怖い、怖い。

「……」

何故だろう。今のこの瞬間が判決を待つ被告人の気分だ。てことは、ベルクトは裁判官か。

「結局、一夏が悪いであっているか？箒？」

「ああ、そうだな。それで問題ない」

最終的な判断、証人に任せましたよ、この裁判官！

「なるほど。だいたいの流れは分かったから、俺はもう戻るとする。ただし、一夏」

「え？」

「右腕。ちゃんと手当しておけ。いくら当たったのがＩＳの部分だ

と言っても、待機形態のＩＳにはほとんど防御機能などない。骨折を免れただけで、受けたダメージは大きいからな」
「い、一夏。早く手当を！」
「あ、おい、箒」

ガバっと俺に襲い掛かるかのような勢いで箒は俺に詰め寄り、腕の具合を診てくる。今更心配かよ！とも思うが、それほどまでに箒のやつ余裕がなかったんだな。でも――――
「箒！服を脱がせようとするな！半袖だから右腕露出してるんだ。脱がす必要性ないだろ！！

これはどういった了見なんだろう。つうか、ベルクトのやつ、もう部屋の外にいるし！

「一夏……明日からの特訓楽しみにしていろ」

――――バタン

何やら背筋が寒くなる捨て台詞を吐き、ベルクトは扉を閉めた。これって、鈴と一緒？

「ベルクトーーーー！お前もかーーーー！」

俺は、どこぞの古代ローマの独裁者の如く叫んだ。

「一夏！そんなことより早く手当を！」

「だから、服を脱がそうとするな！ていうか、俺から一旦離れろ！」

――――翌日

「……これってひどいよね？」

いつも通り何事もなく授業を受け、いつもと同じようにベルクト達と合流して、第三アリーナで特訓をする……はずだったんだけど。何故か今、織斑君対その他全員という構図で模擬戦闘を行っています。全員ということで、もちろん私と箒さんも含まれています。それに……ベルクトも。

織斑君の対抗戦のための実践的な訓練と、ブラッドアークの修理が終わったからその確認を兼ねた模擬戦闘ってみんなには言ってましたが、実は違います。だって、ベルクトに聞きましたから。あまりにも戦力バランスがおかしいので、「これって、ほんとに訓練と確認のためだけ？」って聞いたら、

「あの転校生と一夏に痛い目見てほしくてな。これで一夏を鍛えながら、その成果で凰鈴音を一夏に倒してもらおうという意図だ」

と絶対、織斑君に痛い目を見せる理由が過半数を占めている理由を言ってくれました。昨日、部屋に戻ってから若干様子が変でしたので、たぶん戻ってくるまでに何かあったんだと思います。

「ちょっと待て！これ、無理！絶対、無理！」

織斑君が抗議してますが、その気持ちは痛いほどわかります。だって、これ……近接ブレード一本しかない織斑君に対して、セシリアさんのＢＴとライフルによる射撃、ベルクトの砲撃を行っていま

すから。
　セシリアさんのＢＴで翻弄し、ライフルで狙い撃つ。それを避けてもベルクトの射撃による牽制、止めの一撃級である二種類の砲撃が待っています。もう雨とか言うレベルじゃないです。これは滝です。それで、織斑君がそこからなんとか抜け出そうとして接近しようとするとすぐさま距離を取るか、ベルクトが遠くに蹴り飛ばすんです。だから織斑君、二人には一切接近戦をさせてもらえません。
　それに、この二人凄いのが、一切誤射がないんです。箒さんは打鉄なので接近戦。そのため織斑君と肉薄するのですが、二人とも見事に箒さんを避けて、織斑君にだけ射撃を当てます。
　私に向かって来たときは、見事にセシリアさんが牽制して、ベルクトが蹴り飛ばすか砲撃で吹き飛ばしています。おかげで私と箒さんのシールドエネルギー、ほとんど減ってません。大事にしてもらってるのかなと思えて、ちょっとだけ嬉しいです。
　でも、それはこの二人のコンビネーションあってのことだと思えるのでそこにはちょっと嫉妬です。私も上達して、ベルクトとコンビネーション戦術をしたいです。

「私も頑張ろう！」

「って、流堂さんまで本格的に撃ってきた！？いや、ほんとこれ、死ぬって！ベルクト！一旦止めよう！じゃないと白式が、俺が持たない！」

「安心しろ、一夏。壊さない程度にやる」

「ちっとも安心できねぇーーーーーーー！！つうか、それどっち！

?白式!?俺!?」

「……」

「無言で砲撃するなーーーー!」

第１１話　クラス対抗戦前の……水面下戦争？（後書き）

もう少し、あと少しでフラグが建てられる……！

第１２話　クラス対抗戦（前書き）

長い間更新できず、申し訳ありませんでした。

本日、避難勧告によりバイト先が緊急閉店しまして早く帰って来れたので、一気に書き上げました。

第１２話　クラス対抗戦

「例の子、どうなってる？」

「はい。特に目立った動きはありません。しいて言うなら、放課後に織斑一夏の特訓に付き合っている程度です」

「教室では軽く女生徒に引かれてましたー」

「そう……」

僅かな光源により薄暗く照らされている一室。そこに集まっているのは三人の女性。

「どうしますか？一部からは強い意見が多々出てきていますが……」

「でも、接触するとしても時期的に多少厳しいと思いますよー」

報告と意見をしてくる二人の女性。それを聞く“長”たる女性は、顎に手を当てわずかに思案する。しかし、それもほんの僅かで一呼吸おいた後にはもう結論を出していた。

「確かに意見は無視できないけど、今はクラス対抗戦間近。今、動くのは最適でないわ。このクラス対抗戦後に様子を見て接触しましょう」

「わかりました」

「了解……」

「というわけで、待っててね」

バッと彼女が広げた扇子。そこには達筆な『虎視眈眈』があった。

「ベルクト・ザウアーラントくん♪」

――――クラス対抗戦当日

遂に来たこの日が。

あの地獄の特訓は、翌日偶然見に来た千冬姉により止められた。ほんとに助かった。もし、千冬姉が来なかったら一日目のアレが繰り返されるところだった。

アレとは、白式のエネルギー残量がなくなるまで射撃、砲撃の雨、いや滝の敢行。エネルギーが切れたら、エネルギーを補給させて、また再開。以上の一連の流れだ。

コレ……厄介なのが周りの人間も成長している点だ。成長しているのは良いことだと思うけど、今回ばかりは遠慮して欲しかった。だって、セシリアとベルクトは指導する側だからある程度の加減はしてくれているけど、箒と流堂さんは俺と同じで教えられる側だから全力でかかってくる。

二人とも最初のほうこそ、おどおどしたり、困惑したりで大丈夫だったんだけど、中盤から二人とも迷いが消えたのか本格参戦してきた。それで、終盤は流堂さんも射撃が徐々に上手くなってきて、滝が更に激しさを増してきたし、箒もその間を縫って一撃を入れてくるようになったので俺は逃げるか凌ぐかで、反撃なんて何もできなかったからな。理由は諸々とあるが、一番はやっぱり疲労による集中力が切れ始めたことだ。

だって、休憩はエネルギー補給している間だけで、その上、こっちは一人に対して向こうは四人。向こうは攻撃の際も休めるだろうが、こっちはそんなことしたら一瞬で飲み込まれる。だから、一瞬たりとも気が抜けなかった。

そんなもんだから終わったころには肉体的にも精神的にもきつく、俺はみっともなくも気絶した。で、目が覚めたら寮の自室で箒に看病されていた。箒によるとベルクトが担いできてくれたそうだ。

まぁ、とりあえず千冬姉が来て、ベルクトに何やら言ってこの特訓という名の集団暴行は終わった。

でも、終わったのは“集団”でその次には“単独”が待っていた。一対一で対戦し、俺は固定で相手が変わっていく。さっきよりはマシなんだけど、今度はベルクトもセシリアも本気でくるから結局気が抜けないことには変わりなかった。

そういえば千冬姉になんか言われた後のベルクト、……なんだかなぁ。ものすっごい落胆している印象を受けたんだよな。

「一夏！！何をぼさっとしている！！」

「うぉっ！」

いかん。回想していたら、気が抜けていたみたいだ。箒に怒鳴られてしまった。まぁ、確かにそんな状況じゃないよな。俺がいるのは第二アリーナ・ピット。今から試合なんだから。

「すまん。ちょっと今日までの日々を思い返してて……」
「あ、ああ。……まぁ、仕方あるまい。あれはもう特訓と言えるレベルではなかったからな…だが、もう試合前だ。気を引き締めろ」

箒も思い出して、少し同情してくれたのか小声で労わってくれる。すぐ近くにベルクト達もいるからな。
ちなみにＩＳを展開しているからこの程度の距離なら別に近づかなくても聞き取れる。
にしてもさっきの声音、なんか優しい感じだったな。箒が俺にこんな態度取るのって珍しい。原因の一端だからか？ま、なんにせよ、気を引き締めないとな。

「ああ、分かってる。ありがとな」
「……う、うむ。頑張ってこい」

さてと、鬼教官さんにも一言もらいましょうかね。

「ベルクト」
「なんだ一夏」

いや、なんだってお前。

「お前なぁ。はぁ……、今から戦いに向かう者に何か言葉をかけても罰は当たらないぞ？」
「……フン。試合だろう？いつも通りにやれ」
「お前、なんか馬鹿にしたろ？」

「別に。頑張って、フリーパスでも獲ってこい」

そういや、このクラス対抗戦の一位クラスには優勝賞品として、学食デザート半年フリーパスが配られるそうだ。学食のレベルが高いＩＳ学園のデザートだから、そちらもさぞレベルが高いだろうな。それに甘い物。女子が燃えるわけだ。

「ベルクトって甘い物、好きなのか？って、お前要するに優勝しろってことか！？」

「そうだ。やるからには全力なんだろう？」

「一夏さん。確かに厳しいですが、別に不可能ではありませんわ。代表候補生も確かにいますが、ちゃんと作戦を練って立ち向かえば勝機はあります」

ベルクトの無茶振りにセシリアはそれが無茶ではないと説明する。言葉数が多すぎるのもどうかと思うが、ベルクト。言葉数が少ないのもどうかと思うぞ。

「まぁ、頑張ってきてくださいね」

「一夏、俺が望むのは凰鈴音の敗北だ。それ以外は認めん」

「お前……どんだけあいつにイラついてんだよ……」

ベルクトって結構根に持つタイプか？

「一夏」

「ん？」

「……行ってこい」

……。

「ああ！」

（最初から素直にそう言えっての）

さぁて、そろそろ行きますか！

カタパルトに移動し、射出システムとリンク。……準備完了。

「じゃ、行きますか！」

俺と白式はステージへと飛翔する。

「来たわね」

「そりゃな。男に二言はない」

つうか、来なかったら欠席じゃねぇか。そんなことしたら、後で千冬姉に殺される。

俺の対戦相手はまさかの鈴。第一試合で当たるとはな。運がいいのか悪いのか。

『それでは両者、規定の位置に移動してください』

「今謝るなら、少し痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「そんなのいらねぇよ。全力で来い」

どうせ、雀の涙くらいだろうが。それに俺は真剣勝負で手を抜かれるのは勿論、抜くのも大嫌いだ。全力でやらなければ意味など生まれない。

「一応言っておくけど、『絶対防御』も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、殺さない程度に甚振ることは可能なの」

確かにそれは可能だ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、操縦者に直接ダメージを貫通させることができる。実際、公式戦記録上に死者はないが、操縦者が怪我をした事例は少なくない。

それに、噂ではＩＳ操縦者に直接ダメージを与えるため“だけ”の装備があるそうだ。もちろん競技規定違反である上に、人命に危険が及ぶから開発は禁止されているが。

だが、鈴は代表候補生。その程度の技量は持っているだろう。つまり、鈴の言っていることは本当だ。

さっきの言葉。鈴からしたら、親切心で言っている脅しなのだろう。実際それを理解していない人間はこのＩＳ学園にもいるから確かに親切とも言えるかもしれない。

だが、俺は違う。

「分かってる」

そう分かってるさ。あの時、ベルクトが話した内容。ベルクトから滲みでている空気。そして、今日までの特訓。あの恐怖、本能で理解した。

だから、その程度の脅しじゃ俺は揺るがない。

『それでは両者、試合を開始してください』

（だから、鈴。その余裕、ぜってぇ崩してやるからな！！）

（始まったか……）

一夏の見送り後、俺たちは庵璃が待つモニタールームへと移動した。前の試合と違って、流石にクラス対抗戦では他クラスの者をピットに入れるのはまずかったので、庵璃には先にモニタールームで待ってもらった。正直、管制室である場所に一般生徒を入れるのはどうかと思ったが、千冬に「お前が普段つるんでいる連中くらいなら構わん」と言われたので気にするのはやめにして、今回も庵璃を連れてくることにした。

（連れてくる、か……ふっ、変わったな……）

「ん？どうしたの、ベルクト？」

「いや、なんでもない」

「そう？」

知らず、庵璃のことを見ていたようだ。今は庵璃を見るのではなく、一夏を見るべきだったな。代表候補生の力も。

（ん？ああ……）

「そういえば、庵璃。４組のクラス代表はどんな様子だった？」

「なんでもなくないじゃない……。別に普通だったかな。普段とあんまり変わらなかったと思う」

「そうか」

（それは余裕か、それともやる気がないだけか……さて、どの程度の実力なのか。日本の代表候補生は）

この大会の前に国家代表候補生である凰鈴音と更識簪、この両名については少し調べてある。

正直、この世界の機器にはまだ慣れていないのでハッキングなどの手段は使えなかったが、ある程度の情報は集めることができた。国家代表候補生ともなると、プロパガンダ的な意味合いである程度メディアに露出しているからだ。流石に機体に関する情報は皆無に等しかったが。それでも、まだ情報は得られた。凰鈴音は。

もう一人の、“更識簪”に関する情報は皆無と言ってよかった。何か特殊な経歴なのか、あまり目立たない人物なのか。ともかく、情報がほぼ得られなかった。

仕方がないので同じクラスである庵璃に聞くことにしたが、その時庵璃に多少黒い感情が見えた気がする。まぁ、何事もなく教えてもらえたが。

その情報によると、内気、消極的、生徒会長の妹、などあまり戦闘に関するものはこちらもなかった。

だが、一点だけ気になることがあった。

――――曰く、「専用機を持っていない」と。

今まで授業でも打鉄やラファールなど、訓練機しか乗っていない

らしい。当然、何故専用機を使わないのか知りたい生徒がいるが、誰も近寄せない雰囲気を醸し出しているのでみんな躊躇して聞けないでいるそうだ。だから、クラスでは浮いた存在になりかけているらしい。

『専用機持ち』であるはずなのに、『専用機を持っていない』。この矛盾がどういう意味を持つのか、考えられるのは多々あるが庵璃に「憶測で彼女を見ないで」と言われているのであまり考えを煮詰めていない。なんでも庵璃が更識簪と一番、というよりほぼ唯一会話をするそうだ。

だから庵璃に聞こうとしたら、

「私も理由は知らない。でもね、ベルクト。例え知っててても、話さないよ。これは私が話していいことじゃない。本人と直接話して、それで教えてもらわないと駄目」

釘を刺された。それは普段と同じ穏やかな口調だったが、けれど譲らないという意志を感じさせる凛とした声音だった。

唯一会話する庵璃がそう言うのだから、おそらく庵璃は察しているのかもしれない。他人の領域など知ったことではないが現状そこまで危機的状況でもないので、その情報は急ぐ理由はない。

それに庵璃が言っていることでもあるから俺はそれ以上は聞かなかった。

（後々、直に接触するか……。やはり、変わっているな……）

「ベルクト……。簪さんのことは後にして、今はちゃんと織斑君の試合を見ようよ」

「そうだな」

（思考が逸れていたな。今は一夏と凰鈴音だ）

他の思考を排除し、投影モニターに表示された試合に目をやる。

モニターの中では、一夏が凰鈴音と近接戦闘をしている所だ。一夏の≪雪片弐型≫に対し、凰鈴音は刃の部分が異常に大きい二刀の片手剣。見た目からしてかなり重量級の武器だが、凰鈴音はそれをバトンのようにくるくると回すほど自在に操っている。唯でさえ重量による威力が高いだろうに、それによって発生した遠心力も加わるから、さらに威力は上がる。受け止めるのはあまり推奨できない。まぁ、受け止めるのも回転しているので難しいから避けた方がいい。

凰鈴音が袈裟切りをし、一夏はそれを躱す。だが凰鈴音はその勢いにのって体全体を回転させ、今度は反対の刃で叩きつけるように斬りつける。

今度は躱せず、一夏は雪片弐型で受け止めるが如何せん威力が高いので押されてしまう。少しの間そのままだったが両者一旦離れ、今度は一夏が突撃する。≪雪片弐型≫を振り上げ飛びかかるが、凰鈴音はそれをのらりくらりと躱し、お返しとばかりに一夏の胴に刃を振るう。

一夏はそれを、先の攻撃にスラスターを吹かすことにより得た勢いを加え、前転の要領で辛くも回避。

その間に凰鈴音は体勢を整え、再び一夏に襲い掛かる。一夏も今度は無理な体勢ではないから順調に避けて、反撃しようとするができない。

上段から振り下ろされた斬撃、それを避ければ先の勢いに乗せてきた蹴り、さらにそれを避ければ今度は逆の刃が襲ってくる。回転運動により勢いを殺さず連撃しているので攻撃の繋ぎが恐ろしく短い。怒涛の乱舞だ。

一夏が躱すので精一杯だが、おそらく俺がやっても同じことだろ

う。ただし、俺の場合は射撃武器があるからまだ抜け出せる余地はある。

『へぇ～、やるじゃない、一夏。正直予想外よ』

ちなみに試合では対戦者同士の会話は開放回線（オープン・チャネル）になっている。そのため、この会話は試合を見ている者全てにも聞こえる。

そう言った凰鈴音は両手に持っていた武器を柄、頭部分で連結させると、具合を確かめるためかバトンの如く軽快に自身の周りで回転させる。そして、一夏に対して半身に構え腕を引き、連結したそれを腰だめに構えた。何をするかと思っていると、引いていた武器を砲弾の如く突き出し、一夏に向かって突撃した。

一夏はなんとか躱したが、俺はその機動に驚いていた。

人では無理な上に威力が出ない動きだが、パワーアシスト、スラスターなどの機能により予想外の動き、威力を出せる。

俺の世界の機動兵器なら確かにできるだろうが、大半の機体が操縦の特性上あそこまでのトリッキーな動きはできない。

そして生身の人間なら腕と脚しかないので、あの速度で突き出す動作ができない。

どちらも一部の人外レベルの人間ならできるだろうが、その一部以外は確実にできない。

『機械にはない』柔軟な動き。『人体にはない』補助動力。人が乗るというよりは装着する、マルチ・フォームスーツであるＩＳは基本人間の動きだ。だが、そこには人体にはない機械がある。“人間”と“機械”これらが混在することにより『ない』が埋まる。

先の突きはＩＳだからこその機動だ。改めて、ＩＳと自分の世界

の機動兵器との違いを知る。

一夏が躱すが、凰鈴音はすぐにまた武器を回転させ、再び突きを放つ。斬り付け、斬りおろし、頭部への蹴り、体ごと回転して斬り付ける。見事なまでの連撃。

さっきより大振りの攻撃になってしまっているが、だからこそ威力が上がり、なおさら下手に受けるわけにはいかず、一夏は避け続けるしかない。様々な角度からの繰り出される斬撃を避けるのは容易ではなく、普通なら何か所か持っていかれてもおかしくない。

だが相手は、あの特訓でひたすら回避し続けた一夏だ。この程度なら問題ない。

白式の【零落白夜】は自身のシールドエネルギーと引き換えにバリアーを無効化する諸刃の剣だ。そのためシールドエネルギーは極力温存しなければ、いざというとき使えない。

そのために最も効率が良いのは被弾しないこと。そうすれば、『絶対防御』を発動させなくて済み、最低限のエネルギー消費で済む。だからこそのあの射撃の雨だ。

回避能力だけなら、今の一夏は代表候補生に届くだろう。

だが避けるばかりでは勝てない。このままではジリ貧だ。自ら仕掛けないものに勝機は訪れない。

一夏も分かっているのだろう。一旦距離を取ろうとバックステップで大きく回避する。

だが、

『甘いっ！！』

凰鈴音が叫ぶと非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）である球状の棘付き装甲（スパイク・アーマー）が展開され、突然一夏がバランスを崩した。まるで、砲撃の余波に巻き込ま

れたかのように。一瞬遅れて、アリーナの遮断シールドに衝撃が走った。

『ふふん～今のはジャブだからね』

そして、次の瞬間一夏が吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

（……なんだ今のは？砲撃か？）

「なんだ、今のは！？」

俺が内心で思っていたことを箒は口に出して驚いていた。そして、その疑問に答えたのは意外にも山田真耶だった。

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す武器です」

「わたくしのブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわね」

この説明の合間にも砲撃は続いており、一夏は転がるようにして避けている。地面が抉られている着弾をみると、連射性能もそれなりにあるようだ。

『よく躱すじゃない。この≪龍砲≫は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに』

「しかも、あの衝撃砲は砲身の射角がほぼ制限なしで撃てるようです」

確かに、あの≪龍砲≫とかいう非固定浮遊部位の中央が向いてい

る方向と着弾地点がずれている。

「つまり、死角がないということですの？」

「そういうことになりますね」

（厄介な武器だな…だが）

「織斑君、勝てるかな？」

今回は敵対クラスだというのに庵璃は一夏のことを心配している。そんな庵璃を気遣うわけではないが、その問いには返答する。

「勝てる見込みはある」

俺としては苦戦する要素はあるが、負ける要素はないと思っているから心配などしていない。

「へー、そうなんだ」

この一言に庵璃はそれだけ返すと、モニターをまたじっと見始めた。

（……）

「……もし負けたら、また“アレ”をやるか」

「「……え！？」」

（……！？なんか寒気が！！）
「くっ！！」

一瞬、物凄い寒気が全身を襲ったが、鈴の砲撃を前にしてそんなモノに構っている暇などない！砲身が見えないのがこんなに厄介だとは……弾道予測ができやしない。

（ハイパーセンサーで空間の歪みと大気の流れを探ってるけど、それじゃ遅い。撃たれてから分かってるようなもんだ。どこかで先手を打たなきゃ、このままじゃ……）

こうしている間にもどんどんシールドエネルギーが削られていく。回避できずに掠っている分が蓄積していっているんだ。一撃一撃は重くないけどこのままじゃ、【零落白夜】も使えないほど減ってしまう。

（考えろ。考えるんだ。このまま負けるなんて……、折角俺のために時間を割いてくれたみんなに、千冬姉に、顔向けできねぇ！）

アレの翌日、千冬姉がアレを止めた後少しだけだが指導してくれた。その時に率直な疑問をぶつけた

「白式の武装って、この≪雪片弐型≫だけなのか？」

そう言って、俺は右手にある刀を見る。あの試合の後、そして昨日の特訓の時にも探したが、これしか見つからなかった。確かに剣道してた分、馴染みはあるがこれ一本となると心許ない。

「私もそれだけで優勝した。その一振りだけで十分だ」

「世界大会優勝者といっしょにされても困るんだが……」

――――ビシッ！！

「うっ！」

「大体、お前のような素人が射撃戦闘などできるものか。反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止（イチセロ）、特殊無反動旋回（アブソリュート・ターン）、弾丸の特性、大気の状態、相手武装による相互影響を含めた思考戦闘……他にもあるぞ。できるのか、お前に」

「うぅ……ごめんなさい」

言ってることがまったく分からない。唯一身の程知らずってことだけは分かった。へこむ。

そんな俺の気持ちと呼応してか、白式のスラスター翼も心なしかしおれている気がする。

「一つのことを極める方がお前には向いているのさ。なにせ――――私の弟だ」

「千冬姉……」

「フン、私からお前に一つだけ教えてやる。だが教えてやるだけだ。

自分で物にしろ」

あれから特訓の合間に練習してきた『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。千冬姉曰く、「出しどころさえ間違わなければお前でも代表候補生クラスと渡り合える。ただし、通用するのは一回だけだ」そうだ。

鈴はセシリアと違って戦闘に入ると冷静になる。こういうタイプは強い。油断も慢心も生じないからだ。唯でさえ実力が離れている上にそれでは運で勝てるものではない。

勝つためには【零落白夜】と『瞬時加速』。そして、ベルクトに教えてもらったアレ。持てる全てを使わなければ勝てない。

（後は負けない意志を持つこと……）

「フゥー、鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……！と、とにかく格の違いってのを見せてあげるわ！」

俺の言葉に気圧されたのか、どもりながら斬りかかってくる。いや、顔が赤いから怒ったのか？どこにそんな要素が……。

（って、今はそんなことどうでもいい）

鈴の斬撃を躱し、そのままステージを翔け巡る。鈴も衝撃砲を連射しながら追撃してくる。それをギリギリ躱しながらステージ上方、アリーナの限界高度近くまで上がり、一気に中空まで下降。

そこで緊急反転。追ってくる鈴に斬りかかるが予想通り、あの異形の青龍刀で防がれる。そして、また離れステージを翔け巡る。

（一瞬でいい。一瞬だけでも俺の姿を見失ってくれれば……！）

チャンスが訪れるのを信じ、被弾しながらもひたすらに空を翔ける。悟られぬように所々に攻撃を入れて、ドッグファイトを続けた。

そして、チャンスは来た。

「ッ……！」

（今！）

俺を見失ったこの瞬間に、瞬時加速。一瞬でトップスピードに乗り、鈴に急接近する。このまま、斬り付ければ――――

「フン、あんたが考えてることなんてお見通しよ！！」

避けられた。寸前で。

（だろうな…けど――――）

「流石に瞬時(それ)加速は予想が――――――いっ」

――――バゴォォォォォ！！

（本命はこっちだ！）

鈴の顔面に俺の踵蹴りが入り、アリーナ観客席下の壁まで吹き飛ばす。これがベルクトに教えてもらった、『シールドバリアーを纏った蹴り』だ。俺命名『ブレードキック』。

本来防御に使うバリアーを攻撃に転じた攻撃。強固なシールドをピンポイントで発生させ、そのまま相手にぶつける。シールドを角錐や円錐、最終的にはブレードなど鋭利な状態でイメージするといいらしい。

相手にはスピードの乗った程度の蹴りと思われるが、実際はさっきのイメージ形状と合わさってかなりの威力がでる。クラス代表決定戦の時にベルクトが俺にしたことだ。

ただこれ、【零落白夜】ほどではないが、エネルギーを喰うので多用は厳禁だ。それに強度設定を見誤るとシールドバリアーが破壊され、『絶対防御』が発動してしまうから武器とぶつけるのは推奨できない。

機動で攪乱。それによって生まれた隙に、瞬時加速を使って懐に潜り込む。そして≪雪片弐型≫での斬りかかりと『ブレードキック』による二段構えの攻撃。

俺の性格をよく知る鈴だ。俺が攪乱させるための機動を取り始めた時点で何かするのは感づいていただろう。故の二段構え。

（さて、これで半分は削れたか？）

状況を打開するために『絶対防御』発動を狙い、ほぼ剥き出しの頭部を狙ったが、いくら『絶対防御』があるからとはいえ女の子の顔を蹴ったのはまずい。後で鈴に謝ることが増えたな。

（というか学園中の人間、敵にしかねないな……俺大丈夫かな……）

「一夏ぁぁ！！女の子の頭蹴るとかどういう了見よ！！」

「…やっぱりそうなるよなー」

衝撃砲をぶっ放して、怒りを露わにする鈴。正直言って超怖い。

（だけど、それにビビッて負けるわけにはいかない）

「さて、後半戦といこうか」

「あんた、絶っっっっっ対にボコボコにしてあげる！！」

互いに意気揚々、全力全開の勢いだ。このまま、さらに激しくなると試合を見ている全員が思っていた。だが、次の瞬間それは叶わなくなった。

いや、ある意味では叶ったともいえる。確かにこの後の展開は激しくなるのだから。

――――ズ、ドォォォォォォ！

アリーナが――――揺れた。

第１２話　クラス対抗戦（後書き）

次回も更新かなり空きそうです。専門って忙しいんですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1240s/

ACE × IS

2011年9月5日10時12分発行